２００４年度
渥美国際交流奨学財団年報

Atsumi International Scholarship Foundation

Annual Report

渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき
日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、
１９９４年４月１日に設立されました。
当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に
奨学援助をいたします。
日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、
豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますよう
お手伝いさせていただきたいと思います。
若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、
人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、
やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

２００４年度
渥美国際交流奨学財団年報

目　　次

◇ 理事長のことば 「『もったいない』という言葉」　渥美伊都子 ----- 2

◇ 渥美国際交流奨学財団設立１０周年記念事業 ----- 3
・記念講演会　緒方貞子氏「人間の安全保障について」
・記念出版「だから私は日本を選んだ－外国人留学生が見たサプライズ・ニッポン－」今西淳子編

◇ 交流事業・思い出
・軽井沢旅行 ----- 22
・渥美奨学生の集い　加藤秀樹理事講演会「中小・ローカル・ローテクが日本を作る」 ----- 25
・新年会 ----- 26
・研究報告会 ----- 27

◇ ２００４年度奨学生のページ「エッセイ」 ----- 30
◇ ２００５年度奨学生のページ「自己紹介」 ----- 45
◇ 海外学会派遣プログラム参加報告 ----- 58

◇ ＡＩＳＦネットワーク
・ラクーン会 ----- 64
・第４回日韓アジア未来フォーラム ----- 70
・関口グローバル研究会（ＳＧＲＡ） ----- 72

■ 渥美奨学生２００４年度著作・発表論文・特許リスト ----- 74

□ 付録 ----- 90
・設立の趣旨について
・２００４年度業務日誌
・２００４年度収支決算、貸借対照表
・財団人名簿
・奨学生名簿
・２００６年度渥美奨学生募集概要

理事長のことば

「もったいない」という言葉

渥美伊都子

渥美国際奨学財団では本年２月 16 日に創立十周年を記念して講演会を開き、海外協力機構（ＪＩＣＡ）理事長の緒方貞子様に「人間の安全保障について」と題して基調講演をして頂きました。又これを記念して当財団の奨学生の方たちの目を通して日本を語ってもらった文章を本にまとめ「だから私は日本を選んだ！」を出版することが出来ました。これもひとえに当財団をご支援下さった皆様方のおかげと深く感謝申し上げます。

さて日本は地球温暖化を防止するため京都議定書を採択した時の議長国として、二酸化炭素ガスの排出量を削減する運動に力を入れています。この事を知った昨年のノーベル平和賞の受賞者で、ケニヤの環境相のワンダリ・マータイさんが今年初めて来日されました。その折にごみの減量や再利用に取り組む日本ではこれを「もったいない」という言葉で表現していることがわかり、この言葉がとても気に入ったそうです。そして帰国後ナイロビに本部を置く国連環境計画の事務局長と会談した際「もったいない」運動を起こすことを決め、機会あるたびに「限りある資源を有効利用し、公平に分配すれば資源をめぐる紛争は起きない」と訴え続けています。

このように急に国際的になりつつある「もったいない」という日本語ですが、主人はこの言葉が大好きでした。今から 30 年前、日本の戦後の復興が進み高度経済成長期には、消費することこそ美徳と思われた時代がありました。その時主人は少しおかしいのではないかと感じていたようで、鹿島の月報に書いた文章の一部を紹介したいと思います。

生まれつき貧乏性なのか、或いは戦争の苦しさをいやというほど経験したためか、私はどうしても「もったいない」ということを何かにつけて考えてしまう。これは消費によって新しい有効な需要を呼び起こし、その有効需要によって生産が拡大し、経済活動が無限の成長過程をたどるというロジックであろう。しかし私としては子供の頃「一粒の米でさえ、農民の汗の結晶であり、おろそかにすると罰があたる」と教えられてきたが、その教訓のほうが、何か人生の本質に触れているような気がする。

もちろん「もったいない」という判断は、ひとりひとりの生活の範囲や次元によって一律的なあらわれ方はしない。ある人にとってはいかにも「もったいない」と感じられることでも、別の人が違う見方をすれば、一つの貴重な投資であり、将来において、より大きなメリットをもたらす場合も少なくないであろう。だが、人びとがそれぞれの次元で「もったいない」と反省する心こそ大切であり、それが家庭なり企業なりを向上させる合理的精神につながるものではなかろうかと思う。

私達は環境保護のためにも、地球温暖化防止のためにも常に「もったいない」という気持ちを持つことこそ大切なのではないでしょうか。

渥美国際交流奨学財団
設立 10 周年記念事業

記念講演会

２００５年2月１６日（水）16：00～20：00
鹿島建設 KI ビル地下大会議室

プログラム

16：00　開会
　　あいさつ　渥美国際交流奨学財団　理事長　渥美伊都子
　　事業報告　渥美国際交流奨学財団　常務理事　今西淳子

16：20　記念講演
　　「人間の安全保障について」
　　緒方貞子　独立行政法人　国際協力機構（JICA）理事長

18：00　レセプション

20：00　閉会

司会：　渥美国際交流奨学財団　事務局長　嶋津忠廣
　　2002 年度渥美奨学生・日本大学講師　于暁飛

記念出版

「だから私は日本を選んだ！」
－外国人留学生が見たサプライズ・ニッポン－

今西淳子編

２００５年2月１６日　株式会社ジャパンブック発行

渥美財団、１０歳のお誕生日おめでとう！

２００５年２月１６日（水)、人類の歴史の新しいページを開く京都議定書の正式発効とともに、渥美国際交流奨学財団の設立１０周年を祝うイベントが、東京赤坂の鹿島 KI ビルで開催された。当日の朝の震度５の地震や冷たい雨にも関わらず１８０名もの関係者が集まり、渥美健夫氏の遺志で１０年前に設立された、規模が小さいが夢が大きいこの財団の記念日を一緒に祝ってくださった。

渥美理事長と今西常務理事の指導のもと、数週間前から数回にわたる準備会を重ねてきたが、当日は現役と来年度の奨学生らで構成する渥美奨学生、元奨学生からなるラクーン会、ラクーン会から発展した関口グローバル研究会（SGRA）の運営委員と研究員・会員（とその子供たち)、そして鹿島建設の皆さんがお手伝いに駆けつけ、記念講演会の成功に繋がった。渥美ファミリが一堂に動いたと凄く感じた。

記念講演会は午後４時に始まった。最初に渥美理事長から財団の設立の背景と特別講演をされる緒方貞子さんのことについてお話があった。次ぎに、今西常務理事から、パワーポイントのスライド付きで、財団の設立からの今に至る経緯についての説明があった。遠慮深い理事長から「あまり宣伝しない」と言われたということだったが、常務理事は SGRA のコンセプトは渥美財団と一致していると断った上で、財団の話に重ねて SGRA の紹介とその活動へのお誘いを、遠慮なく発表した。

午後４時半ごろに、JICA の理事長である緒方さんがみえて、一休みもせずに「人間の安全保障」というテーマの講演が始まった。奨学財団の講演会だから教育という側面に関心が高いであろうという前提で、人間の安全のためには人間を強化すべきなので、その一つの有力な手段として教育が非常に重要であるということにお話の焦点が当てられた。特に、国際教育の面では多様性を尊重し、排除しない inclusive な人を育てる教育が一番大事だとされた。このような特質の欠如こそが人間の安全を脅かすと強調された。これは、確かに、渥美財団と SGRA の「多様性のなかの調和」という原理に基づく「良き地球市民の実現に貢献」というビジョンと一致している。同時に、「グローバラゼイション」という名で呼ばれている、あまりサイレントではない津波によって、この多様性の尊重が実現できるのかどうか考えさせるところだった。「会場の皆さんと一緒に考えましょう」という緒方さん自身のお招きもあって、さばききれないほどの質問を受けてから、記念講演は、午後５時４５分に終了した。

その後、緒方さんにもお時間が許す限り参加していただいて、KI ビルのカフェテリアで懇親会が開かれた。渥美財団の選考委員長を１０年間務めていらっしゃる、「失敗に学ぶ」というベストセラーで有名な畑村洋太郎先生の挨拶と乾杯でスタートした。参加者全員がレセプションを楽しんだ。渥美直紀鹿島副社長が、建設業らしく、三三七拍子の手拍子とともに中締めをした。

様々な方々とお話ししたが、なかでも、渥美健夫さんの同期で、毎年数千人の留学生の面倒をみているロータリー米山記念奨学会の加美山節副理事長（渥美財団評議員）からいただいた「素敵な財団ですね」という言葉が大きいなお祝いになった。渥美健夫さんもきっと同じことを考えているであろう。

（文責：第１期渥美奨学生・アジア太平洋大学
研究助教授　マキト）

講演録

人間の安全保障について

独立行政法人　国際協力機構（JICA）理事長
緒方貞子

（司会）　本日は大変ご多忙のところを緒方様に記念講演をお引き受けいただき、お越しいただきました。誠にありがとうございます。一休みしていただく時間もお取りできず本当に申し訳ございませんが、早速講演に移らせていただきたいと思います。

本日は「人間の安全保障」というテーマでご講演をいただきます。本日のプログラムの中にご経歴と、今日のご講演に関する人間の安全保障委員会報告書についての外務省の発表を載せさせていただきましたので、皆様にはご参照をいただきたいと思います。

それでは、緒方様どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は渥美国際交流奨学財団の 10 周年の記念に話をするようにとお招きいただきましてありがとうございます。財団をお作りになるご相談をいただいてから、本当にいろいろお尽くしになられて 10 年になったことについて、尊敬申し上げておりますし、心からおめでとうと申し上げます。

現在の国際状況を一言で申し上げますと、昨年末にスマトラ沖地震とインド洋の津波があり、日本でも地震や台風などいろいろな災害があった時期だけに、身につまされた思いでこの年末年始を迎えたというのが、日本の多くの皆さんが感じたことだったと思います。死者、行方不明者を合わせると約 30 万と言われておりますが、そのような自然災害の恐ろしさを痛感したと思います。

また、中東のイラクでは 1 月 30 日に国民議会の選挙が行われましたけれども、それに至る過程では非常にたくさんの襲撃事件やテロ事件が起きました。どちらが体

制か反体制かもよく分からない状況の中で、イラクがある程度安定していくのかどうかということを、みんなが非常に注目しながら見守っています。

このように大きな問題はたくさんありますが、一つだけ私が感じましたのは、天災の場合には割と素直にだれでも手伝いに行けるのだなということです。その意味で立ち上がりが早かったのは、これが天災であって、どちらが悪いとか、どちらが政治的に正しいとかそういうことなしに、皆さんが真っすぐ被災者の立場に立って考えることができたからだと思います。

１月の後半は、私は国際会議でずっと日本にいませんでした。津波の大災害については、日本をはじめアジアの国々、世界中の国々が一斉にいろいろな支援に出ましたが、「静かな津波」が大変深刻な形で展開しているということを、皆さんはどのぐらい感じているでしょうか。これはアフリカの国々の代表から出てきたことです。「サイレント津波」と言われたのですが、それはどういうことかというと、アフリカでは感染症（マラリアがいちばん多い）や貧困その他で毎日6000人の子供が死んでいます。これがずっと続いているではないかというのです。それに対応する国際的な反応というのはあまりに弱いのではないか、遅いのではないかという批判が出てきたわけです。

私たちは、これこそ非常に大きく危険な状況だと思っています。自然災害、あるいは紛争等と比較すると、この静かな、長い間の貧困というようなことから起こる、これも人災なのだろうと思いますが、そういうものの深刻さということについての意識はあまりに弱いのではないかという声も大分あがってまいりました。

世界の人口の約２分の１が１日２ドル以下で生活している。そして世界の12億人、つまり世界の人口の約５分の１は１日１ドル以下で生活している。貧困人口の割合は高く、地域によって富んでいる人と貧しい人の非常に大きな差がある。そういうことが最近一段と言われてきております。東アジア地域では人口の16％の人々が貧困状態にあると考えられているのですが、アフリカ地域では約50％に当たる３億人が、つまり日本の人口の３倍がこのような貧困状態にあります。これもまた現実なのです。

そういう現実を意識しながら、一体どういう形で今、世界が変わってきたか考えてみましょう。一言で言いますと、非常にグローバリゼーションが広がってきた。つまり、国境を越えて人、もの、お金、情報、これが非常に大量に、かつすごいスピードで動くわけです。例えば人について申しますと、よりよい就労の機会を求めて人々は移動します。この人たちをいろいろな形で管理することも、きちっと守ることもできないという現状です。

また、武器市場にしても、いろいろなところからいろいろな武器がいろいろなところに流れている。これもまたきちんと管理できない。テロの多発、感染症、大規模な自然災害にはグローバリゼーションの影響があって、これをきちんと管理できていないのです。この管理できないほど激しいグローバリゼーションの中で、一方では相互依存の実態というものに注目しながら、その相互依存の中でなるべく多くの人たちがきちんとした、安定した暮らしができるようにするにはどうしたらいいかということが、大きな課題としてあると私は思うのです。

そういう中で出てまいりましたのが「人間の安全保障」という考え方です。多様な脅威が、いろいろ違った形で出てきますけれども、だれもグローバリゼーションを止めることはできません。どの国もどの政府も、簡単に言ってしまえば、人とものとお金と情報、こういうものの流れを止めることはできません。ですから、専制国家とい

うものも、なかなか現実的には国民を抑えることができないだろうと思うのです。

こういう実態の中で一体どうすれば人々に安全だという実態を与え、また印象も与えることができるのだろうか。こういう考え方から「人間の安全保障」を考える委員会ができまして、私はたまたま国連の仕事を終えてから２年間、この人間の安全保障委員会の共同議長を務めたわけです。そして報告書を取りまとめました。その報告の一端として、皆さんが一生懸命努力していらっしゃる国際交流の問題、それから奨学金の問題等をどういうふうに位置づけたらいいかということについて、今日は私なりに簡単にお話ししようと思っています。

人間の安全保障というのは何でしょうか。この委員会はいろいろな国のいろいろな仕事をしていた委員のかたが集まってできたのですが、私と一緒に共同議長となられたのはインドの経済学者で、どちらかといえば哲学者のような、アマルティア・セン教授というかたです。第一に、一体人間にとって安全という意識はどうやって出てくるのだろうか、安全ではないという意識はどうやって出てくるのかというようなことから討議を始めました。

この委員会はニューヨークに事務局があり、そこで仕事をしたのですが、では一体人間の安全保障とは何からの保護というものを考えたらいいかということになりました。何から人間を守るかといえば、当時のことですし、2001 年 9 月 11 日の世界貿易センタービルへの攻撃等もあったものですから、テロに対しての予防、これこそが人間の安全保障の守る道だというような答えが出てきたわけです。

それに対して「ではどこでもテロがいちばん大きな脅威と考えているのだろうか」という疑問がでました。たまたまアフリカの委員もおられたので、３日間、南アフリカでヒアリングをしたわけです。そうすると、「テロなどというものではない。明日の生活がどうなるか分からないのだ」ということでした。お金の問題であり、貧困の問題であり、病気の問題であり、それから職業の問題です。あした生きるか生きられないか分からないような貧困状況なのです。そういう中で暮らしていることこそ人間の安全保障にとっては一番の大きな課題なのです。そういう答えが出てきたわけです。このように、どうやって人間の安全保障というものをきちんと定義し、それに対応する策を提案できるかということが大きな悩みでした。

私自身がどうして人間の安全保障というようなことを考えるようになったかと申しますと、私はその前の 10 年間国連の難民高等弁務官として非常にたくさんの難民の支援と救済をしました。その当時のいちばん大きな特色は、冷戦が終わったあとで国内紛争が大変多かったことです。国内において部族と部族、民族と民族、宗教団体と宗教団体、そういうものの対立があって、そして多くの場合政府もその一端を担いでいました。政府がきちんとしないでどちらかを弾圧するというようなことから発生するたくさんの紛争があって、私は難民を保護し救済しながら、人間の安全保障というものは政府に頼るものではないということを痛感したわけです。政府がきちんと統治していれば、安全保障というのは国と国との対立という形でこれを理解して、政府に頼っていればいいのですが、現実の生活、現実の世界はそうではありませんでした。

そのようなことから、もっと人間そのもの、人々に注目した安全保障というものを考えるべきだということで仕事を始めました。アマルティア・セン教授の場合は貧困ということだけに注目されたわけではなく、人間というものは本来生まれ持った尊厳と自由を十分に発揮するべきものなのに、それを阻害するものは全て人間の安全保障を脅かしていると定義しておられたのです。

さまざまな深刻な脅威から人間を守るために、そしてまた人間が持っている限りない豊かな可能性というものを実現するためにどうするかという形で取り組みを始め、結論的に申しますと、これは二つの方向から人々を守らなければならないということになりました。一つは政府、あるいは国家と申し上げてもいいですが、上からのきちんとした統治をするということです。きちんとした統治というのはどういうものかといえば、行政の能力がきちんとあることです。法による秩序の形成ができることと定義される、上からの統治です。それに対してもう一方は、下からの、人々による自治能力の強化があります。統治と自治、このふたつが相まって初めてきちんとしたガバナンスができるのです。それこそが人間の安全保障にとっての一番の答えだろうということになりました。次に政府のほうから見ての統治力の確立をするに

はどういう方策を執ったらいいのかを考えることになります。そして人々にとって自助努力というものを強化するにはどうしたらいいかということになり、かなり実態調査もいたしましたし、幾つかの領域に集中して分析し、提案を試みたわけです。

例えば統治のほうに関連して、いろいろな紛争が起こったときに、その紛争下でもどうやって暴力の犠牲となる人々を守っていったらいいでしょうか。それについてはそれなりの法体系があります。ジュネーブ条約その他から、難民の保護条約がどうやってきちんと守られていくのか。あるいは、国と国の間でいい仕事を求めて動く労働者がいっぱいいるわけですが、しっかりとした国際的な取り決めも弱いし、そしてまた多くの場合、この移動労働者の人権等も守られていない。そういうことに対してはどういう取り決めが必要か。また、ようやく紛争から平和が出てきそうな状況にあるのに、その過程における決まった規則もなく、そしてまた政策もきちんとしない形で放置されている。そういうときにはどうしたらいいのだろうかというような調査もいたしました。さらに人々の力をつけるにはどういう領域が良いのか。一つには経済的、社会的安定の問題です。もちろん就労の問題もあるのですが、社会保障をどういうふうにして確立するか。これは財源等も絡みまして非常に複雑です。それから今一つは保健衛生の問題。一体どういう形できちんとしたグローバルな保健衛生システムを確立し、それへのアクセスを確保するか。

そして最後に非常に大きい問題として、いろいろな形で討議したのが、教育の問題です。教育というのはいろいろな形での基礎になるから、どういうふうに教育を扱っていったらいいか。そういう大きな領域にわたって人間の安全保障というものを吟味しましたし、それに対するいろいろな提案を出したわけです。

今、私は国際協力機構（ＪＩＣＡ）の理事長でＪＩＣＡの仕事を預かっているのですが、ＪＩＣＡのような開発援助をしている機関にとっては、この人間の安全保障を開発援助のプログラムの中でどうやって実現していくか、どうやってこの枠組みを適用していくかということが大きな課題になっております。ＪＩＣＡでは、人間の安全保障を一つの事業の方針として採り上げ、協力事業の中に織り込んでいます。一言で言ってしまえば、人々を中心に考え、すべての援助が人々に届くように、そしてまた援助の対象として人々に利益をもたらすように、そしてさらに人々の力をつけることによって、その人たちが今度は国作りの一番の土台になっていくように援助事業を見直しておりますし、そういう形で事業の実施を進めております。

ＪＩＣＡの仕事についてもいろいろお話しすることができるのですが、今日はせっかく国際交流奨学財団の皆様とお話しする機会をいただきましたものですから、特に教育について、一体教育というものがこの人間の安全保障を確立するうえでどういう意味を持つかということについて、ご一緒に考えさせていただきたいと思います。

人間の安全保障委員会も教育を中心的な課題として採り上げました。それは結局教育が人々の能力を強化する基礎になるからです。かぎなのです。それだけではなく、今度は教育を受けた人々が連携することによって、そのうえにシビル・ソサイエティが成立していく。教育を受けた人々の連携というものこそ、コミュニティ作り、社会作りの基礎になる。こういう考えに基づいて、教育というものを非常に大事に採り上げております。

まず、そもそも国内において教育をしっかりするということはどういう意味があるのでしょうか。私たちは、基礎教育の普及が人間の安全保障の確立を果たすためのかぎであると見ており、特に女児の教育を重視しております。今、世界的に、国連においてもいろいろな開発の指標を出しておりますが、その中でも女児の教育ということがかぎだというふうに、方々で唱えられております。どうしてかというと、読み書き、計算ができる人たちは自分の身を守る第一の条件を満たすわけです。読み書きができれば、何を選ぶかというこ判断もできますし、何が危険かということを文字で知ることもできるわけです。ですから、読み書きができるということこそが人々の生命と生活を守るかぎになっている。そして、読み書きができれば、保健衛生システムにもアクセスもできますし、それを利用することもできるのです。

簡単に言ってしまいますと、教育を受けた母親の子供と教育を受けていない母親の子供を比較すると、教育を受けた母親の子供は５歳まで生存する確率が倍になっています。これはガーナの場合ですが、こういうデータが出てきているのです。ですから、教育を受ける、基本的な読み書き、計算ができるということがいかに母親に

とって、そして母親から出てくる子供にとっても大きな意味を持つかということが分かっていただけると思います。

私はここのところ２年ぐらいアフガニスタンの復興について直接何回かアフガニスタンにまいりました。特に女性の教育ということでは、アフガニスタンは非常に遅れたのです。それは 90 年代の半ばからタリバン政権が成立したからです。タリバン政権は非常にファンダメンタリズムのイスラムの考えを採り入れて、女性を外に出さない、女性には教育を与えない、そして女性に仕事は与えないという非常に閉鎖的な対応を執ったために、女性の教育が非常に遅れてしまったのです。そういうこともあって新しいアフガニスタンが出発したときに、国際的にはアフガニスタンの女性の教育、そして女性を中心とした医療ということを大きな旗頭に立てたわけです。それは大変結構なことだったのですが、アフガニスタンのように農村社会で非常に保守的なところだとなかなか農村の女性は表に出てきません。表に出てこないから教育はなかなか受けられない。アフガニスタンが戦争をしていた間に学校へ行けなかった子供たち、特に女の子たちに対しては、何とか教育を与えようということで、早くからユニセフが中心になって「バック・トゥ・スクール」プログラムを作ったわけです。１日３交替ぐらいでやっていました。今では 500 万近い子供たちが学校に行き出しています。

ところが、田舎のほうではお母さんたちは教育を受けていなかった。そういう落差が一体どうなっていくのか。そういうことも非常に気になりましたし、私は一度、田舎の村の人たちの集会に行きました。そういう集会も組織化されていて、それこそこれからの進歩の旗印だということで行ったのですが、行ってみますと、会合に出席をしたのが全部男の人たちで、りっぱなひげを持っているおじさんたちがいっぱいでした。そして、ここのところに水を持ってきてほしいとか、クリニックがほしいとかいろいろな注文をしています。どこかから「女のかたたちにも会いたいですか」と聞かれたので、「もちろん会いたいです」と言ったら、「みんな家の中で待っています」ということで、比較的大きな家の２階に上がりました。すると女の人たちだけがいっぱいいたのです。そしてそのかたたちに何が欲しいかと聞くと、水が欲しいとかいろいろなことを言っていました。「この中で読み書きのできる人は何人ぐらいいるのですか」と聞くと、読み書きのできる人は 10％、せいぜい 15％ぐらいでした。それが保守的なアフガンの村の実態なのです。

学校にはみんなが行きたがっています。非常に元気な女の子がいて、「何になりたいですか」と聞くと、「医者になりたい」とか「エンジニアになりたい」とか言います。教育を受けた女性は都市にはいるのですが、田舎にはなかなかいない。そういう落差を埋めていかないと、本当の自治の力を持った社会、国民というのはできません。だから女児の教育、そしてお母さんたちの教育にもっともっと力を入れなければ、本当によく統治された国はできないと考えました。よく統治されていない国というのは危ない国なのです。病気も蔓延しますし、人権も侵されます。ですから、よく統治された国の一つのかぎはやっぱり教育なのです。特に女児から始めて女性に広くわたる教育をしないと、いつまで立っても幼児の死亡率は高く、国が伸びないということになると思います。

また、教育を受けないと、雇用による収入というものが得られません。アフガニスタンの例ばかり申し上げますが、昨年 11 月に行きましたときにも難民だった人がたくさん移ってきて、一つの集落を作っていました。そこで男の人たちにはピーナッツ工場を造ってあげました。ピーナッツの皮をむいて、そこから油を取って収入を得るということを難民から帰ってきた人たちに教えたのです。女性が集まっているところで「一体どうしていますか」と聞きました。いろいろなＮＧＯの人たちが来て、読み書きを教えたりなどしていたのですが、ちょうど選挙のあとだったものですから、「皆さん選挙に行きましたか」と聞いたら、驚くほどほとんどの人が手を挙げて「行きました」と答えます。だんだんそこから話がほぐれて、今度は「私たちもピーナッツ工場が欲しいのです」と言うわけです。「私たちも稼ぎたいのです」と。そんなことをアフガンの女性から聞いたのは初めてでした。つまり、機会が出てくると意識というものが広がるのです。意識が出てくると希望も出てくる。希望が出てくると進歩が出てくるわけです。いろいろな形で底辺から積み上げていくということがいかに大事かと痛感したわけです。民主的な政治だとか、民主的な活動ということを打ち立てるためには、そのための能力作りが必要です。その能力作りの基本になるのはいろいろな意味での教育です。学校教育だけでなくいろいろなインフォーマルな教育をする、いろいろな機会を作る、働く機会を作る、人と話す機会を作る、コミュニティ・ビルディング

が非常に大きなものになっているということを痛感したのです。

今度は国際的に考えてみましょう。グローバル化する世界において教育がどういう形でというものが意味を持つのだろうかということを、人間の安全保障委員会でいろいろ討議いたしました。世界の中にはいろいろな多様なアイデンティティーがある、多様な信条、信仰もあれば、歴史もある。そういうものを広く知って、そして違ったもの、自分と違うものを尊重する心を作り上げていく。これが人間の安全保障にとって重要だという結論になりました。ですから、学校教育の教育課程において男女間、民族間、あるいは宗教間等に内在しているいろいろな人々の偏見というものをどうやって取り除いていくか。これが国際的な教育の目標であり、そのためにはいろいろな教科の中にやはり多様なもの、違うものに対するセンシティビティーを植えつけていかなければならないということです。そして、これは大変難しいことだと思います。

私は日本においても決して十分ではない面があるのではないかと思います。特に歴史教育は重要性です。歴史の違う人々が、しかも戦った、あるいはお互いに対立し合った、そういう歴史を持っている人たちの間でどうやってお互いの過去を知り、そしてこれを理解し、それにもかかわらずどうやって尊敬していくか。これが実は世界平和のかぎになるのです。そのために、共存のための教育プログラムなどを考えているかたたちもいます。簡単に言ってしまえば、多様性の尊重をどう養成するか、これが実は国際的な教育の大きな課題であると思います。

こちらの奨学財団にどのぐらいの国からどういうかたが来られているかというところまで私は承知していないのですが、やっぱりこういうことをお考えになって始められたと思うのです。グローバル化の進む世界が相互依存の進化する世界であるということを認識したときに、いろいろな異なった背景、願望、歴史を持った人々の間でどうやってお互いを知り合うか、そしてまた知り合うだけでなく尊重することができるような、そういう態度を養成するためにどうやって育てていくか。それが恐らく留学とか、国際的な研究とかの一つの課題であると私は思います。異なった価値、アイデンティティーの共有から相互理解へ進むということをまずどうしても認識しなければならない。それは容易なことではないと思います。

日本ではどうしてそれができないのでしょう。日本は単一民族、単一言語、単一文化であるというようなことをいっていたのですが、実際はそうでもないのではないでしょうか。私もここ 12 ～ 13 年、もちろん日本にはまいりましたが、住んでいませんでした。帰ってきましたら、一面非常に国際的になったように見えます。言葉なども私の分からない日本語がいっぱいあるのです。英語のような日本語にはあまりよく分からないものがたくさんあるのですけれども、それでいて極めて日本にしか通じないような価値観というようなものを謳歌しているというのでしょうか、そういう印象も持つわけです。島国でありながら、それでもいろいろな国の人々、いろいろなバックグラウンドを持った人がたくさん行き来しています。情報に至ってはめちゃくちゃというか、非常にいろいろな種々雑多な情報があふれていて、それを理解し、消化する時間があるのかなということを感じることも多いわけです。そういう中でどうやってしっかりとした自己の位置づけ、他者の位置づけ、そしてその相互の連携が考えられるのか。ここにいらっしゃるかたがたはいろいろな形で留学していらしたり、留学する世話をしたり、奨励しておられるかたがただと思うのですが、どうやってそういう仕事に本格的に取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

私自身も大昔、五十何年前に留学しました。そしてアメリカへ行ったときに初めて自分の国についての本当の好奇心というものを持ちました。自分の国というのは当たり前のものとして育っているから、あまりそれを改めて考えるという機会は留学するまでなかったのです。帰ってきてから日本の歴史、特に政治外交史を勉強するようになって、一応気が済むところまで何年かかけて勉強しました。そういう好奇心と知識の探求に向かうのは、やっぱり留学したということが非常に大きかったと思います。恐らく奨学金を得てきておられるかた、あるいは奨学金を得て外へ行かれる若いかたたちの中に、多かれ少なかれ自分の慣れている環境から離れるということからチャンスが出てくるのではないでしょうか。それはぜひ大いに奨励していただきたいと思います。

一般的に留学というものは自分とほかの人との文化の違い、類似点が分かる機会になります。渥美奨学金の受給者のかたがたにも今、もちろん厳しいから勉強しかで

きないというようなかたもあるとは思うのですが、全体としてそういった非常に特別なチャンスを与えられているということを知っていただきたいと思ったわけです。

結論を申しますと、排他的なアプローチはよくないと思うのです。何回も繰り返すみたいですけれども、相互依存が進んでいる世界で排他的なアプローチはすべての安定と進化への道を閉ざすものだと思うのです。自分の周辺は切り捨てないで、自分を中心にしないで、もしも違った考えを持った人がいたときは、その人たちの考えを吸収して、そしてそれを消化していくという努力が必要だと思います。一言で言うと、インクルーシブな社会というものを作っていかなくてはならない。この「インクルーシブ」という言葉にはなかなかいい日本語訳がないのですが、切り捨てをしない、自分も含めたいろいろな人たちを含めた生活、そして社会作りを心がけていく、私はそれこそが国際交流のエッセンスだろうと思うのです。

今、恵まれていることに、国際交流の体験をしたかたは非常に多いのです。ほとんど学生の間にそういう体験をしていらっしゃるわけです。ですから、自分たちが得たそういうメッセージを十分ほかの人たちに伝える。そしてそれを生かしていく。特に日本のように島国で、文化の接触なしにはここまで来なかったような国で、閉ざさずに広い気持ちで人を受け入れ、自分も受け入れられていく。こういう形で国際交流、奨学金の運営、奨学金から得たチャンスの活用、そういうものをぜひ考えていただきたいと思いまして、ちょっと問題提起のような形でご報告させていただきます（拍手）。

【質疑応答】

（深田） 大変ごりっぱなお話を伺ったのでありますが、多様性を尊重する、あるいは相互理解を促進するという場合に、やはりお互いに共通の基盤というものがないと、それは望めないような気がするのです。既存の宗教にはそういう共通の地盤としての資格に欠けるものがあるような気もしますし、儒教的な精神とかいろいろありうると思うのですが、人間の安全保障を国際的にご議論になる過程で、そういう普遍妥当的な価値観、世界観、そういうものを追求しようという試みはなされておられるのでしょうか。

（緒方） 一番の出発点である、「人間というものはみんな大事な命を受け、そして限りなく人間として進歩しうる存在」ということでは一致したと思います。ただそれについて、何が人間性の根元にあるかということについては、いろいろ違った意見はありますけれども、根本は、ピープルというものの重要性です。「人々」と私どもは訳しました。「市民」と訳しますと市民社会を前提にするし、「国民」と訳すと国家というものを前提にするので、「人々」と訳したのですが、人々を中心に考える。これが共通の基盤だったと思います。

（佐藤直子）いつも私自身が迷っていることなのですが、だれしも平和を望みますけれども、平和のための戦いというのはありでしょうか。そしてもしそれがありだとし

たら、どういうときにそれが許されていいのでしょうか。

（緒方）　お言葉を借りて言えば、平和のために戦わなければならないことはあるのです。平和をどういうふうに理解するかといったとき、自己と他者が両方共存でき、最低限命を全うすることができることだと思います。私はそういうぎりぎりの中で随分仕事をしてきました。理想的な、すべての人が仙人のような思いで暮らしているというような、平和は見たことがありません。いろいろな利害があり、利害の対立がある。その利害の対立を解決するためにどういう手段を執るか。武力を使うことはあるのです。武力を使うような対立が起こったときには、どうやって武力の使い方をある程度抑え、そして話し合いをして、両方が一緒に暮らせる土台を作っていくか。その辺が平和だと私は考えています。ですから、みんなが神様のようになって暮らしているところが世界にあるとは思いませんし、それを平和だとは考えていません。平和を、平和でない状態からどうやって作るか。そのとき場合によっては武力を使わなければならないこともあるのです。武力を抑えるためには武力が要る。極めて現実的な形で私は平和を見ていましたし、なるべく平和な状況を作る努力をしてきました。

（佐藤由利子）　東京工業大学留学生センターの佐藤です。人間の安全保障というのは非常に高邁な思想が反映されていて、先進国の人間として途上国の非常に深刻な貧困状態にある人に何とか手を差し伸べるべきだという使命感を感じます。しかし、日本の国民の中で、そういう貧困の切実さ、あるいは人間の安全保障の必要性というものを訴える人というのは、もちろんそれに反応する人はいると思うのですけれども、それは大多数の人ではない。やはり遠くの世界で起こっていることだという感覚を持つ人もいるのではないかと思うのです。

したがって、これからいかにＯＤＡについて国民の関心とかサポートを得ていくかということは非常に重要なことではないかと思います。人間の安全保障ということを訴えると同時に、私自身の考えとしては、やはり協力する側の人間が途上国の人たちから学んだり、あるいは協力する喜びとか、あるいは途上国の人たちと友情、きずなを作ることによって人と人との関係も豊かになるし、国と国との友好関係を築くためにもＯＤＡは日本にとって非常に重要な働きをしていると思うのです。ですから、途上国の人にとってのニーズを強調すると同時に、協力する日本の側の人間にとっての喜びとかメリットとか、そういったこともっと理解してもらうようにしてはどうかなと考えています。

（緒方）　今佐藤さんがおっしゃったことは全面的に賛成いたしますけれども、どういうふうにやっていったらいいのかなと思います。日本はともかく国際的な貢献をしなければならない。日本という国は戦争でない手段で世界に貢献していく。民生的国家という言葉を使っていますが、軍事力でない形で世界に貢献していくのです。その中でいちばん大事なことの一つというのは、やはり一般にＯＤＡといわれていますけれども、政府開発援助です。ＯＤＡにはいろいろな段階、いろいろな形があって、それによって日本が戦後作り上げてきたような平和で安定した社会というものをどこまでほかの世界にも広げられるか、そういう比較的モデストな考え方から日本は 60 年前にコロンボ・プランに参加したわけです。

それから中国に対しては、特に賠償やいろいろなことの意味も込めてかなりたくさんの開発援助を、有償、無償、技術援助等、いろいろな形でやってきたわけです。幸いなことにアジアの国々はかなりみんな経済的にも随分伸びてきました。それと同時に、全部の国の全部の人々とは言いませんが、生活の安定を広げることができたわけです。その過程で日本が学んだことも非常にたくさんあったわけです。どういうふうな形でこの開発援助を行うのか。日本は、人作りということに中心を置いてきたと思います。それは間違っていなかっただろうと思います。ひところはＯＤＡの金額が世界でいちばん多かったこともあるのです。もちろん借款による開発援助もたくさんあったけれども、そういうもので成果が出てきたのです。

そういう中で今後どうするかということが考えられていたころに、ちょうど日本経済が下降状態に入りました。しかし、よそから見ますと日本は今でも大変な富裕国です。大変なものです。人 1 人の収入、生活基準が高い。ところが最近、ほかの国のことまでできませんという風潮が一部に出てきたのです。私は 1991 年から 12 ～ 13 年ほとんど日本にいなかったのですけれども、それまでは国際貢献という言葉を非常にたくさんの政治家のかたや経済界のかたがたがおっしゃっていました。帰ってみたらそういうことを耳にすることすら非常に減ったということを感じました。そしてＯＤＡについては、特に中国の場合などはあんなに伸びたのだからあげることはないだろうみたいな議論も一部にはかなりされてきたわけです。

それに対して、ＯＤＡそのものの価値、それが日本にとっても、ＯＤＡの対象国にとってもどれだけよかったかというようなことを、今また少しずつ認識が戻り始めているかなと、ちょっとひいき目に見ているのかもしれませんけれども、そういうふうに考えております。

一つは相互依存論があると思います。日本だけが豊かになって、日本だけが恵まれて暮らすことはできないのです。そんなことをしたらみんな日本に来てしまいます。そしてまた、今、日本の食糧を一つ取っても、日本の中で全部は作れないのです。そういう実態というものを認識しながら、自分も恵まれる、相手も恵まれるという、持ちつ持たれつのような相互依存の理論を、もう少ししっかり考えていただきたいと思っております。

今、特にアフリカにおける貧困というものが非常に注目されております。日本でも、ＪＩＣＡでも、今まではアジア中心に考えていたのですが、アジアの国々が伸びてきた分をアフリカ、南西アジア等に振り向けたいと思っています。ただお金をあげればそこで繁栄が出てくるわけではないから、やはり受けるほうの側の人作りが大事ですし、自分たちでコミュニティを作っていく、自分たちでやっていくという習慣と能力をつけていくという仕事はとても重要だと思います。もっと大きくアフリカ、南西アジア等に援助を移していこうとしているのです。ＯＤＡがどのぐらいその国の力に沿っているか達成度を計るためにＧＤＰの0.7％という目標を立てております。しかし、日本の場合は、この割合がかなり低く、0.2％ぐらいになってしまいます。それでもＯＤＡでやっていることには意味があるのだし、経済もよくなってくるに従って、あるいは相手国が必要な場合にはもっとやりますという意欲だけはもう少し示していただきたいという気が私はしております。

（高偉峻） 第一期奨学生ですが、今は先生になり、北九州市で留学生支援ネットワークというＮＰＯを立ち上げています。留学生と交流するときに、親の気持ちで「来てください」と交流を進めますと、最初は結構来てくれて、皆さんと交流ができます。しかし、ちょっと上の立場から留学生と接すると、だんだん来なくなるケースもある。要はさっき先生がおっしゃった、いろいろ話を聞く、排除せずに受け入れるということが非常に大事だと思います。我々が地域の中でやっても、また国際レベルでも、いろいろ異なった文化や理想、あるいは歴史、あるいは生活様式があるわけですから、強制的に同じにしてしまうことはできません。今の世界情勢を見ると、非常に単純化しているのではないかと思います。こっちは敵、こっちは味方、と分けようとする。先生がおっしゃったように、一人一人の自覚というふうになっていくほうがいいのではないかと思います。そのために、もっと我々にこうすべきだという処方せんがあれば教えていただきたいと思います。

（緒方） おっしゃったとおりそんな敵と味方に分かれるような単純な社会には住んでいないのです。あまりにもインフォメーションが飛び交うからすべて単純化しないと通じないのかなと思うことが、私はあるのですけれども。今のお問いかけについて答えがあるようなことではないと思います。ですが、人々の交流の中にいろいろな真理が隠されているということで進んでいくのではないでしょうか。

（山本） みずほ国際交流奨学財団の専務理事、山本でございます。

質問の一つはＯＤＡの日本の財政のプライマリーバランスという問題がありまして、カットされてきています。先ほどもお話をいただきましたが、今現状の日本のＯＤＡの金額は、いかがなものかということをお伺いしたい。

第２に当然金額、量と質の問題があります。先ほどのスマトラ沖のときにもいろいろ救援物資が行くのだけれども、現地の政府のかたとかいろいろなかたが横流しをしてしまうとか、そういう問題もあります。それもまた教育につながってくると思うのですが、それとともに日本のＯＤＡ資金がどこへ行くのか。私は現場主義というのは非常に重要だと思います。そういうようなことでＮＧＯ、ＮＰＯという民間セクターと、いわばパブリックの協調でＯＤＡを効率的に運用する。これは非常に大きな問題であると認識しておりますが、今、先生がこのＯＤＡのクオリティの面をいかにお考えであるか。お立場上なかなかお答えが難しい点もあるかと思いますが、その辺りにつきましてお話しいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（緒方） いいえ、立場はちっとも難しくないです。ＯＤＡはもっと増やすべきだと思っていますし、そう申しております。今ＯＤＡが日本の予算の何％ぐらいだとお思いになりますか。1.7％です。わずかなものなのです。財政は確かに厳しいし、その財政再建はしなければいけないのですけれども、ＯＤＡが占める部分というのは非常に少ないものなのです。ですから、そこを削って日本

の経済のためにどうのこうのという議論は、私は受け入れられないと思います。

ただこれを効率的に、効果的に使わなければいけません。これは当然のことで、私としては、それを効率的に、効果的に使うということに責任を持って見ていくつもりでございます。ＪＩＣＡの今の方針としては三つの柱があります。人間の安全保障、つまり、ピープルに焦点を当てて人作りに効果を与えます。それから現場主義です。ＪＩＣＡの人員も、それから財政の管理等もみんな今、本部よりも現場のほうへ移しているわけです。そのほうが現場のニーズがはっきり分かるし、ものが早く進むのです。すべて東京からやっていたのでは進みません。やっぱり効率ということを考えると、必要以上に遅いのはよくない。現場主義、効果と効率、人間の安全保障という柱を立てて、何とか皆様方にこれは意味のあるＯＤＡだと言われるように一生懸命努力しておりますし、まだする仕事はたくさんあると思います。ですから、パーフェクトとは言えないと思います。

確かにアチェでも救援物質を持っていってしまう人がいました。しかし考えてみてください。あれだけのひどい災害に遭い、貧しくてどうやって生きようかと思っているときに、何かがあったら持っていきたくなるほうが自然だろうと思います。その中をどうやってきちんと必要なところに行くように管理して、努力していくかというのが現場で仕事をする人の任務ですから、それはしなければいけないのです。

ＯＤＡが多すぎるなどと私は言っていませんし、今そろそろ底打ちかなと思っています。今、日本は辛うじて２位ですけれども、ずっと下がってきているのです。アフリカについては７位ぐらいになってしまいます。最近ＯＤＡがＧＤＰに比較して高いのは小さい国です。確かに北欧諸国であり、オランダであり、そのような国なのですけれども、イギリスもフランスもみんな今伸ばしているのです。どうしてかというと、あまり貧しくて不安定な地域を世界に残しておくことは、世界の安定と平和のためにならないという、かなり利己主義と言えば利己主義かもしれませんけれども、そういう認識が広がったからです。アフガニスタンなどは二十何年間ほうっておかれたのです。そのつけは何かというと、テロの巣窟になったわけです。そういうところをほうっておけば、紛争は起こるわけです。そういう認識が今、比較的広がっておりますが、そういう中予算を削減しているのは先進国では日本だけなのです。それは財政的な問題があると思いますけれども、何といいましても、ＯＤＡは財政の1.7％ですから、それを考えると非常にわずかなのです。ですから、もっと出せとおっしゃってください（笑）。

（ペマ）　桐蔭横浜大学のペマと申します。私は先生に感謝申し上げることと、それから一人の人間として注文を一つつけたいと思っております。感謝申し上げたいのは、私は難民の出身で、難民学校で学び、1972 年に日本のビザを発行していただき何とか日本で勉強が継続できました。その仕事を先生が継承されて私たち難民のために尽くしてくださったことに対して感謝申し上げたいと思っています。

注文とは何かというと、教育は本当に大切だと思うし、私自身がこうやっていられるのもその教育のおかげだと思いますし、今、このように機会を与えられて留学生がやってくることも本当に重要だと思っています。その教育も重要ですし、読み書きも重要です。しかし、文字の読み方はあくまでも媒体にすぎないと私は思うのです。むしろ大事なことは、今の世の中ではあまり倫理とか道徳という言葉がはやりではないかもしれませんけれども、むしろ分別のある教育ということが非常に重要ではないかと思っています。そういうことについて私のような者が言ってもあまり影響力がありませんので、先生に今後世界的にそれをぜひ生かしてもらいたいと思います。今、私は日本で生活して、特に分別ということが教育にいちばん欠けていることではないかと思っています。道徳と言うと、またいろいろ問題があると思いますので、それを先生にお願いして、私の追っかけ人生も終わりにしたいと思っていますので、よろしくお願いします。

（緒方）　難民ということを受け入れてりっぱに学業を続けられて、ここに生活していらっしゃるということを伺って、大変うれしく思います。難民の受け入れについては、日本に注文したいことはまだ幾らもあります。やはりインドシナ難民は一つのカテゴリーとして一応１万人の枠まで作ってかなり進んだのですが、条約に基づいた条約難民といわれる人たちの受け入れにはかなり注文したいことがたくさんあります。それは法の解釈にもう少し人道的な配慮を加えていく必要があると思うのです。その点について、私が難民高等弁務官の時代にも十分対応できなかったし、今もできていないと思っています。

分別についてはちょっと分からないです。私も分別のない人間ですから（笑）。

（李鋼哲） 渥美財団第５期奨学生の李と申します。日本はＯＤＡが多いようにみんな考えているかもしれませんし、素晴らしいことをたくさんしています。しかしＯＥＣＤではＯＤＡは大体ＧＤＰの１％を目標にするということになっているのですけれども、実際日本は今ＧＤＰの 0.2％程度です。だから、そういうメルクマールで見ると、日本のＯＤＡが多いか少ないかは一目で分かると思います。

それと関連して、日本の国防予算は平和憲法を作るときにＧＤＰの１％以下ということになっています。これは素晴らしい。当時軍事力を抑えるということで意味があったと思うのですが、それがそのままずっと今まで続いていて、今もＧＤＰの１％です。これは予算にすると世界で第２番の軍事大国です。これに対しては国内外を問わず、だれも問題提起をしていないのです。ＯＤＡは財政が苦しいということを言いながら、国防予算についてはだれも言わない。これはやっぱり何とかして問題提起して議論する必要があると思うのです。先生の考え方をお伺いしたいと思います。

（緒方） 国防予算は多分予算の 10％ぐらいではないですか。私の理解では。どうして日本のＯＤＡが今まで量的に大きかったかというと、有償の部分が多かったからです。有償が使える場所と使えない場所がある。それに加えて、もっと無償と、技術というものを広げていかなければならない。そういう問題はあるのです。ですが、日本の中でどうして防衛予算が 10％で多いという声が聞こえないかということですが、別に非常に軍事力に傾いているのではないからだと私は思います。ただ国防にはそれだけ人間が要るのです。日本の防衛予算というのは人件費が高いから多いのです。そういうことはあると思います。質問の主旨がよく分からなかったのですが。

（スズキ） 貴重なお話どうもありがとうございました。私はメキシコ日系２世のスズキヒロミと申します。日本では日本のもの作りの教育に関して専門の勉強をさせていただきまして、今では新日本監査法人のＯＤＡ部で開発コンサルタントとして働いております。今日はほとんど直訴をしに来たというような感じでして、ＪＩＣＡのお仕事をする際に国籍が日本でないということで全くプロポーザル等を提出させてもらえないという意見が多々あります。先ほどの先生のお話で、これからはグローバリゼーションの中で排他的であってはならないという話がありましたけれども、むしろ排他的なところがちょっと見えるのではないかと・・・。

（緒方） 私はあなたのお仕事が分からないもので、どんなプロポーザルが来てどうして受けていないのかよく分からないのですけれども。

（スズキ） 特に役務提供に関しましては、一つの条件として日本国籍を有する者とされております。自分のもの作りの教育という専門を生かすためには、大体そういった役務のプロジェクトのほうが多いものですから、自分が日本で学んだことを、特に私の場合メキシコ出身ですので、ラテンアメリカのほうで生かすようなチャンスがなかなか回ってこないということで、とてももどかしく、また悲しく思っております。これからＪＩＣＡの中でそういった制限を改善されるということに関して、どういったお考えを持っていらっしゃるかぜひお聞かせいただければと思います。

（緒方） 直接あなたのおっしゃっている役務がどういうものなのかよく分からないから答えにならないかもしれませんが、やはり今まで、日本のコンサルタント等を中心にして実施してきたのは事実なのです。いつまでもそういうことでやれるのかどうか。つまり、国際競争をどういう形で導入するほうがいいのかというようなことは議論しています。これは物の調達についても議論しておりまして、かなりのものは現地で、そのほうが有利な場合は買うようにはなっています。ですから、方向から言えば、すべて日本国籍の人でなければ何もできないという条項が適用される部分は小さくなっていくのではないかとは思います。どのぐらいのスピードで、どのぐらい小さくなるかというのはちょっと私にも分かりません。ただ方向としては、オープンにしたほうが競争が働くので、いいものが安い価格で入手できるわけです。そういうことはもちろん話していますし、考えています。

（司会） まだ多くのかたから挙手がございまして、お聞きになりたいことも多いかと思いますけれども、時間がまいりましたので、挙手のかたには失礼しますが、これで終了とさせていただきます。財団 10 周年記念が緒方様、そしてご参加の皆様のおかげで素晴らしい催しになりましたことを心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

渥美国際交流奨学財団 10 周年記念出版

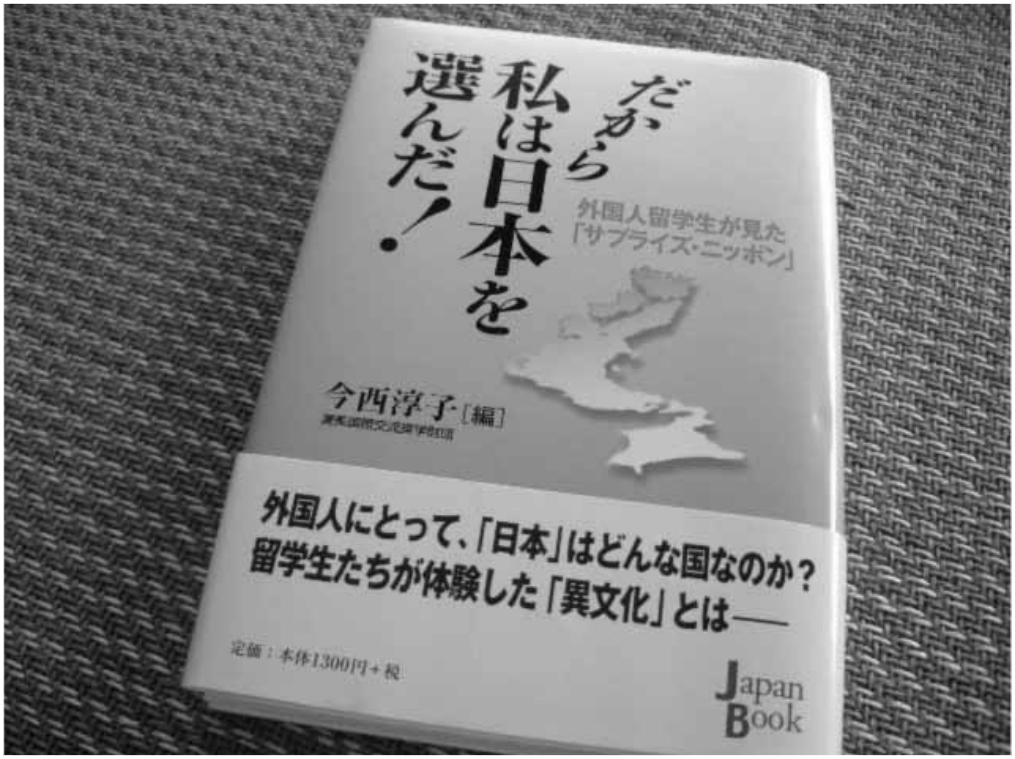
「だから私は日本を選んだ！」

ー外国人留学生が見たサプライズ・ニッポンー

今西淳子編

２００５年2月１６日

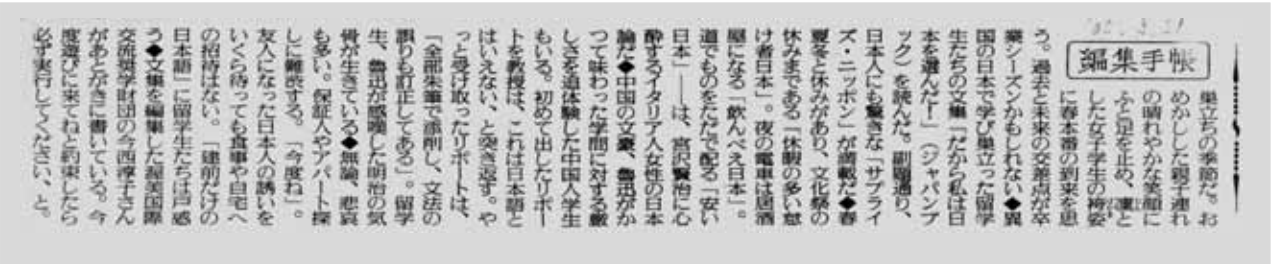
株式会社ジャパンブック発行



本書に纏められた文章は、渥美国際交流奨学財団の設立１０周年を記念して、支援した外国人留学生に呼びかけて書いていただいたものです。彼等は、博士号を取得するために諸外国から日本の関東地方の大学院に留学し、短い人でも５年、長い人は１０年以上、日本に滞在した経験をもっています。彼等の目を通した「日本」を語ってもらうことによって、読者の皆様に日本を再発見していただければ幸いです。（まえがきより）

第一部　私と日本　　第二部　異文化の中で　　第三部　留学生活

出典：読売新聞編集手帳（2005 年３月２１日）



編集手帳

巣立ちの季節だ。おめかしした親子連れの晴れやかな笑顔にふと足を止め、凍えとした女子学生の袴姿に春本番の到来を思う。過去と未来の交差点が卒業シーズンかもしれない◆異国の日本で学び巣立った留学生たちの文集「だから私は日本を選んだ！」（ジャパンブック）を読んだ。副題通り、日本人にも驚きな「サプライズ・ニッポン」が満載だ◆春夏冬と休みがあり、文化祭の休みまである「休暇の多い怠け者日本」。夜の電車は居酒屋になる「飲んべえ日本」。道でものをたばこ配る「安い日本」——は、宮沢賢治に心酔するイタリア人女性の日本論だ◆中国の文豪、魯迅がかつて味わった学問に対する厳しさを追体験した中国人学生もいる。初めて出したリポートを教授は、これは日本語とはいえない、と突き返す。やっと受け取ったリポートは、「全部朱筆で添削し、文法の誤りも訂正してある」。留学生、魯迅が感嘆した明治の気骨が生きている◆無論、悲哀も多い。保証人やアパート探しに難渋する。「今度ね」。友人になった日本人の誘いをいくら待っても食事や自宅への招待はない。「建前だけの日本語」に留学生たちは戸惑う◆文集を編集した渥美国際交流奨学財団の今西淳子さんがあとがきに書いている。今度遊びに来てねと約束したら必ず来てください、と。

「あとがき」より

「外国人留学生」と聞いて青い目で金髪の青年を思い浮かべる人は、まだどれくらいいるのでしょうか。独立行政法人日本学生支援機構によると、２００４年５月１日現在、日本で学ぶ留学生は過去最高の 117,302 人で、国（地域）別内訳は、中国 66.3％、韓国 13.2%、台湾 3.5% となり、この３国で全体の 83.0%、これにアセアン諸国とモンゴルを加えたいわゆる「東アジア」諸国からの留学生は 90.4% になります。

私が留学生と接するようになったのは、１０年前、父の遺志を継ぎ、関東地方の大学院で博士論文を執筆中の外国人留学生を奨学支援する財団を家族で設立した時からです。現在までに、２５カ国から渡日し、２９大学で学ぶ、１１８名の奨学生を支援しました。国籍制限はありませんが、前述の在日留学生統計と同様に、中国と韓国出身者が圧倒的で、アジア諸国からの留学生が大半をしめています。現在、彼等の８１％（８６名）が博士号を取得し、６４名が大学、１３名が政府等の研究機関、１８名が企業の研究所等で活躍しています。５６％が日本に居住しており、母国への帰還者が３３％、アメリカ等の第３国で働いているのが１１％となっています。

実は、このように元奨学生の動向を把握してデータを作るのもそう簡単な作業ではありません。私たちが支援した留学生たちは、現在もインターネットで繋がっており、全員とはいえなくても９５％以上の元奨学生に今日メールをだせば、数日後には世界各地から

「寄せてくださった書状」より（順不同）

○「だから私は日本を選んだ」拝読しました。内容もすばらしいし、日本語が流麗です。素敵な本、有難うございます。以下のような紹介文をメールニュースで流します。

『渥美国際交流奨学財団１０周年を記念して出版された本。同財団の支援を受け博士号を取得し、内外で活躍する元日本留学生３０人の珠玉のエッセイと論評。真摯に日本と向き合い、暖かくそして時には厳しい批判も展開する彼らの文章は、日本人に自らの姿を振り返らせ、「自信」と「誇り」を喚起させる。留学生の受け入れは、結局は十分に日本をも豊かにすると証明している。』（財団法人アジア学生文化協会　留学生相談室　白石勝己）

○「だから私は日本を選んだ」をお送りいただき、ありがとうございました。まだぱらぱらと見ただけですが、なかなか興味深いご本だと思いました。（一橋大学大学院国際企業戦略研究科　石倉洋子）

○先日、貴財団出版の「だから私は日本を選んだ」をご恵送くださいまして、まことにありがとうございました。特に前半の部分を興味深く読ませていただきました。

いただいた本は、当財団の事務所に常置する予定ですが、別に私物を購入して私宅にも常置したいと思っています。さらに、別に購入して、うちの幹部に贈呈して読んでもらおう、と思って、新宿の都庁内の本屋に行きましたが、ありませんでした。この本を販売している新宿駅近辺の本屋を教えていただきたく、お願いいたします。なお、この本、特に、前半分を多くの日本人に読んでもらいたくて、新聞にでも宣伝記事が出てくれるといいな、と他人事ながら思っています。（伊藤国際教育交流財団　伊折利晃）

○今西さんが編まれた「だから　私は日本を選んだ！」というご本をお送り下さり有り難うございました。全部を読むのにちょっと時間がかかってしまいましたが、本当にいろいろなことを考えさせられる内容でした。渥美財団の素晴らしいお仕事の意味がよく表されており、このような人と人との真剣な取り組みが交際交流の基本であることを痛感致しました。そして、私ども日本学術振興会の国際交流の事業とは全く違う新鮮な取り組みに深い感銘を受けた次第です。今後ともこの意義深い事業を続けて行かれ、一人でも多くの魂の交流が未来の日本の正しい理解につながっていくことを心より期待致しております。

全文を読み、この本の文章のトーンが実によくそろっているのに驚きました。おそらく、今西さんが藤野先生の役割を果たされたのだろうと推察いたします。素晴らしいお仕事に心からの敬意を表します。（日本学術振興会監事　井上博允）

○「だから私は日本を選んだ！」の送付誠にありがとうございます。まだ、目次とあとがきしか読んでいませんが、内容楽しみです。私も外務省で北京勤務を３回経験し、米国で中国研究をし、現在は日韓友情年交流事業にも関わり、留学生の９割を占める東アジアに大きな関心を持って過ごしてきました。留学生問題は、日本外交を考える上で、また、日本社会の将来

返事がきます。この知日派外国人研究者ネットワークが、私たちの事業の１０年の成果であり、ささやかな自慢でもあります。ネットワークの仕掛けは募集要項からはじまり、選考方針、毎月の奨学金の手渡し、相談と雑談、家族ぐるみの交流、夏の軽井沢旅行、奨学支援後の海外学会派遣費助成、母国を尋ねて同窓会、インターネットによる頻繁なコミュニケーションなどなど。毎年１２名というささやかな支援ですが、手厚いケアのためには適正規模なのではないかと思っています。

設立５年目に、彼らの「声」を発信する研究ネットワークを設立しました。財団事務局のある東京都文京区関口から、グローバルに発信していこうということで「関口グローバル研究会（ＳＧＲＡ：セグラ）」と名づけ、年４回のフォーラム開催と１０冊程度のレポート発行を行なっています。どなたにもご参加いただける会員制の研究会ですから興味のある方は是非ホームページ（http://www.aisf.or.jp/sgra/）をご覧ください。

さて、財団設立以来今日に至る期間は、日本にとっては「失われた十年」であり、不景気とゼロ金利政策のために、基本財産の運用益によって事業を行う財団法人にとっては冬の時代でした。設立当初の予定通りの事業を続けることができたのは、財政的、あるいは様々な方法で財団を支援してくださった皆様のおかげと感謝しております。

私個人にとっては、優秀で意欲的な留学生に教えてもらったアジアのダイナミズムに魅了された１０年でした。小さいときからの活性化の上で極めて重要な問題だと思っております。このような地道な御活動に今後、公私にわたり接点を持つことができれば幸甚です。（外務省大臣官房広報文化交流部　文化交流課長　片山和之）

○さて、ご恵贈頂きました「だから私は日本を選んだ！」拝読致しました。私ども住友財団でも、国際交流関係の助成プログラム「アジア諸国における日本関連研究助成」を行っており、東アジア、東南アジアの研究者を対象としておりますので、大変勉強になりました。（住友財団　石川睦夫）

○この度は今西様編集による著書をお送りくださいましてありがとうございました。大変興味深くすぐにでも読み出したい心境でしたが、諸事に追われている状況にてまずは「あとがき」だけでもと思いまして拝読いたしました。留学生に寄稿を依頼し、これだけのものをまとめ上げるには苦慮されたことも多々あったことと拝察し只々感服いたします。留学生達の忌憚のない意見、日本への感想がどのような言葉で表現されているか楽しみです。（財団法人東燃国際奨学財団　山田敦子）

○『だから私は日本を選んだ！』、どうもありがどうございました。
いろいろな方面の研究をしている留学生、しかも優秀な人たちの書いたものだからということもあるでしょうが、今まで感じたことがない新鮮さを覚えました。心の奥底で日本を愛していてくれる留学生の見た、日本の姿がえぐり出されていると思います。なるほど、そうだったのか、よく分かった、という反面、いや、そうじゃない、そうとも限らない、という印象が一方では残りました。この本の内容を話題にして、留学生とおしゃべりしてみたいと思っています。このような企画をさらに続けていかれることを希望致します。（筑波大学　湯沢質幸）

○貴財団創立１０周年心からお祝い申し上げます。
昨日は、１０周年記念講演会ならびにレセプションにご招待いただき、誠に有難うございました。緒方貞子さんのひとことひとことには、修羅場をくぐってきた方の発言だけに重みを感じました。その重みが日本の対外政策にしっかりと反映されることを祈らざるを得ません。（野村国際文化財団　諸角憲治）

○この度は、貴財団が設立十周年を迎えられたこと、心からお祝いを申し上げます。その間、博士号取得を目指す在日留学生の奨学支援に着実に取組まれ、その事業の成果もさることながら、知日派の外国人ネットワークをしっかりと作り上げられてこられた、財団としての将来への大きな財産の蓄積に重ねて敬意を表するものです。
また、この度は十周年の節目に出版されました「だから私は日本を選んだ！」をご恵贈賜り、誠に有り難うございました。まだ全文に目通しできていませんが、多くの筆者による体験を通しての貴重な日本観なりに触れ、今更ながらハッとさせられることも多く、大変興味深く拝読させていただいております。（損保ジャパン記念財団専務理事　田中　皓）

○さて、この度は、「だから私は日本を選んだ！」をご恵贈賜り、厚く御礼

旅行や留学といえば殆ど欧米諸国だった私にとって、アジアから来た留学生たちとの交流は魂が揺さぶられるほど新鮮でした。そして、いつのまにか世の中全体が変わり、日本人のアジア感も大きく変動した１０年でもあったように思います。１９９７年のアジア通貨危機以後、「東アジア共同体」という言葉が頻繁に新聞に登場するほど東アジアにおける経済協力と人的交流が活発になりました。在日留学生の最大の送り出し国である中国は破竹の勢いで経済発展をとげつつあります。中国人留学生たちは、幼少時に文化大革命を経験した世代から、一人っ子で大切に育てられた世代へと交代しました。さらに、２００２年のワールドカップ以来の日本と韓国の市民レベルの交流の活性化、そしてヨン様ブームに至ると、１０年前には想像だにできなかったことが、実にダイナミックにこの地域に起こっていることがおわかりいただけると思います。

一方、「ジャパン・クール」という言葉が欧米で流行っているようです。「かっこいい日本」から連想するのは、大リーグで活躍するイチローだったり、ニューヨークの高級レストランでカリフォルニアワインと一緒にいただくフレンチ風懐石料理（懐石風フランス料理？）だったりするようです。日本の良さを世界の人々に認識してもらい、現代風にアレンジされたグローバル化時代に相応しい新しい文化が創りだされていくことは素晴らしいことだと思います。

しかし、アジアを中心とした留学生との１０年間のつきあいから私が得たものは、もっと根元的なもの、生命に根ざした力強いもの

申し上げます。多くの留学生の日本体験が綴られており、御財団の奨学事業の一端や留学生への温かい思いなどが窺い知れる本で、早速拝読させていただいております。（みずほ総合研究所㈱　専務執行役員チーフエコノミスト　中島厚志）

○さて、この度は、「だから私は日本を選んだ！」をご恵贈賜り、誠に有り難うございました。早速拝読させていただきます。（構想日本　加藤秀樹）

○さてこの度は、書籍をご恵贈いただきまして有難く拝受いたしました。ご芳情の程深く感謝申し上げます。（衆議院議員　塩崎恭久）

○貴財団には、実に行き届いた奨学生事業を実施されており、敬服の至りです。さて、このたびは、ご支援の外国人留学生の声をまとめられた編著をご恵贈賜り有難うございました。早速、熟読する所存です。（ヒロセ国際奨学財団　理事長　酒井秀樹）

○このたびは、留学生の皆さんが執筆された「だから私は日本を選んだ！」をお送りいただきまして､ありがとうございました。早速拝読いたしました。
外国人留学生さんの皆さんの「ステレオタイプ」的な見方にとらわれない、日本人や日本社会に対する洞察は、大変興味深く、またおもしろく読ませていただきました。
このようなすばらしい留学の成果を目にすることは、留学生にかかわる仕事をする者として、大変うれしく、励みになりました。また、皆さんの学業を支えられた貴財団の取り組みに対して、改めて敬意を表する次第であります。（文部科学省高等教育局　国際交流企画室長　牛尾則文）

○このたびは、貴重なご本「だから私は日本を選んだ！」を頂戴しまして、大変ありがとうございました。若い方のみずみずしい感性があふれていて、感銘を受け、また留学生の方々の思いが伝わり大変勉強になりました。大切な資料として広く活用させていただきます。今後とも、当基金の助成活動につきましてご助言･ご鞭撻をいただければ有難く存じます。（富士ゼロックス㈱　小林節太郎記念基金事務局　橋本和子）

○本日は渥美国際交流奨学財団十周年を迎えられ誠におめでとうございました。記念すべきおめでたい日の活花は、若い方々が大勢ご出席と伺いましたので、紅白で活けさせて頂きましたが如何でございましたでしょうか。ご立派な御本を賜り有難うございました。御本は大変興味深く楽しみに拝見させていただきます。（蓮沼廉子）

○このたびは渥美国際交流奨学財団の 10 周年を心からお祝い申し上げます。設立から今日まで何とすばらしい歩みを辿ってこられたことか、並々ならぬご努力と発想に驚嘆申し上げております。
昨日の、充実した記念講演会と、それにもまして、記念出版「だから私は日本を選んだ！」は、誠にありがたいものでございました。帰宅後、早速にあちこちを拝読。さすが渥美財団の留学生たちの発言、文章、こちら

のような気がします。本書に纏められた文章から、彼等の日本に対する熱い思いと、より良い世界の実現をめざすエネルギーを感じていただけたら嬉しく思います。「私が青春を賭けた日本なんだから、もっと自信をもってがんばってくださいよ」というメッセージも受け取っていただけたらと思います。

　そして、最後におせっかいな一言を、自戒をこめて付け加えさせていただければ、外国人留学生に「今度家に遊びに来てね」とか「今度一度食事しよう」とか「約束」した時は、必ず実行してくださいね。

「彼等」の声を発信する本を作りたいという思いはあったものの、どのように実現すれば良いかわからず、記念出版をするかどうか随分迷いました。それを、いつも明るく楽しくここまで導いてくださったジャパンブックの大村数一さんと田中忠宏さんに厚くお礼申し上げます。

2004 年 12 月 5 日
　渥美国際交流奨学財団常務理事
今西淳子

とがき」に、胸打たれるものがございました。（日本女子大学名誉教授　青木生子）

○大村氏より、「だから私は日本を選んだ！」を頂戴しました。手際よくパンチの効いた本造りに感服しております。（鈴木啓司）

○この度は「だから私は日本を選んだ！」をご恵贈いただき有難うございました。私どもとしては、ご協力できず失礼いたしましたが、こうしてきちんと本にまとめられたことに、心より敬意を覚えます。渥美さんのところの奨学生の方々がいかに真面目で優秀かよく分かります。個人的には方美麗さんの「日本人の鎧」という論文が正鵠を射ていて、とても面白く、鋭いと思いました。彼らの観察は、明らかに私たち日本人の大事な鏡ですね。（新潮社　出版企画部　伊藤幸人）

○渥美国際交流奨学財団ご設立 10 周年誠におめでとうございます。貴財団の素晴らしい奨学事業とご活躍には心より感服いたしております。また昨日は渥美国際交流奨学財団 10 周年記念講演会にお招き下さり誠に有難うございました。緒方貞子氏のご講演を拝聴することができ大変貴重な一時でございました。（樫山奨学財団　亀岡エリ子）

○渥美財団 10 周年記念文集をありがとうございました。10 周年おめでとうございます。わたしたち留学生にとっては、渥美財団は本当に「家」のような存在です。悩みを聞いてくださったり、相談に乗ってくださったり、現役奨学生でない今でも、時には講演会、研究会のご案内、音楽会入場券のご配布、慣例の新年会と軽井沢旅行などをやってくださったりしています。その手厚いケアのお陰さまで、わたしたちは日本での決して楽でない研究と勉学を続けることができたのです。また、多くの人が学業を終えて社会に貢献しているのです。（臧　俐）

○先日、「だから私は日本を選んだ！」をお送りくださり、有難うございました。興味深く読ませていただきました。渥美国際交流奨学財団の 10 年間にわたる地道な活動の成果を感じる書物で、主にアジア諸国の留学生の日本での生活体験に基づく比較文化論は非常に新鮮なものでした。「あとがき」の中でのべられているように、財団事業の 10 年間の成果としてのアジアを中心とした知日派外国人研究者ネットワークは、東アジアの将来にとって大変な財産になると思います。日本の将来にとって避けて通ることのできない「内なる国際化」にとっても、多くの示唆を与えてくれる書物だと思いました。（EU 駐日欧州委員会代表部　高橋　甫）

○外国人留学生の皆さんの目から発見する日本、とても参考になりました。（衆議院議員　岩國哲人）

○ Congratulations again! Your 10th anniversary report sounds fascinating and very befitting indeed for this "elegant foundation"! I am proud to have been a grantee of your foundation and hope that it will live to be a hundred and more!（ハイデルベルグ大学　メラニー・トレーデ）

交流事業・思い出

軽井沢旅行

今年は軽井沢も暑かった！

東京では史上最高気温を記録した週の終わりに、９回目の渥美財団軽井沢旅行が開催された。現役奨学生と家族以外にも、東京、仙台、沖縄、そしてソウルから、ラクーンたち（元渥美奨学生）が、離山のふもとにある鹿島軽井沢研修センターに集まった。15 年ぶりにアメリカに帰国した財団のカウンセラーのマルコ ム・ペーレントさんが、２ヶ月で日本に帰ってきたので、心配された離山ハイキ ングと楽しいゲームも実施された。花火とスイカ割りは王しん君と今西勇人君の担当。センターの駐車場では、小さな日本の夏祭りが賑やかに開催された。最初 にスイカを割ったのは梁明玉さん。花火の時は逃げ回っていたけれど・・・

新しいプログラムの、「軽井沢オリエンテーション：狸の探検」とパワーポイン ト教室は私が担当した。オリエンテーションでは、友達のヴォヴォ（10 才､メ ス）とラカ（２才、メス）に案内役を引き受けても らった。パワーポイント教室 では、勇人君が初級を担当し、私と嶋津さんが中級のクラスを受け持った。小人 数だったが、みんなが活発にクラスに参加してくれた。とくに、中級クラスのメ ンバーたちはたくさんの質問をしてくれたので遅々として進まず、教室終了時には初級と中級は、既に同じことを話していた。

翌日、第１６回 SGRA フォーラムがセンターの会議室で行われた。食事休憩時間に何人かの狸仲間と議論が盛り上がって、共同で質問を出すことになった。フォー ラムのあとには講師と参加者の議論、ゲーム、飲み会、ピカピカの一年生（現役）と交流など、今までみたことがないほど賑やかな集まりになった。

日曜日に､理事長の別荘で恒例のバーベキューが行われた。王立彬さんのテニス教室は午前６時半スタートした。今年は､現役のリシャットさんが担当して､叶さんとナポレオンさん（撮影担当）が手伝って､ロシアンバーベキューだった。朴 貞姫さんと李鋼哲さんの延辺・韓国料理も堪能した。例年とおり原嘉男夫妻がおでんをたくさん持ってきてくださった。途中で雷の心配があったが、記念集合写 真も無事に取り終えた。

最後に、ヴォヴォとラカのお願いをここで繰り返させてもらいたい。軽井沢で新 しい発見ができた皆さんに、簡単なパワーポイントの報告を、今西さんに送って いただければ幸いです。狸の皆に伝えます。

また、避暑地の軽井沢で会いましょう。(文責:マックス･マキト)

□花火＆スイカ割り

□ BBQ

□ SGRA フォーラム「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」

渥美奨学生の集い

１０月８日（金）午後６時より、渥美財団ホールにて、恒例の「渥美財団の集い」が開催されました。今年は、当財団理事で、政策提言シンクタンクのNPO「構想日本」代表の加藤秀樹氏に「中小・ローカル・ローテクが日本を作る」というタイトルで、大変興味深いご講演をしていただきました。氏は、最近の日本は行き過ぎて、日本の中小・ローカル・ローテク部門、つまり、職人技能を中心としたものづくり部門を忘れかけているのではないかと問いかけました。そして、様々な例を取り上げました。ものづくりの日本（そしてアジア）は、ドットコムビジネスばかりではいけない。勝ち組と負け組みの２分類法では、大多数の人々がむしろ「負け組み」にされかねない。この２分類法だけではなく、より多様性のある国づくりが必要だ。時価会計ばかりもてはやされているが、こつこつとものづくりをしている会社の工場の土地まで資産として扱う必要はない。グローバル企業は時価会計が必要かもしれないが、そうでない会社にまで同じ基準を押し付ける必要はない。最近は製造業の大企業までが、投資信託のようなことばかりして業績が良くなったと言っているが、そんなことがあと何十年も続くわけがない。教育制度にしても、どの制度が良いというよりは、様々な制度が混在できる仕組みにすることが大事だ。過去５０年、日本はローカルからグローバル、ローテクからハイテク、小から大、分散から集中、「遅い」から「早い」、固有から普遍、という方向を突き進んできたが、これからは逆の方向も大切にして、多様性に富む社会を作らなければならないと主張されました。台風２２号に刺激された秋雨前線による土砂降りのせいか人数が少なかったのが残念でしたが、参加者は皆、明解なお話と、羅仁淑さん（１９９８ラクーン）の弟さんのレストラン（東大正門前「とうがらし」）の韓国料理を心から楽しみました。(文責：今西)

２００５新年会

２００５年1月１５日（土）正午～３時、恒例の渥美財団新年会が開催され、今年度奨学生受給者とラクーン会会員と家族約５０名が、渥美財団ホールに集まりました。今年のハイライトは、リシャットさん（２００４）と叶盛さん（２００４）によるロシア料理（ボルシチとサラダ）！李家の手作りキムチも美味。ラクーンの皆さんからいただいた世界各地からのお菓子類。それに、子供たちの協力でついたおもちのはいったお雑煮。おせち料理、焼き鳥､点心もありました。おなかがいっぱいになった後、全振煥さん（２００１）の奥様の柳永任さんがピアノで「冬のソナタ」の曲を演奏してくださいました。その後、李鋼哲さん（１９９９）から、スマトラ島沖地震と津波の復興支援募金のよびかけがありました。そして、最後に恒例のビンゴ。今年も、ラクーン二世の小中学生の皆さんに手伝っていただきました。３階の回廊には、古着のリサイクルコーナーが設けられましたが、残ったものはスマトラ島にある津波復興の支援団体に送られます。スマトラ島沖地震と津波の復興支援募金に関しては、スマトラ島出身のナポレオンさん（２００４）に連絡役をつとめていただきます。（文責：今西）

2004年度研究報告会

２００５年３月５日（土）午後２時から６時、東京都文京区関口の渥美財団ホールにて、２００４年度渥美財団研究報告会が開かれ、当期渥美奨学金受給者が研究成果を発表しました。前日の雪が残る寒さにもかかわらず、今期・来期の渥美奨学生やラクーン会（同窓会）メンバー、財団役員、留学生支援財団の方々も含む約５０名の方々が、ご参加いただきました。最初に、渥美伊都子理事長から、ホールに飾ってある雛飾りは自分が生まれた時（昭和初期）に祖母がイタリアへ送ってくれ、帰国後も戦争中は疎開し、東京空襲の焼失を逃れたというお話がありました。自分の博士研究内容を「子供にもわかるように」「１５分以内で」説明するという大変難しい課題にもかかわらず、発表者はパワーポイント（コンピューターを使って発表するプログラム）を使ってそれぞれ素晴らしい発表をしてくださいました。最後に、来賓としてご参加くださった文部科学省学生支援課の阿部幸治氏、留学生教育学会名誉理事の都竹武年雄氏、弁護士で渥美財団評議員の植田兼司氏からご挨拶をいただきました。その後、参加者はビールと中華料理、お寿司などを食べながら歓談を楽しみました。（文責：今西淳子）

2004年度奨学生と財団スタッフ

□来賓挨拶

文部科学省学生支援課　阿部幸治氏

留学生教育学会名誉理事　都竹武年雄氏

渥美財団評議員　植田兼司氏

□懇親会

■発表テーマ　（写真は研究発表の奨学生の皆さん　上段より左から右へ発表順）

叶 盛「ペプチド核酸と酵素の併用による新規 SNP 検出」
梁　明玉「理想的老人像に関する日・韓比較研究」
蔡　英欣「種類株式間をめぐる利害調整」
ゾンターク、ミラ「キリスト再臨運動 -- 近代日本における合理性と救済をめぐる言説―」
ホメンコ、オリガ「戦後日本における女性のアイデンティティ形成と商品広告」
ナポレオン「人間型ロボットのバランス制御に関する研究」
ムラギルディン、リシャット「シベリア鉄道開発が都市開発に与えた影響に関する研究（1887 年－ 1941 年）
―ノヴォシビルスクとイルクーツクの歴史的考察」
孟　子敏「『金瓶梅詞話』の言語学的研究」
李　承英「室町期抄物における漢字音研究－『玉塵抄』を中心として－」
チン、アンジェリーナ「1920 ～ 30 年代の広州と香港のサービス産業に関する研究」
アンポン、ベリル ニャメチェナ「筋ジストロフィーの病態解明を目指す研究」(体調不良で欠席)
李　済宇「地震断層による砂層地盤中の破壊面の伝播に関する研究」

司会：今西常務理事

２００４年度渥美奨学生のページ　「エッセイ」

アンポン、ベリル　ニャメチェ　「未知の国への旅」----- 31

チン、アンジェリーナ　ヤンヤン
「レッツ・ドゥ・インターナショナル・エックスチェンジ！」----- 31

李　済宇　「ラーメンを通じてのぞき見た日本人」----- 32

李　承英　「日本留学をふりかえって」----- 33

孟　子敏　「日・中の生活における『＋』・『－』」----- 34

ムラギルディン・リシャット　「私と日本」----- 37

ナポレオン　「便利な国、日本」----- 39

ホメンコ・オリガ　「諦めなかった日本留学の夢」----- 40

ゾンターク・ミラ　「『団栗の背比べ』か『千差万別か』」----- 41

蔡　英欣　「私の日本家族」----- 41

梁　明玉　「母国からみた日本」----- 42

叶　盛　「東アジア問題に関する私の見方」----- 43

未知の国への旅

アンポン ベリル ニャメチェ
Ampong,Beryl Nyamekye
東京医科大学（薬理学）

私が最初に日本文化というものに出会ったのは、10年ほど前のこと、私の国で放映されていた人気の日本のテレビ番組「おしん」だった。当時、私の生まれ故郷ガーナでは、謙遜と勤労を重視するこの番組のコンセプトは、全く異国のものというわけではなかったが、謙遜は弱さの印として描かれてきた西洋の価値観に影響されてきていたので、同じ先進国がこれらの価値観を強さとして描いていることに、新鮮な感覚を持った。窮屈な着物に身を包んだ芸者さんたちがお茶を入れ、刀を抜いて通りをゆく侍が切りあっている、そのようなエキゾチックな場所に対する魅力は、やがて無視できないほどに膨らんでいった。こうして私の未知への旅が始まった。

日本に着いて、このような、日本に対する私のイメージがどんなにばかげた、非現実的なものだったかに気づくのにそう時間はかからなかった。侍も、着物にきっちり身を包んだ芸者もいなかった。そこにはただ、上品な眼差しのご老人や、色とりどりに髪を染め、騒がしくおしゃべりする若者たちの姿があった。

私の一番のフラストレーションは、言葉の壁だった。私は、自分の要求を伝えることができない幼い子供に戻ったような気持ちだった。このフラストレーションは、どんな現実的な困難より、むしろ私自身の認識のハンディキャップによるものだった。人々は、私に親切にしてくれ、いろいろ道案内してくれたりするのだが、どこへ行っても箱型のビルやアスファルトの通りで、出口の無い迷宮へ導かれたようだった。

言葉を理解することが本当に目を開かせる。それは、全く違った文化の人々と効果的に相互理解することを可能にするばかりではなく、ものごとの世間一般の見方だけが唯一の見方ではないことや、子供の頃から知り覚えてきた価値観だけが唯一の価値観ではないことに気づくことができた。

この国沢山のことが大好きになった。第２の故郷で年月を経るうち、世界に無類の、豊かな文化とハイテクノロジーの融合に魅せられるようになった。桜の咲き誇る季節や紅葉の到来を愛でるようになった。日本の祭りの精神を理解し、相撲にとりこになり、エンジョイできるようになった。精魂使った１日の終わりには、疲れを癒す湯船につかり、テレビの前で、画面に映し出される日本の生活の様々な側面を眺めながら、静かな夜を過ごす、といったことが楽しみになった。

通りを走る侍の姿や、お茶を入れる芸者の姿は無いかも知れないけれども、ここはすばらしい異国の地である。

レッツ・ドゥ・インターナショナル・エックスチェンジ！

チン アンジェリーナ ヤンヤン
Chin,Angelina Yanyan
お茶の水女子大学（ジェンダー研究）
中山大学客員研究員（フルブライト研究員）（在広州）

最初日本に来た時、言葉の障害で、生活には不便なことが多くありました。例えば外食したとき、すし屋や居酒屋など日本語のメニューしかないところには一切足を踏み入れませんでした。どんなに評判がよくても自分が食べたくても、いつも英語のメニューがあるかどうか、あるいは写真で見て食べられるかどうかでレストランを決めたのです。もちろん値段もちゃんと参考にしましたけれども。結局、よくスパゲッティ屋、ファーストフード店で食べていました。

しかし、店に入ってほっと一息ついても、 注文のときに問題があります。日本人のサービス精神は強いので料理のオーダーを取ってもらっても、サラダのドレッシング、飲み物、セットの種類などたくさんのことを聞かれます。そういうときは店員と自分を悩ませないように名前がわかる選択肢しか選べなかったのです。そのころは大嫌いなサウザンドアイランドや蛎をよく食べるはめになりました。食べながら悔しく思っていました。今考えると不思議ですね。

もちろん、言葉と文化の障害に直面したとき、いろんなやり方（生き方）があります。私のように弱気な留学生もいれば自己主張の強い留学生もいます。ある香港人の友達は、スタバに入るたび、コーヒーを注文するぐらいの日本語能力はありますが、必ず英語で店

員と話します。なぜかと聞いたら、彼は店員に、お客さんの言葉を喋れないという劣等感を持たせようとしているというのです。彼にとって、スタバのような国際的な飲食店に勤める店員なら、英語ができなければ、国際人といえないからです。だから、彼が英語を喋る事で日本人に競争力をアップすべきだということを悟らせることになるというのです。これは彼の日本人との「心理格闘」だそうです。こうして彼は自分の弱味を見せずに必死で自分のプライドを保っているのでしょう。

ところが、私は英語で話すと日本人の相手との距離感を圧倒的に感じます。だから日々の生活ではプライドを抑えて、我慢することが多く、彼よりずっと辛い目に会いました。幸いなことにサウザンドアイランドのドレッシングはもう食べなくてもよくなりましたけれども。

彼のアプローチも、私のアプローチも、自分が外国人であることを意識していることに変わりありません。日本に滞在しつつ言葉も増えてきて、日常会話は問題がなくなりましたが、まだ不安が残っています。多分それは日本人の「内」と「外」の区別に対する恐れだと思います。

だいたい日本語が少しでもできる留学生なら、日本語が上手だと褒めてもらったことがあるでしょう。初めて誉められた時はうれしいかもしれないけれども、２回、３回以上もつづくと、それが日本人の社交辞令だとわかってくるでしょう。私は誉められた瞬間、自分が外国人の枠に落とされるというふうに感じます。大体「日本語が上手ですね！」と褒めた後、彼らは次の言葉が見つからないような気がします。結局は適当な挨拶以外は何も交わさないことが多いのです。これは、もしかしたら、人を脅かさないための日本人の礼儀かもしれませんね？

今まで日本の研究会やグループに参加しても、わずかな例外を除いて、ほとんどの学者は私の研究より私の英語力に興味を持ちました。私は外からきた一時の留学生で、日本語はうまく喋れなくて、教授でもないから、内部の相談には一切含めてもらえないのです。私を思い出す時は、ほとんど英語のネイティブチェックや翻訳の頼みがあるときです。でも、私は英語の先生として来日したわけではなく、研究や学術の進展のために日本に来たのです。もっと深く交流したいのに、留学生の地位と言葉の障害のせいで、無視される場合が多くありました。同じグループに自己紹介をしても、すぐあとで「ご専門はなんでしたっけ？」と聞かれました。「外国人」「留学生」としてしか認めてもらえないので、だんだん存在感も薄くなって、まるで自分が「透明人間」のような気がしたものです。

祖父の代から日本に住み、日本に生まれ、日本人と同じ教育を受けた在日韓国人が公務管理職受任を拒否される現実があります。私の周りの日本人は、その事件に対してはほとんど無関心のようです。もちろんそれは留学生の私とは全く違うケースですが、その判決を聞いてあらためて日本の排外主義の深さを感じました。「外国人」は日本に暮らすことに勇気と根気がいりますね。

日本では、「国際交流」という言葉がどの国より流行っています。よく考えると、それは日本人である自分が外国人とは違うことを意識していることの反映ではないでしょうか？「国際交流」ということは、単に短期の交換学生を受け入れたり、きれいな宿舎を建てたりすることではありません。もっと日常生活でいろいろな人々と思いやりをもって接し、深く関われば、「国際交流」などという言葉を強調しなくても、多元的で国際的なコミュニケーションを生み出せると思います。

ラーメンを通じてのぞき見た日本人

李（リ）　済宇（ジュウ）
早稲田大学（建設工学）
早稲田大学理工学研究科助手

私が通学のため毎日通っているＪＲ高田馬場駅にはいくつかの名物が存在する。駅に停車の間に流れるアトムの音楽から、待ち合わせのスポットになる駅前のビックボックス、ＪＲと共に庶民の足になる黄色い西部鉄道がすぐ思い浮かぶ。そして、私が在学している早稲田大学と日本語学校やいろいろな分野の専門学校などが駅の周辺に集まっており、若者からお年寄りまで、また多様な国籍の人々の往来が多いところでもある。

しかし、この街で忘れてはいけないのはラーメン屋だ。いつもテレビ特集番組においてトップランクになる“俺の空”、北海道の名物“純連”、新感覚の“渡辺”、あぶら麺が有名な“ぶぶか”、サッポロの味“えぞ菊”、

付け麺が美味しい“やすべ”など数え切れないほどさまざまなお店が並んでおのおのの独特な味を楽しませてくれる。日本のラーメンが大好きな僕にとっては本当に幸せなことだと思う。

ところで、ラーメンの由来は中国で麺のみを意味する拉麺（ラーミェン）、打麺（ダーミェン）がなまったといわれている。また、関東大震災後、中国人の柳さんという人が屋台の中華そばを出して、繁盛したので柳さんの麺、柳麺(リューミェン)がなまって、ラーメンとなったという説もある。いずれにしてもラーメンは中国から日本に導入され、独自に発展してきた和製品だろう。私の母国、韓国でもラーメンは誰でも知っている普及品であるが、日本のラーメンとは違ってインスタントラーメンがほとんどだ。すなわち、安くて簡単に作って食べられる間食に近いものである。日本のラーメンに比べ韓国ラーメンの位置付けははるかに低いだろう。値段も韓国のラーメンは普通の定食より半分以下だけど、日本のラーメンはほぼ同じかむしろもっと高い場合も多い。高いから質がいい物になるのは当然だと思われるかもしれないが、日本人がラーメンに注ぐ姿勢は半端じゃないのは間違いない．店の運命を決めるスープはもちろん、麺と具も相当工夫されていて、各店ことに自慢の技がしみこんでいる。作る人だけではなく食べる人の努力も凄い。冒頭に上げた店はいつもお客さんが多くて長時間待たないと味わえない店もある。ラーメンを食うために、あえて平日に休ませてもらい訪ねる人も相当であると聞いている。このようなラーメンに対する熱情は韓国人にとっては納得し難いことである。わずかラーメンのため遠いところを訪ね長時間待つのは韓国では想像ができないことだ。

ここに韓国人と日本人の性格の違いが隠れている。日本でラーメンが発展してきたのは、日本人特有の、小さな物でもつまらないものでも極めて丁寧に扱い格好よく作り出そうとする姿勢の現れではないかと思っている。そして、些細な物でもクラフトマンシップが染み付いているのであれば、それを大事にして認めてあげる感謝のお返しがあるため、コックの個性が生きている芸術作品のようになったのだろう。その反面、熱くて盛り上がりが凄いといわれる韓国では、物によって扱いの度合いが違ってくる。大事な物には全力を尽くし、最も立派なものを作り出すけど、小さなものにはあまり興味を持たず適当にする場合が多い。

日本に留学している私にとっては、このようなラーメン一杯にも込められている日本人の知恵を見つけられることが、日本で得た何よりも大事な財産のひとつなのではないかと思っている。

日本留学をふりかえって

李（イ）　承英（スンヨン）
筑波大学・博士（応用言語学）
慶北大学校日語日文学科非常勤講師(在大邱)

6年間の留学生活を終え、韓国に戻ってもう3ヶ月がたっている。

国にもどって日本での6年間を振り返ってみると、日本の留学時代が私の人生の中で一番幸せな一時だったと思われる。しかし、それを日本に留学している間は気が付かなかった。あの時は、日本に留学してきた以上、私のよりいい未来、あるいは博士号のために何もかも辛抱しなければならないと、いつも心を引き締めながら毎日を送っていた。韓国に一日でも早く帰るためにひたすら研究するしかないと思っていた。今から考えると、もうちょっと心の余裕も持って、もっと留学生活を楽しめば良かったと後悔が残る。

日本に来て最初のうちは、勿論カルチャーショックで心の余裕なんか持つことができなかった。今から考えると何でもないが、あの時は何もかもが新しく、けっこう深刻に思ったり、ショックだったりした。日本の留学時代のことを思い出すと、今でも忘れられないカルチャーショックがいくつかある。

日本に来て1年目、筑波大学の研究生の時だった。家族や友達から離れ、精神的に心細くて、私なりに日本人と一所懸命付き合おうとしていた。日本に来て最初に付き合った日本人はチューターだった。チューターとの初対面の時、私が自動販売機で100円のコーヒーをおごろうとして、100円玉を入れたら、彼女が冷たい顔で「イさんこれはだめですよ」と言って、私にその100円を返してくれた。韓国では、自動販売機に入れる100円ぐらいのお金は、先に出す人が出すもので、お互いにあまりこだわらないで、おごったりおごってもらったりする。ただの「100円」であんまりにも強く断られてしまったので、あの時は本当にとまどった。その後、彼女と一緒に勉強した後に、作ってきたお弁

当を食堂で一緒に食べたことがあった。私は彼女に韓国料理を食べてもらいたくて、いつもおかずをいっぱい作って持っていったが、彼女は私のおかずには一度も手を出さなかった。私は、彼女が韓国料理を好きじゃないか、あるいはおかずが美味しく見えないから食べなかっただろうと思って、ちょっと寂しい気がした。

大学院に入学して、彼女とは６年間一緒に勉強したり、家に遊びに来たり、お喋りしたりし、今もいい友達になった。私も他の日本人ともお付き合いしたり、日本のドラマや映画などを見たりし、自然に日本に馴染んでいくうちに、日本の割り勘文化や「人のものには手を出してはいけない」という考え方などが少しずつ分かるようになった。最初は冷たいとばかり思っていた彼女の行動が理解できるようになった。

指導教官との初対面の時も、今も記憶に残っているぐらいのカルチャーショックだった。韓国では指導教官の研究室に手ぶらで行くと、礼儀正しくないこととなっている。私は韓国式に、韓国の伝統のお土産を持って、指導教官のところにすごく緊張して挨拶にいった。先生にお土産を渡したら、先生は怖い顔をして「こんなものは持って来ちゃだめですよ」と、つめたく叱った。その夜家に戻ってきて、私は何も悪いことしてないのに先生に叱られたとばかり思って、これからどういう風に先生と接していけばいいか不安になって涙がでた。その後、大学院に入り、指導教官と論文指導で付き合っているうち、自分の研究さえしっかりとしていれば、指導教官とはどういうふうにうまく付き合えばいいかなんかは悩むことがないということが分かった。

その他も、大きかれ少なかれカルチャーショックはあったが、いろいろな形で日本人と接し、お喋りしたり、日本のテレビや本を見たりしているうちに、私も知らないうちにだんだんそれを感じなくなった。

あの時は深刻だったこのようなカルチャーショックが今では私の日本留学の思い出の一つ一つになっている。

６年間を振り返ってみると、本当に良い環境と良い日本人に恵まれて、いろんなことが学べて、いろんな面で成長したなあとしみじみと感じている。

最近は、日本でのことがまるで夢だったような感じがするぐらい、日本でのことが懐かしくなって、夕方になると、つくばの夕方の風景をふっと思い出したり、宿舎の中で勉強している姿を思い出したりすることがしばしばある。

日本、特につくばでの留学生活は、私には心の故郷になっている。韓国に戻ってきて何かつらいことがあったりするとつくばでの平穏な一日が思い出されて、心の平穏を戻したりしている。

今は、最初日本に行ったときのカルチャーショックをここ韓国でまた感じながら、母校の後輩たちに私が体験した日本と日本語をいかに正しく伝えればいいかを工夫する毎日を送っている。

日・中の生活における『＋』・『－』

孟（もう）　子敏（しびん）
筑波大学・博士（言語学）
松山大学人文学部教授

日本に滞留している時間はあっという間に６年間になった。この６年間、休暇や資料収集やフィールドワークのため、よく日本と中国の間を行ったり来たりした。中国に帰るたび、都市や都市にいる人々や人々の暮らし方などが大きく変わってきたと感じた。日本は、流行しているもの以外、何の変化も殆どみえない状態にある。十年前は現在と同じで、十年後も現在と同じなのだろうか。だが、日本と中国での生活の違いはやはり顕著であった。マクロ的に見るならば、どっちがよいのかははっきりといえないが、ミクロ的に見るならば、その違いを自分自身のまわりの具体的な実例を挙げて述べてみることができる。

私の専攻は言語学であり、このエッセイで読者にとりたてて大きなパースペクティブを提供することはできないが、簡単な「＋」・「－」という符号だけを使って、煩わしくてこまごましたことを配列して表現したいと思う。「＋」とは肯定もしくは私が見たことがあるものを表し、「－」は否定もしくは私が見たことがないものを表し、「＋」・「－」併用とは半々であることを表す。内容に疑問を感ずる場合には「？」を使って表す。「＋」・「－」あるいは「？」の下にある備考欄に、なるべく私の説明をつけるようにしてみた。

・項目　ビ　ル
・中国　＋
・日本　＋
・備考　　改革開放以来、中国の都市に、確かに数多くのビルが建てられた。ビルの高さや形について言えば、日本と比べて少しも劣らない。中国の南部にある深圳などのビルならば、日本より立派でかつ個性が強いかもしれない。けれども、日本と顕著に異なる点がある。それは、中国にある高級ビルの最上階には普通の人間は登れず、日本では、誰でも登れる。たとえば、東京都庁のビルに観光客は自由に登って見物できる。

改革開放以来の中国の変化に対して、あるヨーロッパの記者が「都市が高くなったり、女の胸が高くなったり、値段が高くなったりした」という「三高」で生き生きと描き出したそうであった。確かにそうだが、このように高くすることは容易なこととも言える。しかしながら、国民全体の資質を高くすることはかなり困難なことなのである。

・項目　綺麗な公衆トイレ
・中国　＋－
・日本　＋
・備考　　中国の街にもちょっと綺麗な公衆トイレがあるとはいえ、そのようなトイレはすべて有料になってしまう。数多くの公衆トイレは汚くて、見るのも、臭いを嗅ぐのも堪え難いものがある。もしトイレに行きたければ、必ず息を詰めて、一息に終えてしまったほうがよい。「北京でどのようにトイレを探しますか」と聞かれたとき、私はからかい半分に「漢方医の望・聞・問・切という方法は有効である」と答えたことがある。

中国のトイレは、もう１つの特徴を持っている。便器があるそれぞれの空間を隔てるものがなく、自分のところを前後と左右から見られるというわけである。

日本の都会では、私が見た公衆トイレはすべて綺麗であり、かつよい香りを放っている。そこは便所だけではなく、化粧をする人もいるし、さらに時間を無駄にしないためだろうか、食物などを食べる人もいた。

2、3年後、北京でオリンピックが開催され、上海で国際博覧会が開催される予定であるが、もし公衆トイレが引き続きこのような状態のままであれば、きっと各国からのお客さんが「中華料理は美味しいですけども、食べた後の用を足すところといえば、ちょっとね」という文句が出てくるに違いない。心から中国の公衆トイレが綺麗なことを願ってやまない。

・項目　有料トイレ
・中国　＋
・日本　－
・備考　　十数年来、中国の多くの地方で、有料トイレが設けられ、さらに増えているそうである。これはトイレを綺麗にするのを口実として、利益を生む事業として経営している疑いが高い。もともと無料であったトイレがだんだん有料になってきたのである。たとえば、北京の地下鉄駅構内にあるトイレである。

理屈から言えば、トイレを有料にするということは非常に人道に悖る破廉恥なことであると見られる。2001年の春、息子と一緒に北京で観光したとき、北京復興門地下鉄の駅構内で、息子はトイレに行きたいと思ったが、トイレ代は２角。息子は４歳で、一人で公衆トイレに入ったことがなかった。かつ駅構内にはいろいろな人が混ざりあっていたため、私は心配して、息子を連れてトイレに入りたいと思った。だが、あの「トイレサービス従業員様」は「だめだ。トイレ代を払わなければならない」と言った。そのとき、私はくそまじめなモードにあったので、もちろん払うことを拒んでしまった。

お客さんは切符で地下鉄の駅構内に入った後、すべての公衆設備を使用する権利を持っているはずである。トイレという部門を独立して経営してもよいが、その場合には、切符にトイレ代を含めるべきではない。あるいは、一枚３元の切符に、２角のトイレ代を加えるべきである。このようにすれば、きっともっとたくさんのお金を儲けることができる。当然、一番大事なのはお客さんの便宜をはかることである。

2、3年後、北京でオリンピックが開催されたり、上海で国際博覧会が開催されたりする予定であるが、公衆トイレの管理者たちや指導者たちが日本などの経験をよく学んで、公衆トイレの問題を研究したり、解決したりするということを願ってやまない。もしこのように引き続き有料でやっていこうと思えば、開催している期間に、海外からの夥しい観光客の便宜をはかるために、「このトイレではアメリカドル・日本円・ＥＵユーロで支払うことができる」と明記したほうがいいと思う。

日本では、私がいったトイレはすべて無料である。聞くところによると、有料トイレもあるそうだが、いままで見たことがない。

・項目　トイレットペーパーを備えている公衆トイレ
・中国　＋－
・日本　＋
・備考　　一般的にいえば、中国で、公衆トイレに行くとき、誰でも自分ですべての必要なものを用意しなければならない。ある有料トイレには情けなくなるほど質の悪いトイレットペーパーが用意されてあるかもしれない。日本のトイレはすべてきれいなトイレペーパーを備えてあり、かつ無料である。

・項目　所かまわずに痰を吐く
・中国　＋
・日本　－
・備考　　中国では、農村でも都市でも、多くの人が所かまわずに痰を吐くという習慣を持っているそうである。筆者の観察によると、方式や位置などによって、痰の吐き方はいろいろに分類される。

2003 年の春に、ＳＡＲＳという肺病がはやった。ＳＡＲＳが流行した後、所かまわずに吐くという習慣はきっと改善されるものと思われた。けれども、2003 年の夏の私の体験からいうならば、この痰を吐く習慣は少しも変わっていないといえる。ある日の朝、ある都市で、331 番路線のあるバス停で、意識的に地上に吐かれている痰跡を数えてみたが、合計で 168 があった。新鮮度から見れば、相当多くの痰は「新登場」したものだと判断できる。

日本では、私は所かまわずに痰を吐く人に会ったことがない。日本で所かまわずに痰を吐く人が全くいないということは信じられないが、もし機会があれば、ちょっと頑張って、所かまわずに吐く人を探してみようと思う。もし見つかれば、この日本の「－」は「＋」に変わってしまうことになる。

・項目　所かまわずに小便する
・中国　＋
・日本　＋
・備考　　所かまわずに小便するという現象は、多くの人がみたことがあるそうである。自分自身の客観的条件や社会的条件のため、所かまわずに小便する人の中、90 パーセント以上は男性だと思う。この点で、日中は同じである。しかし、日本では、所かまわずに小便する人はやはり少ない。

・項目　ついでにゴミを捨てる
・中国　＋
・日本　－
・備考　　中国で、町に、バスや汽車の中に、会場に、ビルの廊下に、園（公園、校庭）の中に、自由市場に、捨てられているゴミは至る所で見られる。日本で、この状況はまだ見たことがない。一般的に、多くの人は指定された場所に置き、さらにある人はゴミを自分の家に持って帰る。しかも、生活ゴミを処理するのはかなり面倒なことで、種類が違うゴミは指定の時間帯にそれぞれ捨てなければならない。私が日本に来たばかりのとき、ゴミをどうのように処理するかは最も頭が痛いことだった。はじめてゴミを捨てた際、過ちを仕出かさないかとひやひやしていて、まったくドロボウのような感じであった。

・項目　機内で携帯電話
・中国　＋
・日本　－
・備考　　飛行機で広州から桂林に飛んだ時のこと。あと 20 分で飛行機は着陸するとアナウンスがあったとき、周りの人が次から次へと携帯電話をとり出して、家族や友達へ無事に桂林に到着するというような情報を伝えていた。機内には何人かの日本人の旅客が坐っていたが、みんなは驚きのあまり呆然としていた。私にとって、さらに驚いたのは乗務員もそれを見過ごしていることだった。日本では、このように吃驚するような光景を見たことがない。

・項目　巨大な待合室
・中国　＋
・日本　－
・備考　　中国のすべての駅には混雑でごったがえす巨大な待合室があるが、日本の駅構内にはない。列車に乗るのは中国のバスより便利であるため、人の流れはわりと順調である。日本では、駅構内に多くの附属施設があるが、それは商店や飲食店である。

・項目　テレビコマーシャル
・中国　＋
・日本　－
・備考　　日本の国営するＮＨＫというテレビ局はコマーシャルを流さない。中国では、公営テレビもしくは国営テレビ局がコマーシャルを流すことは当り前で

ある。

・項目　毎月祝日がある
・中国　－
・日本　＋
・備考　　つい最近、中国の祝日はかなり多くなってきたようであるが、やはり毎月祝日があると言える状態ではない。日本では、6 月以外、どの月にも「赤い日」がある。ある日、授業に行ったら、教室の中に一人も学生がいないという光景を目にして、全身冷や汗をかいてしまった。私は自分の授業を学生たちが集団でストライキしたのだと思った。それは教育現場における重大な事件であると思ったのである。そのあと聞いてみたら、その日は「海の日」で、全員が休むということが分かった。

・項目　ホームレス群
・中国　－
・日本　＋
・備考　　約 10 年前、私は北京で本当のホームレスは 1 人しか見たことがなかった。彼の家は旧西門橋の下にあった。東京のホームレス群について、その規模の巨大さや光景の壮大さといえば、本当に目の保養になってしまった。

・項目　歴史・現実・将来
・中国　？
・日本　？
・備考　　どのような人にとっても、どのような民族にとっても、どのような国にとっても、歴史というものは美しい嘘ではないかと、現実は美しい花ではないかと、また、将来は美しい夢ではないかと思う。

日中及び日韓の間には、歴史をめぐっての論争がよく見られる。だが、そのような論争によって利益を得る者は誰であるかという問題を最も考えるべきことである。

生きている生命として存在する私たちは、歴史のため、現実を壊して、将来を捨てたほうがよいであろうか、それとも将来のため、現実を考慮して、歴史を捨てたほうがよいであろうか。

私と日本

ムラギルディン　リシャット
Mullagildin, Rishat
慶応義塾大学（環境デザイン）

13 年前の私に「あなたは将来日本に留学するでしょう。」と誰かが言っても、まったく信じられないことだったでしょう。ロシアで生まれ育った私にとって、ロシアで建築家になる事が最大の夢でした。ソ連時代の当時、留学や海外での生活はイメージできないことでした。日本での生活は私の人生の選択肢にはまったく入っていませんでした。もちろん本やテレビで伝えられる、エキゾチックな日本の文化や、世界レベルの技術に興味ありましたが、8 年もの間日本での研究活動を行い、これから日露間の建築・都市計画を専門にすることとなったのは、本当に奇遇な運命だったと思っています。

《日本との出会い》

初めて日本との関わりをもったのは大学間の交換授業でした。日露各１０人程度の学生がお互いの国に滞在しながら、同じ敷地設定の下、設計課題に取り組み、そして学生同士がそれぞれの文化を伝え、学ぶというプログラムです。1992 年の夏にまず日本の学生がモスクワに来ました。英語を話すことができる私が中心となって、日本の友達にロシアの新旧の文化を紹介しました。不思議と波長の合う彼らとの時間によって、日本をとても近く感じ、そして親しみを覚えました。日本人に対しては想像以上に明るく親切であり、外国人にとても慎重な対応する民族という印象ももちました。その翌年の 1993 年にロシアチームが日本に 1 カ月滞在することになりました。これが私の初来日となります。彼らも、設計課題で忙しい時間をやりくりしながら、鎌倉・京都・奈良・大阪の建築をたくさん見せてくれました。

私はこの来日の前には、オーストリア（1989 年）、東ドイツ（1990 年）を旅行しましたが、旅の終わりには「早くロシアに帰りたい！」という気持ちになっていました。しかし日本では帰国が近づくにつれて、もっとゆっくりと見たい、もう少し滞在したいと思い、帰国はとてもつらいものでした。私に限らずロシアのチームがみなそう感じたのは、きっとロシアが純粋なヨーロッパではなく、アジア文化圏も含んだ大国であるた

め、不思議と通じる感覚があるからではないかと思いました。事実ロシアは約 160 の民族が共存していますが、ウラル山脈から東の広大な地域はまさにアジア・エリアであり、人々のメンタリティー、文化（食文化・音楽）などに共通点が見られます。

《日本はソ連のようだった》

日本への強い関心をもちつつも、私は自分の夢に向かってモスクワの設計事務所での経験を積み始めました。ちょうどソ連時代に老朽化した政府の施設の建替えが進んでいました。私はクレムリン内の大統領執務室の修復チームに抜擢され、そこで多くを学びました。また精力的にコンペにチャレンジしました。日本への強い思いは、日本の建築雑誌が主催するコンペへの応募という形で消化し、入選を果たしました。

1993 年の来日の際にお世話になった教授より日本への留学を進められ、文部省の建築・都市計画文化プログラムの奨学金によって、ちょうどクレムリンの改修が一段落した 1997 年に来日することになりました。

日本での日々の生活、研究や仕事を通して実によく《既視感》を感じたことがあります。「あっ、これはどこかで感じたことがある」ととてもよく思いました。それは日本という国には、ソ連が達成できなかったが、理想的と考えられた仕組み〔社会主義体制〕が完璧に成功している場面をたくさん見られる社会があるのです。たとえば、自然に人々の間でコミュニティールールが決まり、それをみんなが守る＝常識の浸透。レベルが揃っている＝中流意識。コミュニティーの結束＝団結力など、政治的な縛りの中に生まれる体制ではなく、自然に地域や家族によって守られる根強いシステムが完成されていると思いました。日本に長くいるとあらゆる場面でソ連時代のロシアのコミュニティーがもっていた部分が見えてきました。初めての海外生活ながらも、何か拠り所のようなものがありました。

来日当初はソ連崩壊後まもなくの頃であり、ロシアではさまざまな問題が噴出していました。カタストロフィの後の長い冬の中でがんばっているロシアと比べると、「便利な日本」にホッとしました。半ズボンでサンダルを履いて地下鉄に乗っているおじさんをみると、ソ連時代の田舎に暮らすような安堵感を覚えました。世界一の大都市にいながらそう感じることは不思議な気分でもありました。

私が日本にそのような印象をもつ一方で、日本におけるロシアに対する暗いイメージは、鉄のカーテン時代から全然変わっていません。私は 1992 年の交換留学の際、日本の友人がロシア文化に強い関心をもち感動してくれた時のことが忘れられません。私は専門を生かしながらできる文化レクチャーやエッセイの執筆、とても深い理解を示してくれた出版社による『ロシア建築案内』の発行、ロシアの偉大な建築家を紹介する展覧会の実現、そして日本とロシア建築家間の交流をオーガナイズするなど精一杯の活動を行ってきました。次第に私のこの活動はロシアや日本でも高い評価を受けるようになり、私に自信も与えてくれました。私にしかできない活動をこれからも続けることによって、少しでも両国間に強い関係を築くための役に立てればと思っています。私の夢であった〔ロシアでの建築家〕は地域や文化の枠に収まらない幅広い活動へと進み始めています。

《食文化》

ある科学者の研究によると、人の身体は 7 年間で細胞のレベルまですべてが生まれ変わるそうです。私は来日して 8 年過ぎましたが、日本にいるときのほとんどは和食を食べているため、最近はつくづく身体や味覚が変わったと感じます。来日当初おいしいと思えなかった豆腐やうどんは今では大好物です。

また友達のおかげで、北海道から沖縄までのさまざまな伝統料理を頂きました。地域ごとに特徴ある種類豊富な野菜、魚によって作られる伝統料理は、その風土を生かした文化の結晶といえます。また日本人がこの 8 年の間の急速なブームによってワイン文化を学んでいる間に、私は楽しく日本酒を学びました。日本の骨に染みる寒い冬には熱燗に塩辛があうということを知り、そして新潟の友人に連れられて十日町の酒屋で 20 種類以上もの日本酒の特徴などを聞きながら、利き酒にもチャレンジしました。私は本当に日本を楽しんでいます。

そして日本ではこれまで何度にもわたってボルシチやピロシキのパーティーを行いました。日本人の味覚にも合うようで大変好評です。それぞれの料理をふるまいながら、お酒を飲み、いろいろな話をするのが一番楽しく、ためになる文化講座だと思っています。

《日露国交 150 周年》

今年 2005 年は日露国交 150 周年です。長いようで、短い期間です。日露戦争、第二次世界大戦とふたつの大戦争を経た両国は、お互いを理解するための時間が

まだまだ足りないのかもしれません。

過去に両国間の文化交流が進んだ時代があります。宇宙にガガーリンが飛んだ1960年代はロシアにおける第一次日本ブームと言えます。社会主義体制の下、近代化を進めるロシアと、戦後の復興、東京オリンピック景気に湧く日本は相反する体制の下、それぞれの文化に強い関心をもった時代といえるでしょう。ソ連では知識人たちがこぞって俳句や短歌を作り、日本の映画を見ていました。黒澤明はロシアの探検家Ｖ・Ｋ・アルセニエフの作品「デルス・ウザラ」をロシアで映画製作しています。またロシアで上映された戦後広島で生まれた日本人バレリーナとロシア人との愛の物語「私の愛、モスクワ」は大絶賛を受けました。21世紀に入ってから第二次日本ブームが始まっています。世界的な傾向ともいえますが、村上春樹の小説が次々と翻訳出版され、日本ではボリス・アクーニンが邦訳されています。映画の世界ではビートたけし作品への人気が高まっています。またモスクワをはじめ大都市には和食屋が軒を連ねており、誰もが箸を器用に操りながら鮨やラーメンを食べています。

《変化》

来日当初の８年前に比べて世界的に情報のグローバル化が進み、インターネット、携帯電話の普及によって人々の生活、考え方は急速に変化しています。特に若者の意識の変化は大きいと感じます。さまざまな国の情報を多角的に得ることによって、自らの判断で行動をしようとする国際人も増えています。まだまだ充分とはいえませんが、日露相互の情報交換がさらに増えることによって、今後日露間の発展に明るい大きな変化が生まれることを期待しています。

《追記―母の話》

私の母は極東のウラジオストック生まれです。第２次世界大戦が始まった時に、軍人であった祖父は家族を安全なウラル山脈南部の都市ウファに疎開させました。祖父が戦争で亡くなったため母は両親を失った優秀な子供のための国の高等教育機関国立民族専門学校に通い、そこで父に出会いました。私の日本文化への関心は、そのようなルーツによるものなのかもしれません。

便利な国、日本

ナポレオン
Napoleon
東京工業大学・博士（機械制御システム）
株式会社ヤマタケ研究所

１９９４年に来日して以来、あっという間に１１年が経ちました。日本へ来る前に、日本が技術において先端国であるという認識を持ち、日本に留学することができれば、最先端の技術を身に付けられると思っていました。実際に日本へ来てから、様々なことを体験かつ勉強することができたことは非常に嬉しく感じています。

私は中学校の頃からパソコンや電子回路について非常に興味を持ちました。しかし、私の国であるインドネシアにいたときに、これらをなかなか身に付けることができませんでした。パソコンはインドネシアでは高価なものであり、私の家族には買えませんでした。そのため、インドネシアにいた時には、パソコンの勉強をすることは全然できませんでした。しかし、日本ではパソコンが毎日の生活で欠かせないものであり、日本人は全員といえるぐらいパソコンを持っています。私も日本へ来てから、パソコンを持つことができ、実際にパソコンの勉強を行うことができました。

インドネシアにいた時、ラジオ等のような簡単な電子回路を組み立てることを試しました。しかし電子部品もインドネシアでは高いので、学生であった私にとって実際に組み立てるために自分のお小遣いを少しずつ貯金して、電子部品も少しずつ購入するという風に行いました。また、時々電子部品が売り切れという状態が起こり、部品の取り寄せには時間がかかり、一つのものを組み立てるのは何ヶ月間も掛かりました。

しかし、日本では誰でも簡単に電子回路の組み立てを行うことができます。秋葉原に行けば、どんなキットと部品も揃い、安価で手に入れることができます。私も日本へ来てから、よく秋葉原へ行って、様々なキットを購入して、組み立てを行いました。これにより、電子回路というものが理論上だけではなく、実際に体験できましたので、これらの知識は将来、非常に役に立つと思っています。

このように、日本ではやる気さえあれば、様々な知識や技術を身に付けることができます。本を読んで、

理論上のことをわかるだけではなく、実際に手を動かして体験することにより、様々なアイデアが浮かぶようになります。日本人はアイデアが豊富で、日本で技術が早く発展し、新しい製品が続々登場しているのはこれらのお陰だと思います。

私がびっくりしたことは、電子回路について詳しく、物作りについても慣れている小学生ぐらいの日本人の子供は稀ではないことです。インドネシアでは大学で勉強しても、電子回路についてわからない大学生もたくさんいます。私は日本のように便利な環境で勉強できたのは非常に嬉しく、これからも様々なことをやってみたいと思っています。

現在、私にとって足りないものとしては時間です。時間があれば、以上で述べたように様々なことをもっとやってみたいと思っています。さらに現在私が心配していることとしては、私の国であるインドネシアに戻ったら、日本のような便利な国ではないので、私の生活にどのように影響を与えるのだろうということです。

諦めなかった日本留学の夢

ホメンコ オリガ
Khomenko, Olga
東京大学・博士（地域文化研究）
在ウクライナ、キエフ

日本語を勉強しはじめた時には、まさか日本に行けるとは思わなかった。距離的にとても離れているウクライナから見れば、日本はとても「遠い国」に見えた。しかし翻訳された日本文学の作品を読んでみるとその「遠い国」の魅力を強く感じるようになった。しかしその当時はまだソ連が崩壊し始めた頃で、留学に行けるチャンスはなかなか無かった。ウクライナはソ連の二番目の大きな共和国であっても日本への留学生の殆どはモスクワ出身の人だった。それで日本語を勉強し始めた頃に、「いくら勉強しても絶対いけないでしょう」と両親や友達にも笑われた。だが私は日本へ行く夢を持っていたので、諦めなかった。しかし漢字文化圏出身ではない私にとって、特に漢字を覚えるのは予想以上の努力が必要だった。だが何か目的があれば、意外なエネルギーが出る私は、家のあちこちに漢字を書いたシートを貼り付けて少しずつ学び続けていた。

それである日に日本に行けるようになった。だが行ってみたら、私は読んでいた文学作品が描かれている日本と全く違う国に会えた。最初の頃はすこしがっかりした気持ちがあった。つまり、日本の人が皆、俳句を読む毎日を過ごしているというわけではない。今、それを思い出して見ると本当に笑うしかないのだ。だが住んでみると文学の顔ではなく、本当の日本の顔と心を見ることが出来たと思う。

日本で勉強している時、国内旅行をするのが好きだった。とりわけ、電車の旅が一番好きだった。なぜなら電車で旅すると、窓からいろいろな景色を眺めると同時に回りにいる人と話もできるからだ。学生だったから新幹線ではなく、青春十八切符で旅行した。一見したところで長い時間かかるから不便と思うかもしれない。だが休みの日をすごしている学生の私にはあまり急ぐ必要がないので、逆にゆっくり旅をして、回りの景色や人の顔を見ながらその人と話すのが好きになった。

ウクライナでは、日本人は武士の民族であるので厳しい顔をし、友達になりにくいというイメージがある。しかし私の電車の旅の経験からしてもそうではなかった。つまり、日本人は皆親切で話しかけてくる人が多いのだ。電車の中で様々な人と話が出来て友達になったこともあった。外国人である私が日本語を出来ると知ったら喜ぶ人が多く、さらにもっといろいろなことを聞いてきた。電車で旅している時、会社の社長から専業主婦の人まで様々な人たちと話せることが出来てとても良かったと思う。それは一番の思い出でありながら、消えない財産でもあるといえる。そのおかげで自分も少し成長したと思う。

人と話すことによって、その国の「文学」で描かれたイメージではなく、実際のことがもっとよく分かるようになった。また民族に関係なく、人々はどの国でも、底辺に同じ悩みを抱えていると分かった。共通点が少ないと思っていた日本人とウクライナ人には、より似ているところがあることが分かった。その中の一つは「感じる心」であるかもしれない。実際、お互いの文学作品には「楽しい」ものより、すこし「暗くて悲しい」ものの方が多い。だが日本に留学に行けなかったら、実際の日本は文学の日本とすこし違うということがわからなかっただろう。家族や友達の忠告を聞か

ずに、日本への留学の夢を止めなくて良かったと思う。

「団栗の背比べ」か「千差万別」か

ゾンターク　ミラ
Sonntag, Mira
東京大学（宗教史学）
富坂キリスト教センター研究主事

アジアの国に生活したことのない西洋人にとっては、アジア人はみな同じに見える。私も、来日してから６ヶ月経って、やっと日本人の顔を区別できるようになった。しかし、２～３年日本に滞在した後でも、回転寿司屋のお兄さんたちが兄弟であると思って、失笑を買ってしまったこともある。彼らは、本当に似ていたのに！

今まで８年間日本に住んできた私にとって一番恐ろしいシナリオを述べると、ドイツに戻って周りの人から「日本はアアだ、日本はこうだ、日本はドイツと全く違う云々」という話を延々に聞かされる羽目になるという予想である。つまり、ドイツでは、一度も日本を旅行したことのない人でさえ、「日本人」はどういう人か一番よく知っているように思っている。それと比べて、日本人は自分の国と同胞について私見を持っているのに、「日本はどうですか」とよく外国人に聞く。この問いで始まる会話の多くも、ステレオタイプの交換にしかならない。私は、「日本はどうですか」と声をかけられると、本当に困ってしまう。８年間日本にいたのに、「日本」というのは未だ分からない。

それはなぜかというと、私は、数が限られた特定の日本人と出会って、様々な条件で決められた特定の経験をしただけである。この、特定の経験と人との出会いから私が学んだのは、日本にも「卵も不ぞろいだ」（ドイツ語の諺：Kein Ei gleicht dem anderen.）という諺が当てはまることである。つまり、同じく見えるものもそれぞれが違う。私が日本にいればいるほど日本と日本人の多様性が見えてくる。「日本とは」あるいは「日本人とは」との考え方は世迷言に変わってくる。

こうした自分の経験の限界を鑑みると、日本における外国人に対する差別といった問題も、論じにくくなる。どんな国でもそうであるが、そもそも差別というのは、個々の人間に画一性を求めて、出る杭を打つ姿勢より生じることである。「差別」はあくまで法律関連の用語ではあるが、ある態度・行動について、「差別」と言えるほどの条件は何なのかということはうやむやなのである。ある高校にフィールドワークのために行った時、私は差別問題に関する授業を担当させていただいた。そこで、私は、日本にいる間経験してきた出来事の中で「訝しい」と思った経験のいくつかを語って、生徒たちにそれらを分類してもらった。

つまり、「差別」と考えられる出来事には、少なくとも（１）異文化間コミュニケーションの問題、（２）出会った日本人（と自分自身）の精神状態による問題と（３）法律上の不平等による問題との３つのグループがあると思う。実は、その（１）か（２）のグループに入る出来事は、差別とは言えないが、それらは（３）の原因にもなる可能性があるので、無視してはいけない。ただ、その（１）と（２）の区別は、非常に難しい。沢山の日本人と出会っても、日本人口の１パーセントにさえもならないだろう。出会った日本人から受けた印象が、どれほど日本人全体の代表として考えられるかは問題である。

明確に日本人論を好む人だけではなく、ただ日本社会の中で育てられてきた人も、度々日本人の等質性を（極端の場合、単一民族国家論の形で）強調する。日本語の諺を調べれば、等質を強調する諺が多数あることが分かる。しかし、確かに反対の具眼を語る諺もある。

「団栗の背比べ」か「千差万別」か。そもそも、両方とも「同じ現実」に対する「異なった見方」に他ならない。ただ、日本では、後者の見方は、過去に否定されたと言えよう。将来の日本、また日本の他国との関係維持のために、公論においてもその二つの見方が一層バランスを保つようになればよいと思う。

私の日本家族

さい　えいきん
蔡　英欣
東京大学（法学）

1997 年２月、留学の夢を実現するために来日した。同年９月には修士課程の入学試験があり入試の準備だけで切羽詰っていたため、母が私の住まい探しや日常生活用品の調達などを手伝うため東京に同伴してきた。現在の下宿に引っ越してから、野菜や果物などの買い

物はちょっと遠いところにあるスーパー、あるいは品物があまりそろっていないコンビニを利用していた。ある日、母と私が散歩していた時、下宿の近くに一軒の八百屋さんを発見した。この発見は私たちにとって大変幸運な出会いだった。それ以来、野菜や果物の買い物はこのお店ですることになった。

母は私が一人で東京で生活できそうだと思い、台湾へ帰ることにしたが、私のことを心配し、この八百屋さん(飯塚さん)のところを訪ね、飯塚さんご夫婦に娘のことを宜しくお願いしますと言ったようだった。この母の一言で、それ以来８年間、ご夫婦は私を家族の一員として面倒を見てくれた。私はご夫婦のお陰で、東京での生活でほとんど苦労せずに研究に専念することができた。これに加えて、ご夫婦との交流により日本のある家族像を覗く機会をいただいた。

飯塚さんの家族構成はご夫婦と90才のおばあさんの３人家族である。本郷に小さな八百屋さんを経営する一方、お住まいは千葉の柏市にある。ご夫婦は品物の仕入れの関係で、日曜日と祭日を除き毎日夜中の２時半に起きて車で柏から本郷に来なければならない。お店は朝７時半から夜７時まで営業するが、その後お店の片付けなどをして自宅に着くのはだいたい夜の９時半すぎである。おばあさんは、昼間は隣の介護施設で過ごし夕方にお家に戻り、ご夫婦の帰りを待っている。ご夫婦の趣味といえば、お家の近くに小さな畑を借り週末の時間を利用して土を耕し種を蒔き、いろいろな植物の成長を楽しんでいることである。このように一見して平凡な家族に見えるが、実際にそれぞれが頑張って生きている姿を見て、ご一家のことを心から尊敬している。とりわけ、ご夫婦の仕事に対する勤勉さには頭が下がる。また、90才のおばあさんは背骨の病気があるためほとんど寝たきりにもかかわらず、人に迷惑をかけないようにできるだけ自分のことを自分でやる。もっと驚くのはおばあさんの記憶力が抜群で、私たちより物事をよく覚えていることである。

奥さんの弟さんが台湾の大学で日本語教育の教鞭を執っている関係で、ご夫婦は台湾からの留学生の面倒をよく見ている。毎年のお正月を迎えるたびに、ご夫婦は私たちを家で一緒に過ごすよう誘ってくださる。日本のお正月はほとんど飯塚さんのお家で過ごしていた。年越しそば・おせち料理・元旦の日の出・初詣など、日本のお正月を存分に味わうことができた。ゴールデンウイークには、伊豆半島・房総半島などへの旅に招待され、東京近辺のいろんな名勝を回ることもできた。日常生活では、ご夫婦は私が研究室で遅くまで勉強することを大変心配して、なるべく早く家に帰りなさいと何度も声をかけてくださった。また、胃腸炎で体調が崩れたときに奥さんはさつまいものおかゆを作ってくれたが、そのおかゆを食べながら私は涙が止まらなかった。

私と飯塚ご一家が日常生活上の交流を重ねて築いた絆は、この複雑に絡み合っている人間社会の一つの縮図にすぎないが、留学生の私にとってはかけがえのない宝物である。来日する前に、日本社会は保守的であり外国人に対して閉鎖的な態度を取っているとよく言われた。しかし、私の経験からいえば、この「定説」は必ずしも正しいとは思わない。もちろん、留学期間中に「外国人」であることによりひどい目に会ったことがないというわけではないが、少なくとも私の回りには、外国人に対し心の扉を開いて寛大な態度を取っている日本人はたくさんいる。彼らは名実ともに「国際交流」の実践者であると思う。

母国からみた日本

梁（ヤン）　明玉（ミョンオク）
お茶の水女子大学（人間発達科学）

日本に留学してからちょうど10年。留学する前の日本という国に対するイメージは、まず経済大国、電子製品、アニメ、物価が高いなどであり、日本人に対するイメージというと、親切、清潔、礼儀正しいという言葉が浮かんでいた。実際、私が来日して初めて感じた日本の第一印象は「安定」ということであった。この印象は６ヶ月ぶりにソウルに帰ったとき、落ち着きのないソウルの印象と重なり、その違いがはっきり見えてきた。

大体時間どおり運行されている日本の電車やバス、それに車のクラクションの音がほとんど聞こえない日本とは違って、韓国では、バスは時間通りに来ないし、バスに乗るためにはバス停の前後10メートルくらいは走らないと乗れないし、タクシーは勝手に方面が同じという理由で他の乗客をのせるし、あっちこっちで車のクラクションはとまらない。

それに加えて物価の上昇もとまらない。６ヶ月の間

にバスの料金や公衆電話の料金が上がっていた。それ以降も国に帰るたびに全般的に物価があがっていた。今はだいぶ落ち着いているような気もするが、大きくは変わっていない。日本は 10 年前と比べて，その間に電車の料金が 10 円くらい上がったという記憶以外は目立つような物価上昇は見られない。安定的な日本と落ち着かない韓国の違い、これは根本的には政治、経済、社会がどれほど安定しているのか、その差を物語っている。

私は留学して驚いたことがある。日本の友達から韓国に旅行して日本語をしゃべってもいいの？という質問を受けたことである。どうしてそんなこと聞くの？と聞いたら、日本語をしゃべったら韓国人に嫌われるかなと思って、という返事が返ってきた。韓国の 60 歳以上の年輩の方のなかには、昔のことで日本を語るとき感情的になる方やある程度の反感を持っている方もいるのかもしれない。しかし、韓国の若者は、過ぎ去った過去のことで感情的になることはまずない。若者の中には日本の音楽やアニメが大好きで日本文化を理解するためにわざわざ日本語を習う人も増えている。日本でも、留学当時とは違って、冬ソナブームで、今まで韓国に関心を持てなかった年齢層まで関心をみせるようになった。このように文化外交が両国の理解をより深めるのに大きな影響を与えていると思う。

教科書や領土問題などで、ソウルの日本大使館の前で激しくデモをやりながら日章旗を燃やす場面が日本のマスコミで報道されたことあるが、そのような行動は一部の過激な人たちによる行動であり、韓国人の中ではその過激な行動に対しての非難の声もあった。マスコミでは、ネガティブなことばかりがクローズアップされるため、まるで韓国人すべてがそう思っているような印象を受けることがあるかもしれない。韓国のマスコミも同様である。このようなマスコミの影響は偏見や誤解を生じさせる。こうした偏見と誤解が両国の理解を妨げる一つの要因になるのであればまことに嘆かわしいことである。

日本も韓国もお米を主食としているのは同じであるが、食べ方や食器の使い方が違う。日本はご飯も味噌汁も箸で食べる。それでご飯や味噌汁を食べる時は茶碗やお椀を手に持って食べる習慣があるが、韓国では茶碗やお椀を手に持って箸で食べるのは礼儀正しくない行動である。韓国では基本的にご飯と汁を食べるときはスプーンで、おかずを食べるときは箸を使っている。日本で使われている食器類とは違って韓国の食器や箸はステンレスか銀で作られていて、手で持って食べるのには重いし、ご飯や汁の入った食器は熱くて手で持って食べるのが難しいからこのような習慣ができたのかもしれない。

また、日本ではそばやうどんを食べるとき音を立てて食べる習慣があるが、韓国では食事のしつけとして、食事のとき音を立てて食べてはいけないし、それ以外にも目上の人が食卓に座って食事を始めるまでみんな待たなければならないし、先に食事が終わっても目上の人の食事が終わるまで席を立ってはいけないなどの食事のマナーがあり、このような食事のマナーはどこの家庭でも守られている。

来日して間もなく、日本人の保証人の家に遊びに行ったときのことである。いろんな日本の料理を食べた後にお茶づけがでた。お茶漬けを食べるのにスプーンがない。だから皆さんはどうふうに食べるかなと思って様子をみた。すると、みんな茶碗を手に持って、箸で、しかも音を立てながら食べるのに驚いた。その時は、「お腹が一杯です」といいながら遠慮した。今はお茶漬けが大好きで片手でお茶碗を持って箸で食べるようになったが。音を立てながら食べるのは未だに抵抗があるけど。

東アジア問題に関する私の見方

叶（イエ） 盛（シェン）
東京大学（先端学際工学）

現在博士論文の審査に入り、これは 4 年間の留学生活が終わることを示すだけではなく、私の学生生活も終わることを示します。そして私の初めての職業生活を迎えることになりますので、就職活動を始めました。この時、初めて中国と日本の「就職活動」の違いを感じましたが、どこでも仕事を探す際には相手に自分のことを最大限にアピールすることが一番重要だと思います。そして、実際に仕事を探すのも 1 つの交流の過程だと思います。どんな事においても、お互いを理解することは問題を解決するための最も重要かつ効き目のある手段ではないかと思います。

交流と言えば、私は最近中、日、韓三国の間に発生したいくつかの問題を思い出します。靖国神社参拝や

領土紛争など三国の間の問題は歴史に対する認識の問題につきると思います。例えば、靖国神社参拝についてなぜ中国と韓国は日本の立場に立つことができないのか納得いかない日本人が少なくないように思います。しかし理解するのは相互的なことであります。日本も中国と韓国の立場に立って、この問題を考えてみることは必要ではないでしょうか。

先日、私は反日デモに関するあるＳＧＲＡの文章を研究室の中で転送しましたが、返事は一人だけでした。とても残念だと思います。これは日本人が歴史に無関心であることに加え、論争になることを避けるためではないかと思います。実は、研究室の日本人は、殆ど日中の歴史問題に関する話をしません。それは中国人との付き合いに配慮しているからではないかと思います。しかし、もしみんなこのままでいるならば、交流が無く永遠に問題を解決できないままだと思います。ですから、三国はまず先入観を捨てて、対話を始めるのが必要です。それは問題を解決することに役立つと思います。つまり、交流するのが問題を解決する唯一の方法だと思います。最近、好例がありました。60 年ぶりに握手した中国国民党と中国共産党であります。

また、三国の間の問題を解決するために政府の間の交流のほか、民間レベルの交流も同様に重要であると思います。現在、在日中国人も在中日本人も多くなりましたので、これはいい機会ではないかと思います。私が日本にいる間、日中の関係はより悪くなり、とても悲しく感じます。私はこのような関係が改善をされることを強く望み、微力ながら役に立てればと思っています。中国に「冤家宜解不宜結」ということわざがあります。つまり、仇を結び続けるのでなく、解消することが必要だと思います。

私は東アジアの安定と世界の平和を望みます。私達が共に更に多くの交流が始められるように頑張りましょう。

２００５年度渥美奨学生のページ　「自己紹介」

包　聯群　「故郷への思い」----- 46

韓　珺巧　「夢へ踏み出す第一歩」----- 47

韓　京子　「見ぬ世の人を友とする」----- 48

江　蘇蘇　「第二の故郷で培った将来の夢」----- 49

金 範 洙　「日本の美しい日々」----- 50

金　娟鏡　「異文化との出会いを通じて―『文化』を作り出す『人の心』－」----- 51

藍　弘岳　「私と徳川思想史」----- 52

ブレンダ・レスレション・テネグラ　「日本留学を決めた理由」----- 53

ヴォー・チー・コン　「知・富を追う」----- 54

王　雪萍　「日本大好きな父親に影響された日本留学」----- 55

王　健歡　「日本留学への道」----- 56

趙　長祥　「異国の景色、故郷の風景」----- 57

故郷への思い

包（ほう）　聯群（れんちゅん）
出身国：中国（内モンゴル）
在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科・言語情報科学専攻
博士論文テーマ：言語接触に関する事例研究
－中国黒龍江省ドルブットモンゴル人コミュニティ言語を中心として－

私は中国黒龍江省におけるモンゴル人が居住する極普通の、かつ普通ではなかったボルジギン家の出身である。嘗て清朝政権時代にこの家族は多くの土地を所有していた。従って、中国解放後に「階層」制度が廃止されるまでの「地主」という“不名誉な”地位に置かれていた。父は町で暮らす豊かな生活を放棄し、または大学で学んだ専攻まで犠牲にし、田舎の子供達に母語であるモンゴル語を教える仕事を定年まで続けた。

私は、幼いころから父の影響を強く受け、大学は内モンゴル大学を選び、大学院に進学してもモンゴル語族諸言語を専攻した。高校時代から日本語を学んだが、それは日本の文化に触れるチャンスとなり、後に日本への留学を決める重要な要因の一つになった。

日本に留学し、視野を広げ、国際交流活動に積極的に参加することによって、私には学校や職場で得られなかった「出会い」と「気づき」、そして「学び」を経験した。ボランティア活動を通して、自分の故郷で、そして社会で起きていることに気づき、日本の方々や多くの留学生同士と共に自分ができる範囲以内の課題に取り組んできた。

そのひとつが、中国黒龍江省における「火事で焼失したウンドル村モンゴル族小学校の再建」である。

私の故郷は 500 人ほどのモンゴル人が居住する少数民族の村である。ウンドル村は長い歴史を持ち、母語であるモンゴル語が日常言語として使われている。小学校は 1946 年に設立され、卒業生の多くが様々な分野で社会に貢献している。村の人々がモンゴル人の風俗習慣を保ちながら、学校では子供たちが母語であるモンゴル語を第二言語として習得し、バイリンガルの生活を送っている。しかし、2003 年 8 月に火事によって学校を失い、母語であるモンゴル語を学べなくなり、村の人々が大変悲しい状態に置かれ、モンゴル族小学校の留存を強く求めてきた。以上のことを知ったあと、母校出身者在日留学生 3 名が中心になって再建委員会を結成し、2005 年 9 月には子供達が学校に戻るために立ち上がった。「小学校再建活動」を通じて、素晴らしい出会いや発見、感動、そして喜びがあった。共に支え合い、学び合いながら、力を合わせて行動してきた。今は当地政府の支持も得て、学校再建が可能となった。村の人々の母語を再び学べる喜びの涙や感謝の言葉が心に深く刻まれ、遠くにある日本まで伝わり、響いている。

故郷への思い、日本への思い、それは小学校を通して永遠に繋がっている。留学なしには、または日本人や留学生の皆さんの支援なしには、故郷の小学校の再建は考えられなかった

故郷への思い、日本への思い。小学校を通して同じ地球に暮らす人々の心が繋がった。

夢へ踏み出す第一歩

韓（かん）　珺巧（ぐんこう）
出身国：中国
在籍大学：早稲田大学大学院理工学研究科・建築学
博士論文テーマ：都市機能高度化に伴う複合建築の省エネルギー手法に関する調査研究

私は中国の北部にある小さな村で生まれ育った。子供のころ、村の近くには、きれいな川が流れて、青い空、白い雲の影が映り、魚釣りのお年寄りや水遊びの子供たちの姿がよく見られ、自然に恵まれた田園風景だった。いつの間にか、川の水が黒くなって、魚類が跡を絶ち、橋を渡る時に息ができなくなるほど強い悪臭が漂うことになった。それだけではなく、工業化が進むに伴って大気汚染、水質汚染、環境破壊等様々な問題が発生し、人々の健康を奪い、青い空、豊かな緑も私たちの生活の中から消えてしまった。中国の経済成長・繁栄の裏側で環境が泣いている。

また、不法企業や個人は自らの利益のために有害廃棄物等を輸入し、中国の環境に深刻な被害をもたらした。私は「環境汚染」の言葉を耳にしながら、留学を決意した。

留学先に日本を選んだのは、従姉が見せてくれた写真だった。青い空の下に、うっそうと茂る樹木の間を流れる澄みきった渓流や魚釣りを楽しむ人達は、私の懐かしい記憶を思い出させてくれた。「工業化が進んでも、美しい環境を保つことができるのか」と私は日本の自然の美しさに驚きながら、日本に留学中だった従姉に日本についてたくさんのことを尋ねた。日本は数十年前に、環境問題があって、悲惨な経験もあった。歴史が二度と起こらないよう大勢の専門家が環境問題に取組んでいると聞いた。環境を犠牲にして経済発展に取組む考え方を変えるべきだと思うようになった。そして、日本で環境分野のことを勉強しようと決心した。

日本へ私費留学を申請したら、受け入れてくれた。中国での仕事を辞し、貯金した一年間の学費とわずかの生活費を持って、「これから勉強しながらアルバイトをすればなんとかなるでしょう」と思いながら、留学の旅を始めた。1ヶ月5000円の生活費で過したこともあった。困った時も、辛かった時もあったが、「環境問題を解決するノウハウを身に付け、1日も早く中国に帰り、青い空やきれいな川を人々に取り戻したい」という夢を一日も捨てたことがなかった。

日本に着てから、多くの日本人の方々や財団にお世話になり、困難な時期を乗り越え、学業を続けることができた。恩返しとして、私は世界中の人々に美しい環境を作ってあげたいと考えている。

見ぬ世の人を友とする

ハン　キョンジャ
韓　京子
出身国：韓国
在籍大学：東京大学大学院人文社会系研究科・日本文化研究専攻
博士論文テーマ：近松の時代浄瑠璃の研究

韓国外国語大学大学院の修士課程を修了後、現在、東京大学大学院に留学し、近世演劇、主に近松門左衛門を中心した浄瑠璃を研究しています。近松の浄瑠璃を専攻することになったのは、「日本の浄瑠璃・歌舞伎はすべて人の死を描いている」ということを知ったのがきっかけです。おかげでいろんな死に方（どう生きるか）を見ることができました。

韓国では日本の近世文学を専攻する研究者が少なく、資料も少ないため、修士論文を書くために日本の大学や図書館に資料を集めに来なければいけない状況でした。結局、自分の論についても疑問をもつようになり、研究を深めるために日本への留学を決意することになりました。

韓国に日本近世文学に関する資料・情報が少ないという理由だけでなく、専攻分野上、日本の風習や歴史、文化、日本人の死生観などを身近で感じる必要もあり、又、文楽や歌舞伎なども直接繰り返し鑑賞し、和本や浮世絵など資料に当たるべきことがたくさんあります。又、同じ専攻分野の研究者の意見を聞き指導を受けることができ、留学はとても有意義なものとなりました。

博士号を取得してからは、韓国の大学や研究所で今までの日本近世文学の研究を続けたいと思っています。自らの研究も続けながら、多くの人に日本近世文学について知ってもらい、この分野を研究しようとする学生を指導して行きたいと思っています。また、韓国のソウル大学や国立中央図書館には和本が多く所蔵されています。それらの整理、解題など、資料の価値を知らせることも、留学中に和本を扱い研究をした者がすべき仕事だと思います。

近松の浄瑠璃・歌舞伎作品には人の喜怒哀楽のあらゆる面を劇として見せています。文学や演劇はその国の人、文化を知るのに最適の材料だと思います。韓国の学生や一般の人も文学や演劇作品を通じて日本の文化への理解を深めることが出来ると思います。それを伝える役割を果たすために今の研究がためになると思っています。

題にかかげたのは、『徒然草』十三段、「ひとり、ともしびのもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」の一部です。夜、机上のスタンドのもと、一人古文を読みながら、江戸時代、またはそれ以前の人々と触れ合うことが一つの楽しみです。この上ないこの楽しみがずっと持続できればと思います。

第二の故郷で培った将来の夢

江（こう）　蘇蘇（そそ）
出身国：中国
在籍大学：横浜国立大学大学院工学研究院・物理情報工学専攻
博士論文テーマ：Ad-Hoc Network においての時空間符号の適用

私は中国から 10 年ほど前に日本に来ました。両親の学位取得留学のため一緒に日本に来ましたが当時はまだ高校生でした。日本留学を決めた理由と聞かれると正直答えに少々困ります。両親に連れられて日本の高校に入学したので、当時は理由も何もありませんでした。高校で必死に日本語を覚えながら暗号のような授業を一生懸命理解し大学受験に専念しました。高校三年になって文系・理系を決める時に初めて異国にいる外国人にとって最もよい人生の選択は何かと考えました。

世界中に貧しくご飯も食べられない子供がいっぱいいる一方、私は日本にまで留学に来ることができたこのよい機会を最大限に利用して、日本でしか勉強できないことを習得しようと思いました。国際競争の先頭に立ち将来性のある無線通信分野に興味を持ち、その分野で権威のある横浜国立大学を志望し入学しました。大学入学後学業に勤しんだ結果、留学生では稀な飛び級資格を獲得することができました。大学院試験に合格し、志望していた河野先生の研究室に所属することができ、現在無線通信の研究に励んでいます。

河野研究室は大規模でレベルが高く、ここに所属し、最先端の研究に励むことができた以外、とてもよい人生勉強にもなりました。例えば、グループ活動に必要な協調性、自立した人間・研究者になるための条件、異文化コミュニケーション力などを習得しました。最もためになったのが D1 の前期のカナダのトロント大学においての三ヶ月のインターンでした。トロントは様々な国より移民していく人が多いため多人種都市として有名です。そこでたくさんの文化に触れ合い、様々なバックグランドを持つ人のお話を聞き、世界の広さや、いままで国単位で考えていたことが実は個々人として考えなくてはいけないということに気づきました。違いは国籍ではなく、言葉のみであり、みんな同じ心を持ち、率直に接すれば国同士のつきあいに関係なくみな同胞になれるということを知りました。

この他、Belmont House という老人ホームで二ヶ月ボランティアもしました。それまでは一流の研究者になりたいという気持ちが強かったのですが、体の弱い人や障害者と接することで、一流の研究者ではなく社会に使えるような研究ができる研究者になりたいと思い直しました。体の不自由な子供や老人に例えば PC の楽しさと便利さを教えたり、彼らのために無線機器（義手義足、無線ペースメーカー）を開発したりするなど、彼らに生きる楽しみと希望を与えるような仕事がしたいと思いました。

従って、博士号取得後は純粋な無線通信分野の研究のみではなく人間にさらに密接に関わるような研究をしているところで経験を積んでいきたいと思います。例えば医療関係と通信関係の融合研究が盛んである会社や研究所などです。将来的には国連や ODA や NGO などの国際機関のような、世界中の人や場所に最も直に触れることのできる機関に所属し社会に役立つ仕事をしたいという夢があります。国連は高い専門知識のほか仕事能力をも求められるので会社などで研究をしつつ仕事経験を積みたいと思います。

日本の美しい日々

金（キン）　範洙（ボンス）
出身国：中国
在籍大学：東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・学校教育学社会教育系講座・歴史専攻
博士論文テーマ：近代朝鮮における日本留学を通じた新思想の受容と展開

私は二人兄弟の長男として、韓国の仁川で生まれました。母は、早い時期に父と別れ、女手一つで兄弟を育て、二人の息子を大学まで卒業させてくれました。それまでの母の苦労には、一筆に書けないものがあります。弟は、教育大学を卒業して小学校教師を約 10 年間勤めた後、今は教育事業に携わっています。その中には日韓の子供の交流も含まれており、将来的には、私が計画している国際交流事業のよきパートナーになってくれることを期待しています。

日本留学を決めた動機はいろいろありますが、高校時代に偶然耳にしたＮＨＫアナウンサーの日本語の美しい響きに心惹かれたのがその一因で、このとき既に、日本のことがもっと知りたいという漠然とした想いが自分の心の中に芽生えたようです。それまで高校の教師になることが夢だった私にとって、日本語との出会いは人生の進路を大きく変える転機となりました。

高校卒業後は韓国外国語大学日本語科に進学し、日本語教育や日本文化評論家を目指しました。日本社会をより深く理解するためには留学が不可欠だと考えましたが、当時の貧乏学生にとって日本留学は空の雲をつかもうとする夢物語のようなものでした。ただの一日であっても日本に行ってみたいというのが、大学時代の素朴な願いだったと今も覚えています。

諸事情もあって、大学を出てからは民間企業への就職という道を選びました。しかし、心の底には常に日本語や日本文化と関わる仕事をしたいという気持ちが消え去らず、決して満足することのない毎日が続きました。そんなある日、初等学校教員であった弟の助言が大きな励ましとなり、勤めていた会社を辞めて 1995 年 1 月に渡日しました。他の人より難しく手にした日本留学のチャンスだっただけに、一日一日の経験を大切にし、毎日の生活を楽しもうと心がけてきました。留学生活が 10 年にもなるとは思いもしませんでしたが、その間、世界中から集まった多くの人々と出会い、また、たくさんの方々に助けられて博士課程まで進学することができました。最近、「韓流」と称される日韓文化交流現象の中で、「美しい日々」という韓国ドラマが紹介されました。「愛」がそのテーマでしたが、留学生活の中で私が学んだ最も大切なことは、国籍や言語が違っても人を愛する心はみんな同じであることです。少なくとも、この日本には未来への明るいビジョンを持ってその実現のために尽力されている方が多くいることも知りました。

博士号取得後は、韓国の教壇に立って私が経験した日本社会のありのままの姿を伝えるとともに、草の根レベルの日韓交流を図っていきたいと思います。また朝鮮半島の統一を視野にいれ、東アジアの共生・共栄のために教育分野で寄与しうる事業を推進し、国家政策に関わる仕事にも就きたいと思っています。

異文化との出会いを通じて―「文化」を作り出す「人の心」―

キム　ヨンギョン
金　娟鏡

出身国：韓国
在籍大学：東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・教育構造論講座心理学専攻
博士論文テーマ：「育児ネットワーク」が母親役割に及ぼす影響に関する研究
－幼児を持つ母親を対象とした日韓比較－

韓国人である私が日本語を習い始めたのは高校時代です。第ニ外国語として日本語を学ぶ傍ら、課外活動の「日本文化研究会」を通じて日本文化に興味を抱きました。その後、国立釜山大学校に進学し、幼児教育学を専攻するようになりました。大学２年生の時、「比較幼児教育学研究」という授業で日本の幼児教育について発表することになり、資料を収集したところ、日本の幼児教育および育児に関する資料があまりにも不足しているのに驚きました。韓国の幼児教育は 1897 年に日本人によって設立された「私立釜山幼稚園」から始まっており、韓国の幼児教育制度は日本の影響を大いに受けています。にもかかわらず、日本に関する資料や、日韓の比較研究はわずかでした。そこで私は、大学卒業後は日本に留学し、日韓の相互理解に貢献することを志したのです。

来日して日本語学校に入学してからは、「育児不安」が日本の社会問題になっていることに関心をもちました。そして、幼児教育のあり方や育児問題は、育児に対する母親の考えのみならず、母親を取り巻く人々との関係のあり方の文化差に起因することを実感したのです。そこで、東京学芸大大学院の修士課程に進学し、博士課程に至る現在まで、日本と韓国を行き来しながら、博士論文の完成に向けて、比較研究を精力的に進めております。

他方、学会および学外研究会にも韓国人として積極的に参加し、日本、中国、台湾、ベトナムの研究者と異文化間比較研究に努めております。文化心理学研究会では、日本、韓国、中国、ベトナムの映画を、それぞれの国の研究者が一緒に観て、お互いの文化や感じ方をディスカッションした結果を『アジアシネマをアジアの人々と楽しむ』（仮題）として編集し、来年５月に出版の予定です。また、日本、韓国、中国、台湾の「現代アジアにおける子育て観」の国際共同研究に韓国での調査担当者として参加しており、本年９月に調査を実施しました。さらに 12 月にも調査を行う予定です。これらに加え、国際的な学術交流への直接貢献としては、2002 年に開かれた「日韓心理臨床学術交流会」において同時通訳を勤めました。韓国のインターネットにおける活動としては、2000 年から「21 世紀教育共同体」というサイトにて「日本の学校生活」のコラムを担当しております。

博士号取得後は韓国に戻り、大学や研究機関などにおいて、母親の育児サポートに関わる仕事に携わりたいと願っております。日本留学を通して築いた国際的ネットワークを生かし、日韓を中心としてアジアの相互理解を深める研究活動に引き続き取り組み、国際交流に貢献を続けたいと考えております。何卒、よろしくお願い申し上げます。

私と徳川思想史

藍（らん）　弘岳（こうがく）
出身国：台湾
在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科・地域文化専攻
博士論文テーマ：荻生徂徠の「文学」－東アジア思想史における徂徠学の構成－

私は大学の時、英語塾の講師と日本語関係の翻訳のアルバイトをしながら大学に通っていた。大学は日本語学科に所属していたが、語学のみならず日本文学と思想関係の分野にも関心を持っていた。その他、西洋思想と中国文学等の思想関係の分野にも興味を持ち、関連する授業に出ていた。このように様々な分野の授業に出て、多くの書籍を読んで思索を深めるうちに、私は徐々に、台湾と日本との間にある深い歴史関係にもかかわらず、そして台湾における日本の大衆文化の異常なまでの流行にもかかわらず、本格的な日本研究はきわめて少ないことに気づいた。それ故に、大学四年の末頃に、自分がずっと関心を持っている日本思想史、特に近世思想史の研究を志したのである。

来日後、まず研究生として 1999 年 4 月東京大学大学院総合文化研究科に所属、黒住真氏他の諸教授による日本思想史・日本近代思想史のゼミに積極的に参加、同年末、同研究科の入学論文として「徂徠学における老荘思想」を提出して、2000 年 4 月、同研究科修士課程に正式入学した。その後は、中国思想史・日本思想史 (国学・近世儒学・近代宗教・丸山真男思想史研究等) に関する多くのゼミに積極的に参加して知見を広げ、かつ専門研究者による朱子学派・伊藤仁斎・荻生徂徠の註釈研究に加わった。このように、黒住先生をはじめとした諸先生の指導の下に、私は日本近世思想史、特に荻生徂徠に関する理解を深めていく。その内に、荻生徂徠が日本思想史のみならず、東アジア全体の思想史叙述において重要な位置を占めた存在だと分かるようになり、博士論文は「荻生徂徠の「文学」――東アジア思想史における徂徠学の構成――」というテーマを択んで取り組んでいるのである。

博士号取得後の進路については、まず台湾に帰って大学に就職して日本思想史に関する研究をさらに深めながら、日本文化と思想に関する教育に携わりたいと考える。一方、現在、私は公共哲学関係の仕事にも携わっている。それに関係する論文を中国語に翻訳する外に、2004 年 12 月台湾で台湾大学と日本の将来世代研究所が共催するシンポジウムにも参加して論文を発表した。博士号取得後も、自分の専門知識を活かしながら、こうした現代東アジアないし世界全体が抱えた様々な問題に対して思想の面から解決策を探す公共哲学関係の仕事に携わり続けたいと思う。そして、台湾と日本、さらに現代世界と過去の歴史との境界に渡る架橋に成れればと思う。

日本留学を決めた理由

テネグラ　ブレンダ　レスレション　ティウ
TENEGRA BRENDA RESURECION TIU
出身国：フィリピン
在学大学：お茶の水女子大学大学院人間文化研究科・人間発達科学
博士論文テーマ：送金とコミュニティ活動に関する社会学的研究

私が日本留学を決めた理由は、国際交流基金アジアセンターが実施する高等教育招聘奨学金、アジア・ユース・フェローシップ（ＡＹＦ）プログラムの参加がきっかけでした。それは、日本政府の平和友好交流計画の一環としてＡＳＥＡＮ諸国とバングラデシュからの奨学生が、マレーシアで１３ヶ月間共同生活をしながら日本語を学ぶプログラムでした。ＡＹＦプログラム修了後、日本語を習得した私の日本に対する興味はさらに高まり、日本の大学院への進学を決意しました。また、マレーシアで味わった国際交流活動の醍醐味は現在の私にも多大な影響を与えており、日本留学後も国際学生寮での行事や留学生同士の交流など様々な活動に積極的に参加しています。私にとって、「国際交流」とは、人生において不可欠なものとなっています。

研究の場として日本を選んだ理由は以下のようなものです。日本からの送金は、フィリピン政府にとって重要な外貨獲得源となり、フィリピンへの送金全体において上位第３位を占めています。特に日本のフィリピン人労働者に特徴的なのは、中東などでと違って、女性が男性の数を大きく上回っている点です。この「移住労働の女性化」のパターンを背景に、女性移住労働者の果たす役割や研究対象者の側の視点を調べることに関心を持って研究を進めています。

博士号取得後の進路希望については、今まで学んだ移住労働に関する知識を国際移住機関（ＩＯＭ）や国連というような国際機関で生かしたいと考えています。国際機関で活躍する人材となるために、学問的研鑽を積む一方、国際交流の機会を多く持つことも重要だと考えています。そのため、課外活動（例えば、スポーツ）の国際的な大会に参加することもあります。そのような場で、世界の様々な国々からの、幅広い学問的バックグラウンドを持つ人々と交流をし、各国の文化や慣習などをお互いに教え合い、尊重しあうということを重要な経験として実践しています。

現在、世界は不安定な局面を迎えています。この局面を乗り越えるためには、上述した国際理解や親善ネットワークを樹立し、それを通して平和のための妥協点を見出すことが最初の第一歩とも言えるだろうと思っています。母国へ帰国後も、日本で培った学問的知見と国際交流体験を生かしていくつもりです。

知・富を追う

ヴォー　チー　コ　ン
VO CHI CONG
出身国：ヴィエトナム
在籍大学：東京工業大学大学院情報理工学研究科　数理・計算科学専攻
博士論文テーマ：多項式最適化問題の緩和手法とその並列実装

私は小さいときから数学が得意でした。好きな数学を楽しく使ってお金を作り、両親を楽にさせ、ゆくゆくは故郷そして国の経済発展に貢献したいと思ってきました。高校卒業後 Qui Nhon 市にある実家を離れて、ヴィエトナム経済の中心であるホーチミン市へと向かいました。1992 年 7 月、名門ホーチミン工科大学の入試を受けて、幸運にも最上位 2 番目の成績を修めました。実はこの時、「数学では金が作れない」と、数学を Qui Nhon 師範大学で教える父親につくづく言われていたので、電子情報工学科を選びました。触ったこともなかったコンピュータに大変な好奇心を抱いていたし、コンピュータを使えば何でもでき、金持ちになれると思っていたので、合格通知を受けて跳ね上がり喜んだ記憶が鮮明に残っています。

しかし、当時、大学の設備は十分に整っていなくて、プログラミングも本物のコンピュータでやるのではなく、紙でコードを書くことがしばしばでした。これではコンピュータ技能が身につくわけがありません。そこで、外国留学を考え始めたわけです。私を日本留学に導いてくれたのは、在ホーチミン市東遊日本語学校でした。近い国で奇跡的な経済発展を遂げた日本へ留学した後、母国に奉仕することを理想とする人材を送り出すために、元日本留学生 Nguyen Duc Hoe 先生によって設立された学校です。Hoe 先生の理念に自分の思いを重ね、日本留学を強く希望しました。私はホーチミン工科大学を二年で中退し、東遊日本語学校に入学しました。卒業試験で最優秀の成績を治め、Hoe 先生に留学を承諾していただき、日本人保証人や日本語学校を見つけていただきました。1995 年 8 月 13 日にヴィエトナムから日本にやって来ました 。当時日本についてはテレビで映っていた、苦難に遭いつつも決してあきらめないおしんの姿と、阪神大震災の凄まじい光景の中で落ち着いて救助物品を受け取る人々の静かな行列が印象的でした。

東京工業大学情報化学科の入試に合格したときは大喜びし、思わず一緒に結果の掲示を見に行ってくれた友達と抱き合いました。この学科で私は始めて Optimization Research －数理計画法というものに触れて、魅了されました。物事に正しい目標を設定し、その環境において満たさなければならない制約を認識し、数理モデルを立てて、アルゴリズム・解き方を発見してからコンピュータのプログラムを作成し、設定した目標を出来る限り理想とした状態に近づける、そういう学問です。人生の設計、企業経営、国の運営などに応用できます。

博士号取得後の職を探し始めています。私は研究をし続け、研究者の道を歩みたいです。現段階のヴィエトナムにとって必要なのは基礎研究よりもモノと利益を生み出す実践的な研究だという認識で、そのような研究が出来る就職先を希望しています。具体的には経営の統括的なプランニング、スケジューリングなどを支援するシステムの構築の研究などが考えられます。将来は、優れた最適化手法を、開発のコストが安く、数学者とプログラマーが十分にいるヴィエトナムで、ソフトウェアとして実現したりメンテナンスしたりする会社を作りたいです。

世界の発展のためには不健全な競争や戦争ではなく 、各国間の協調や自然との調和が非常に重要だと考えさせられるような事件が多々あります。世界調和のカギとなるのは人々の積極的な交流を通した国際理解と親善だと思いますが、こういう点について渥美国際交流奨学財団の設立の趣旨に全面的に共感しました。

日本大好きな父親に影響された日本留学

王（おう）　雪萍（せつへい）
出身国：中国
在籍大学：慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科・政策・メディア専攻
博士論文テーマ：改革・開放期の中国政府派遣留学生
－ 1980 年～ 1984 年の日本への学部留学生派遣を中心に

私は日中関係を中心にアジア研究をしてきました。博士論文は「改革・開放期の中国政府派遣留学生―日本への学部派遣留学生を中心に」をテーマに進めています。

日中関係を中心とするアジア研究に興味を持ったのは、家庭の影響があったからです。私の父親は 1980 年代に中国の国費留学生として信州大学工学部へ留学したことがあり、日本のことが大好きな中国人です。父から日本のことをたびたび聞かされて、自然に日本について興味を持つようになり、大学では日本語・日本文学を専攻しました。大学四年生の時、学部時代の成績が評価され、所属していた河北大学外国語学院の推薦を得て、交換留学生として来日しました。その後一年間の勉強を通して、日中両国の歴史問題や領土問題より、国民レベルの相互理解こそがこれからの日中関係に大きく影響すると感じました。そのため、交換留学の経験を生かし、大学の卒業論文では日中両国の大学生活の違いについて分析しました。

大学卒業後、日中関係をさらに深く研究するため、慶應義塾大学の大学院政策・メディア研究科の小島朋之研究室に進学しました。修士課程では日中関係における相互理解の基礎である中国と台湾の小学校から高校までの教科書を手がかりに、中国大陸と台湾政府の文教政策に反映される日本認識を検討しました。1949 年から 2001 年までの間に、中国大陸と台湾の教科書はともに十数回改定されましたが、それぞれの日本についての記述の変化を数量的に分析しました。本修士論文は 2001 年度慶應義塾大学の優秀修士論文に選ばれました。

博士課程に進学してからは、さらに日中両国の相互理解の糸口を探るために、博士論文として「改革・開放期の中国政府派遣留学生―日本への学部派遣留学生を中心に」をテーマに、1980 年代初期に来日して日本への長期留学を経験した 379 人の中国政府国費派遣留学生を事例に、長期留学による対日認識への影響を調査しています。

この 379 名の学部留学生は来日して既に二十年間以上経ち、中国に帰ったり、日本に残ったり、或いは他国へ移住したりして世界中で活躍しています。私は中国、日本、アメリカ三カ国に滞在している 100 人の元留学生に直接面接し、インタビューを行い、その量的調査と質的調査を通じて中国政府の学部留学生派遣政策を評価するとともに、留学生の対日認識の変化を分析することによって、日中両国の国民レベルの相互認識を改善する糸口が見つかることを信じています。論文の政策調査の部分は既に大半書き終わり、事例調査の部分も完成したので、今年 2 月 9 日に実施された大学院セミナーで博士論文公聴会発表をし、博士論文の最終試験に合格しました。今調査した結果を整理し、論文作成に没頭しています。今年 7 月に初稿を完成し、9 月までに修正原稿を完成し、大学院に提出する予定です。大学院の規定により、提出してからの評価と修正を半年ほどかかりますので、2006 年 3 月に博士学位を取得するよう努力しています。

将来日中両国の理解を深めるために役に立つ仕事に就きたいと考えています。

日本留学への道

王（おう）　健歡（けんかん）
出身国：香港
在籍大学：文部科学省統計数理研究所総合研究大学院大学複合科学研究科・統計科学専攻
博士論文テーマ：多変量時系列統計と脳科学の数量化分析の研究

日本に留学する背景には、幼少時期にもつ日本への印象までさかのぼることができるでしょう。ただし、日本への留学を決意したのは、香港の大学在学中の日本語の授業、そして諸先生のアドバイスによるところが大きいと思います。

日本という国に対する認識の始まりは、小さい頃から、「日本風情画」という日本の風土を紹介する五分間のテレビ長寿番組を見ていたことでしょう。また、日本の紅白歌合戦が香港のテレビでも普通のチャンネルで毎年放送されていました。歌詞は分からなかったが、ときどき香港の歌手がカバーした曲もあり、親しいメロディを聞きながら、不思議な感じがしました。もちろん、先端的科学技術の大国として、またアジア・太平洋戦争との関係においては、「日本」がよく出てきました。

香港大学に入学してから、世界各国からの留学生の友達ができ、またこれをきっかけに外国語に興味を持つようになりました。在学中、北京語のほかに、タイ語、ポルトガル語、フランス語、スウェーデン語、そして日本語を勉強する機会がありました。また長年参加していたＹＭＣＡ・ボーイスカウト活動の海外交流や夏休みを利用して、タイ、ベトナム、シンガポール、オーストラリア、アメリカ、そしてヨーロッパ諸国へ旅行しました。世界が本当に広いと実感しました。ちなみに、共に移民の経験をもつ中国潮州生まれの父とタイ・バンコク生まれの母の香港での出会いの不思議さは、私の成長にも影響を与えた。そして、いつか外国で生活する経験も持ちたいと考えました。

学部の最後の学期に日本語の授業を受ける機会を得たことが、日本留学のきっかけとなりました。特に当時日本語を教えてくださった東京大学卒の先生から、日本留学の事情をいろいろと聞きました。日本への留学は非現実ではないことが少しつつ理解できるようになりました。すでに決まった進学先の香港科学技術大学の修士課程を履修しながら、さらに日本の博士課程への進学も準備し始めました。多くの教授からのアドバイスを受け、統計学では国際的に高い評価を受けている日本文部省の統計数理研究所を目指しました。そして琉球大学で半年の日本語コースを経て、終に、統計数理研究所の博士課程に入学する夢を実現しました。

現在、私は統計数理研究所で研究を順調に進めています。博士号を取得した後は、母国の香港に帰国し研究生活を続けたいと考えています。私の研究課題である脳科学の統計解析に関する研究は、幅広い分野で応用できると確信しています。したがって、私は博士課程修了後も、脳科学についての研究を続けていきたいと考えています。

また、日本の留学経験を通して、微力ではありますが、日本と香港、そしてアジアとの学術交流、文化交流にも尽力していきたいと考えています。

異国の景色、故郷の風景

ちょう　ちょうしょう
趙　長祥
出身国：中国
在籍大学：一橋大学大学院商学研究科・市場･金融専攻
博士論文テーマ：中国山東半島にある家電企業の集積と急成長要因・プロセス分析

日本で春を迎えるのは、5年目となっている。

研究室の窓越しに眺めると、桜の綺麗な花びらが雪のように悠々と樹木から離れ、自分の命を生んだ大地に落ちって行く景色が目の前に現れる。それを見ると、少し悲しい気分となるが、大地の中で一年間の力を蓄え、来年また桜が満開してくれると思うと、心を打たれるほどの感激。ふとこの異国の景色を私は故郷の風景に見えた。

5年前、桜満開の季節に故郷を後にし、日本へきた。振り返ってみると、この5年間にいいこともあったし、辛いこともあり、手答えのあった留学生活だった。来年の桜の咲き乱れる季節に博士号を取得するため、現在精一杯論文を執筆中である。

私は中国の東沿岸部にある山東省からきた留学生で、中国の北方で生まれ育ったため、あまり人に左右されず、自分の決めたことはとことんまでやるタイプである。新しいことにすぐチャレンジしてみたいタイプでもある。

大学時代に日本言語と日本文化が好きになり、日本の文化、風俗習慣なども勉強していた。当時の授業で先生から日本についていろいろ学んだ。例えば、当時の先生の話によると、「日本の電車はいつも時間通りに運営され、しかも皆自動的に列を作り、電車にのるんですよ。また、赤信号のときに、皆が止まり、青信号になるのを待ちます・・・」。このようなことは当時の中国で非常に不思議なことで、小さい時からずっといつか欧米へ行って色々体験したいという考えが、いつか是非日本へ行ってみたいと変わっていた。

そして、大学卒業後、日系の合弁企業に就職した。その企業の経営方法や管理方式などは全く日本の親会社と同様の企業運営をしていた。当時の私は品質管理の仕事を担当し、ISO9002認証の事務局のメンバーの一人であった。仕事を推進する上で会社のすべての部署との接触が不可欠であった。そこで日本企業の経営システムに関して興味を持ち始めた。例えば、日本人（当時派遣された日本人が15人ぐらい）のチームワーク性、一人一人の自分の仕事に対する熱情、責任感など、中国人の私にとってよい衝撃であり、色々な面で勉強になった。これをまた是非日本へ行って、自分の身を以って体験したく、日本留学のきっかけとなったのである。

そこで、2000年に仕事をやめ、私費で日本へきた。最初に別府大学の日本語課程で一年間の勉強をしていた。別府市は小さな町だが､山がり､海があり､温泉もあって、自然に恵まれた住みやすい場所である。そんな素晴しい環境で生まれ育った人々もやさしくて、思いやりのある人ばかりである。別府での勉強、バイト、大分県留学生日本語弁論大会での優秀賞の獲得、大分県知事との新春番組対談、県内の留学生交流活動を通して様々な人と友達となり、楽しみながらいい勉強になった。そして、何より、たくさんの良い思い出ができた。その良い思い出とチャレンジ精神を持って一年後に同志社大学大学院の商学研究科の修士課程に入ることができた。日本の古くからの古都―京都で2年間の充実な留学生活を送った。そこでも多くの記憶に残る思い出を作り、2003年に無事卒業し、一橋大学大学院商学研究科の博士後期課程に入ったわけである。

現在の自分の研究は、中国の青島地域にある大手家電企業（ハイアール、ハイセンス、オクマ）はなぜほぼ同じ時期に青島に集まり、成長のパターンが異なっていたが同質の急成長を遂げてきたのか、また、青島市政府・地域団体・企業間にどのようなネットワークで企業の発展を促進したのか、産業集積またはネットワーク組織の視角から家電企業の急発展のプロセス・要因を分析し、日本の代表的な家電企業の発展プロセスを比較し、その成長パターン（構造）の相違を明確し、両国の家電業界に有益なインプリケーションを提言することである。

日本で博士学位を取得し、母国へ戻り、日本で身に付けた知識を生かして、中国の大学或は研究院で研究を続け、日中両国の学術交流を促進できるように頑張っていくつもりである。そのため、もうしばらく日本での生活が続く。これからたくさんの異国の情緒の溢れる風景と出会うと考えられるが、いずれこれらの風景が故郷の風景にみえるように頑張っていきたい。

２００４年度
海外学会派遣プログラム参加報告

于　暁飛　「縄で結ばれた人々―国際シャーマン文化研究会（カナダ）―」----- 59

李　炫瑛　「第５６回俳文学会全国大会への参加記」----- 61

張　紹敏　「あっという間の１０年」----- 62

縄で結ばれた人々
――国際シャーマン文化研究会（カナダ）―

于（う）　暁飛（ぎょうひ）
博士（社会文化科学）千葉大学
日本大学専任講師
２００２年度奨学生

２００４年５月２１日夜７時、エアカナダ２便の飛行機はアジアの東岸の扶桑国（日本）から離れ、アメリカ大陸の西岸を越えてカナダへの空に飛んだ。機内では、私の側に座った西洋人の男性が、離陸間もなく、腕時計の指針を１時間早く調整して、旅行用の枕に空気を吹き込んで、首の周りに置いて、寝た。“さすが！”場所が変わると眠れない私にとっては、座ったまま寝るなんて、とんでもない事だ！

窓から見る空はとてもきれいで、飛行機の前方に三日月と星がきらきら不思議な光を出している。考えると、飛行機で何時間もかからず、ベイリング海峡の上を通り、僅か一日で太平洋を渡れる。太陽を追いかけた夸父は、中国の神話「夸父逐日」で、暗さに耐えられなく、太陽を追いかける。結局、夸父は喉が渇いて死んでしまう。人類の祖先達は、生存するため、新しい居住地を探すため、この地球を回り、何万年かかっただろう！今も世界の文化人類学者を困らせる人類の起源や、人類の移動の様々な未解明の疑問は、星たちが良く知っているようだ。と、考えている内に、知らぬまに月は後に逃げて、見えなくなった。前方は赤くなり、飛行機は太陽を出迎えた。時計を見ると：夜の一時！日本の人々は今熟睡中だ。

飛行機は時間通り現地時間夜８時にトロント空港に着陸した。しかし、太陽はまた懐かしく去りたくないようで、西の方にかかり、大地はまだ明るい。

今回私はオタワで開催する「国際シャーマン文化研究会」で論文を発表するために、太平洋を渡った。トロントからオタワまで、一時間かからず、夜の 10 時頃、13 時間の空旅を終え、目的地オタワ大学内のホテルに着いた。

会場で発表している筆者

研究会はオタワ大学の会議場で行われ、中国上海社会科学院宗教研究所教授王宏剛、北京芸術学校長、シャーマン踊研究者于国華、蘭州大学、吉林省社会科学研究所所長郭淑雲、カナダ各地の大学や研究機関の研究者が参加した。22 日の午後、私は「ホジェン族イマカンのシャーマン」というテーマで発表をした。中国の領域黒龍江省に住むホジェン族はシャーマンを信じている。30 年代には、文化人類学者凌純声は、フィールド・ワークで、直接シャーマンに会って、ホジェン族のシャーマン信仰を「松花江下流のホジェン族」本に記録している。同時に、シャーマンはホジェン族の社会に，大きな役割を果たしていた。50 年代から、漢族文化の影響でシャーマンはいなくなり、最後の一人のシャーマン呉進才氏は 1977 年の秋 59 才で亡くなった。しかしこの民族の口承文学イマカンには、主な面でシャーマン信仰が謳歌され、イマカンはホジェン族シャーマンの唯一の参考資料である。私はそれを分析し、「１、イマカンの主なモチーフはシャーマンである。２、モルゲンの遠征はシャーマ

ンの修行である。３婿選びはシャーマンになる試験」と三つの新説を提案した。それに対して、カナダの研究者の興味を喚起し、その民族の現状、生活習慣、口承文芸の分野で、質問された。そのほか、中国からの研究者とカナダの研究者がシャーマン信仰に関するさまざまな分野について発表した。

三日間の会議中で、東西両方の研究者は、カナダの原住民と大陸各民族間のシャーマン信仰の相違点について議論し、四日目に、オタワに最大な文化博物館（原住民の文化を中心とし）を見学した。

筆者とカナダ原住民のシャーマン

最後の夜、カナダの西部に住む現シャーマンが、我々アジアの研究者のために、シャーマンの儀礼を行った。その手順は、シャーマンが、線香を点け、悪霊を払うため､その煙で我々の身を清める。次に､皆が円周形に座り、シャーマンは円の中心に座り、後では助手三人が太鼓を敲き、儀礼が始まる。初め、シャーマンは水を持って一人一人の前に来て、私達の手を洗わせ、１本の縄を皆で握り、各自がシャーマンから貰った糸を縄に結びつけ、自分の両手で縄を握る。シャーマンは神と私達の使者として彼の民族の言葉で神に語りかけ始める。約 30 分後、シャーマンは私達の前に来て、私達の手から縄を外すと、容易で外れる人もいるが、なかなか縄から外すこと出来ない人もいた。それは、悪霊や病気や神に簡単に連れ去られないということだ。シャーマンが、皆の手から縄を外すと同時に、私達の身に着いていた悪を縄と一緒に取りさる。最後にその縄を燃やし、悪を追い払う。私達はもう一回手を洗い、果物を頂いて、儀式は終る。カナダの原住民はこの儀礼が終わると、供物を皆で食べ、歌い，踊り、神様に感謝して、楽しくお祭りする。

私達は神様に捧げた果物を貰って、食べながら、感想を言う。オタワ大学教授ガドン先生は、今まで何度もシャーマンの助手として太鼓を叩いたが、今回その太鼓の音は心臓の鼓動のように感じていたといっていた。西洋東洋両方の研究者たちは自分の感想をいい終わり、カナダの研究者李先生はこう述べた：東西方研究者の考え方の違いは、西方では「神」に感謝し、東方では「シャーマン」に感謝する。西方の研究者は、シャーマンは人間と神様を結ぶ者だと考えている。

カナダ大学カドン教授と（左Ｉ）と筆者（中）

この研究会に参加することでき、北米の原住民研究者と意見を交換することでき、アジアとアラスカとカナダの繋がりの共同研究がスタートしたことは、一番の収穫でした。

第５６回俳文学会全国大会への参加記

李（イ）　炫瑛（ヒョンヨン）
博士（比較文化学）お茶の水女子大学
建国大学校師範大学日本語教育学科助教授（在ソウル）
２００１年度奨学生

私は平成 16 年 9 月 27 日から 10 月 5 日まで、渥美国際交流奨学財団の研究支援を頂いて古典文学の中でも連歌と俳諧を研究する俳文学会へ参加する貴重な機会を得た。

私は 1994 年から 2001 年まで日本で留学しながら、近世俳諧について勉強してきたが、帰国してからは仕事に追われて日本で開催される学会に参加する事もできず、今回は 3 年ぶりの参加であった。

さて、私にとって今回の学会が特に意味を持つのは、他ならぬ俳諧文学を大成したとも言われる松尾芭蕉の誕生地である三重県上野市で行なわれるからである。芭蕉誕生 360 年を記念して行なわれる行事としては、俳文学会の他にも「世界俳諧フュ - ジョン 2004」と言った各国俳句研究者の講演、芭蕉翁記念館での新出作品の展示会、町総出の芭蕉祭などがある。

一週間余りの私の旅程は、まず東京に着いて大学図書館や書店などを回り、新しい論文や資料、そして新刊書籍を集めた。それから 10 月 1 日から 4 日までは、俳文学会に参加した。最初の 2 日と 3 日には学会発表を参観し、4 日目は文学散歩にも参加した。

学会では、大学院時代に指導を受けた雲英先生をはじめ、著名な研究者、そして一緒に勉強した先輩と後輩にも会うことができた。3 日には司会として学会に参加したが、すでに定年なさって 70 才を越えた大先生を始め、指導してくださった雲英先生も発表なさった。学問に対する情熱に圧倒された私は、来年こそと心を決めた。学問することは私にとっては一生の課業であると、一生続けなければならないと思ってはいたものの、大先生方の活躍を目の前にして頭が上がらなかった。

4 日、文学散歩のコースには、芭蕉翁生家をはじめ、芭蕉翁記念館、蕉門伊賀連衆である服部土芳の蓑虫庵、芭蕉翁が青年期に仕えた藤堂潘の藤堂新七郎家の墓所、他にも横光利一資料展示室、だんじり会館等が含まれていた。朝早くから芭蕉翁生家、芭蕉記念館、寺町、下屋敷、そして伊賀上野城などへ移動しながら、芭蕉の息吹を感じることができた。いまだ町には商店街が残っていて、鰻の寝床みたいな狭い間口の細長い店が軒を並んでいた。芭蕉もこの通りを歩いたろうと想像しながら上野通りを歩き廻った。行く所々に芭蕉翁の句碑が立てられていて、そのなかでも次の句が目に入った。

さまざまの事おもひ出す桜かな　　芭蕉

1688 年春の作で、季語は桜。旧主藤堂良忠（蝉吟）の遺子良長の招きにより、八景亭の花見に出かけた芭蕉は、若いころ仕えていた蝉吟との交情の数々を心に秘め、この句を挨拶の句としたのである。

秋が深まるなか、私の旅程も終わりつつあった。短い日程であったが、新しい資料を集め、学会に参加し、恩師と先輩に会い、その上、専門である松尾芭蕉の誕生地を踏むことができた収穫多い旅行だった。

こうした貴重な機会を与えてくださった渥美国際交流奨学財団の皆様に改めてお礼を申し上げる。

あっという間の１０年

張　紹敏（ちゃんしょうみん）
博士（医学）東京大学
エール大学医学部助教授（在米ニューヘブン）
１９９７年度奨学生

本来の訪日予定を調整して、２月１６日から２３日まで東京に行きました。成田から直行して、渥美国際交流奨学財団の設立１０周年を祝うイベント、東京赤坂の鹿島ＫＩビルで開催された１０周年記念式典に参加させて頂きました。雨の中に僅か５分前会場に着きましたが、満席になった会場には会ったことのない渥美奨学生達がたくさん居て、渥美財団の益々の発展を感じました。今西常務理事から渥美財団１０年の歩みのご紹介を聞いた時、１９９６年の秋、渥美財団奨学生募集締め切り直前に関口の財団事務所に申請書を提出した事を、まるで昨日の事の様に思い出しました。一年間の奨学期間だけでなく、ほぼ１０年間ずっと渥美財団と関係のある私にとっては、渥美財団の奨学生の一人として以上の喜びがありました。そして、今回の来日に際して、渥美財団から助成していただいたことを心から感謝しております。

本来の訪日予定は東大大学院時代の恩師である石川先生と、私の博士論文を発表するための打ち合わせにありました。学部長になった忙しい先生、卒業後すぐにアメリカに渡った私、その後先生は東大を退官されたが、私の卒業論文の発表については話をする機会もなく、すでに１０年たったのに、まだ発表していません。何回かその論文を発表することを先生とメールで話しましたが、やはり座って検討した方が良い、“Ishikawa　Hotel は何時でも open しているよ ” とお誘いくださり、つい先生の東京のお宅に四日間も泊めて頂きました。定年退官した先生は相変わらず大変ご活躍されていらっしゃいます。先生は DNA 損傷と修復の研究に関する大変な専門家ですが、病理医としてはすでに退官していらっしゃり、現在は内科医にもチャレンジしていらっしゃいます。科学と研究の話が始まるとなかなか止まりません。日本を発つ日になってしまい、先生はドライブで、奥様も同行して、成田国際空港まで私を見送ってくださいました。

私の博士論文の研究では、遺伝子操作したアニマルモデルを用いて、DNA 損傷の修復を脳腫瘍の発生との関係を調べました。その結果によると、成年時期の脳腫瘍は、胎児発生時の脳の干細胞が DNA 損傷による修復が出来ないことと関係することが分かりました。最近、神経干細胞の研究は大変進んでおり、神経細胞の再生や神経細胞の保護とアルツハイマー病（老人性痴呆症の一種）やパーキンソン病などの治療法の開発に利用されていますが、神経干細胞の DNA 損傷の修復に対して、同様な研究内容はまだ発表されていないため、近いうちに私の博士論文は専門誌に出すことが決まりました。

実は東大にいった１９９７年から１９９８年卒業の間に、先生との関係で一つ不愉快な事がありました。私の卒業論文の一部である内容について、ある方を昇進させるため、先生とだけの話で仕事と合わない作者順で発表したことがあったのです。私にとっては、博士号取得後に日本に残らずアメリカに留学することを決めた決定的な理由でした。先生はまだ半年も経っていない私をアメリカに訪ね、論文のことはその時は止むを得なかったと説明しました。その後先生の退官記念式のため、私はアメリカから東京の式典に参加しました。先生と奥様も二回程ニューヘブンを訪ね、エール大学の博物館も見学しました。

早いもので、アメリカの生活は８年目になりました。エール大学病理学の Chairman は私のことを “ アメリカ的 ” と “ 評価 ” しましたが､日本にいた８年間に “ 日本的 ” な “ 評価 ” も沢山ありました。自分は１６年以上の海外生活を送っていますが、“ 中国的 ” な実在感をまだ保っていると信じています。様々な１０年でありましたが、友情を築き保っていくには、１０年は短いです。２０年、それ以上も続けていきたいと思っています。渥美国際交流奨学財団の設立１０周年に記念講演をされた緒方貞子ＪＩＣＡ理事長さんのお話の中の、人間の安全保障が実現するためには多様性を尊重すべきという点に同感しました。その第一歩は人間として、お互いに尊敬又は理解することだと思います。

AISF ネットワーク

■ラクーン会

■第４回日韓アジア未来フォーラム・第１８回ＳＧＲＡフォーラム
「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」

■関口グローバル研究会（ＳＧＲＡ）

ラクーン会レポート

常務理事　今西淳子

■　ラクーン会 in バンコク

４月８日（木）　プラチヤーさん、ビラバットさん

私の宿泊しているホテルで朝食会になりました。バンコクの朝のラッシュにもかかわらずお集まりくださって、ありがとう！

■　ラクーン飲茶 in 広州

６月２０日（日）奇錦峰さん

日曜日の朝、私の宿泊していたホテルの中の地元の人でごったがえす有名な飲茶のレストランで、奇さんとブランチをしました。

■　七夕ラクーン会 in 関口

７月７日（水）

【ラクーン会ニュース】

元気な３人娘―２００３年ラクーン：マリア・エレナ・ティシさん（イタリア）、張桂娥さん（台湾）、アナ・エリザ・ヤマグチさん（ブラジル）―が幹事となって、渥美財団ホールで初めてのラクーン会が、７月７日の七夕に開催された。幹事の皆さんが朝から用意した料理に加え、韓国、ドイツ、中国からの奨学生のご馳走も並べられた。

今西さんの提案により、七夕の雰囲気を一段と演出するために、財団のスタッフが渥美家の庭から切ってきた竹が飾られ、参加者は皆、願いごとを書いた短冊を結びつけた。日本滞在１６年目の私も初めて七夕という祭りに関心をもった。私の質問に、嶋津さんがつぎつぎと答えてくれた。（なんてよくご存知なんだろうと感心していたら、事前に調べておられたとのこと）

お天気も協力的で、関東地域の空は天気予報通り快晴だった。渥美理事長の指示により噴水の庭の明かりを消して、最も好奇心お旺盛な連中と一緒に東京の空を見上げた。いくつかの星が見えたが、年一回許される織姫と彦星の再会は肉眼では確認できなかった。それにしても、なんてロマンチックな物語でしょう。多少悲劇を含むラブ・ストリーだが、織姫の両親が二人の愛情を認めたのだから、ロミオとジュリエットほど悲しくはない。二人がお互いにあまりにも夢中になりすぎ仕事をしなくなってしまったので、織姫のお父さんは年一回しか会わせないという厳しい対策を採らざるをえなかった。私のラテン系の血は、お父さんの厳しい対策に反発するものの、ちゃんと仕事をしなければならないという教えは印象的である。

私は、現在と過去の奨学生に、渥美財団ホールには特別な魔法がかかっていると話した。せっかくだから、この魔法を逃さないように、参加者は願いごとを書き忘れないように呼びかけた。ここにいる参加者は、以前、このホールで願いごとをして、みごとに叶えられたからこそ、この集まりに来ることができたのである。

当初のメニューにあったサンバの踊りまで、３人の幹事のエネルギーが及ばなかったが、子供から大人まで昔習った踊りや歌を披露して楽しい七夕だった。（文責：Ｆ．マキト）

■　ラクーン会 in 名古屋

７月１０日（土）胡潔さん、ランジャナさん

公募の名古屋大学と名古屋市立大学のポジションを

ゲットしたお二人の女性と、渥美理事長と４名で、名古屋駅前の料亭「千代田」で櫃まぶしのランチをしました。ランジャナさんからインドの話をたくさんうかがった後、思わず胡さんに「インドに比べると中国は問題がないように感じてしまうよね」と言ってしまったくらいインドは奥が深そう！

■　ラクーン・ランチ in 奈良
８月１５日（日）ブラホさん

日曜日だったので京阪奈の松下の研究所を見学できなかったのは残念でしたが、ブラホさんご一家と一緒に奈良でランチをしました。このあたりでは「ガイジン」が珍しく、青い目に金髪の２歳のクリストファー君は人気者。英語と日本語とイタリア語とマケドニア語で育っているというからすごい！

■　ラクーン会 in 内モンゴル
８月１６日（月）～１９日（木）フスレさん、ブレンサインさん

【内モンゴル訪問記】
内蒙古大学で開催された「第四回蒙古学国際学術討論会」に参加した。半年前から、ＳＧＲＡ会員のフスレさんに誘われて準備をしていたが、実際に主催者から届いたのは英文の手紙が１通だけで、会議の詳細は行ってみなければ何もわからない状況だったので、フスレさんのフォローがなければ、実現できなかったかもしれない。空港には、ＳＧＲＡ会員のブレンサインさんも迎えにきてくれ、ミニ同窓会が実現した。

内モンゴルは、中国の少数民族自治区のひとつで、モンゴル国とは別である。実際、漢民族の移住が進み、現在内モンゴル自治区内に居住するモンゴル人は４０％以下という。１０年前に在日留学生の支援を始めてから、毎年一定数の応募のある内モンゴル自治区と新疆ウィグル自治区からの留学生に注目していた。彼等の自治区内における漢民族との葛藤、遊牧文化の衰退、沙漠化問題など、いつも聞かされていたので、一度行ってみたいと思っていた。モンゴル国のモンゴル人とも違う複雑なアイデンティティーの問題にも興味があった。

内蒙古大学のシンポジウムは、１２カ国から２８０名が集まる盛大なものだった。フフホト市で一番の内蒙古ホテルでの開会式の後、言語・文学・歴史・総合の４つの分科会に分かれ、３日間にわたって発表が行なわれた。私はフスレさんに励まされて「日本における留学生支援とネットワーク化：モンゴル人留学生を中心に」という発表を行なった。公用語がモンゴル語、中国語、英語だったので、日本語を話す人が英語を話す人より多かったにもかかわらず、英語で発表した。会場は、内蒙古大学工学部の新しい教室で、ＩＴ設備が完備されていたので、パワーポイントを使って発表できたから、かなり理解していただけたと思う。文部科学省の発表するデータには内モンゴル人の統計はないが、渥美財団の応募者データと文部科学省の中国人とモンゴル人のデータから類推すると、日本で勉強する内モンゴル自治区出身者は４～５千人になると思われる。一方、渥美奨学金に応募してくる私費で博士研究をしている内モンゴル自治区出身の留学生に限れば、圧倒的多数が日本で蒙古学を専攻している。日本には蒙古学の歴史と研究の蓄積があり、モンゴル文化への関心が高いことは承知している。また、中国における社会科学研究は非常に制限が多く、特に少数民族の問題は中国では思うように研究ができないという事情も理解する。しかしながら、蒙古学研究者の就職先は極めて限られており、結果として、日本に留まる蒙古学者が、研究で身を立てていくことが非常に難しい。従って、私は、結論として、内モンゴル自治区では、子供たちが小さいころから自分の将来について現実的に考える機会を充分に与える必要があるのではないか、自治区全体としての戦略的な教育計画が必要なのではないか、という問題提起を行なった。

会議を１日ぬけだして、フスレさんに観光に連れて行ってもらった。奥さんのご実家のあるオルドスへ行くことになった。フフホトからは車で約３時間。素晴らしい高速道路が繋がっていた。高速道路沿いは、一面のとうもろこし畑。興味深いのは、２年前にフスレさんが通った時には小麦畑だったという。内モンゴルでは、現在、乳製品の大企業が大成功している。それはそうだ。今まで牛乳やヨーグルトを摂取しなかった１３億人のマーケットがそこにあるのだから、いくら生産しても追いつかない。この一面のとうもろこしは、家畜の飼料となるもので（勿論、とうもろこし自体は人間の食料でもあるようだが）、これでもまだまだ足りないという。おまけに、この地帯は、カシミアの産地として有名なところで、カシミアの会社も中国の一流企業という。ＷＴＯに加盟した関係で、今年は生産が間に合わないほど売れていると

いうことだった。それに包頭市も含めて、このあたりは石炭と天然ガスの一大産地である（確かに空気は悪い）。さらに、少なくとも高速道路の両側では植林が進み、以前沙漠化しかけていた場所は、以前に比べれば緑に変わりつつあるとのことだった。（特に今年は雨が多く、緑が多いとのこと）北京への黄砂の飛来はどうしても防がなければならないから、きっとこの地域の沙漠化防止は国家の優先事業となるでしょう。内モンゴルの人々によれば、このように発展している企業は漢民族の資本であり、漢民族支配が進んでいるという。しかしながら、私には順調に発展している地域に見えて、肯定的に評価しても良いのではないかと思った。

中国の地方都市の大歓迎ぶりには、いつも、ありがたさと同時に、一種のとまどいを感じざるを得ない。それに体力勝負でもある。フスレさんのお義父さんは、オルドス市の歌舞団の団長さん。だから、わざわざ私のためにコンサートを開催してくださり、昼食も夕食もそれぞれ中国とモンゴルの大御馳走と白酒の宴会を用意してくださった。モンゴルでは、宴会では歌がつきものだというのだが、特に歌舞団の方々の接待だったので、歌舞団のソプラノ歌手が、私のために歌ってくださるのには感激であった。そのお酒を、右手の薬指を使って、蒼い大空と、緑の大地と、自分自身に奉げてから、一気に「乾杯」！ 無芸な私は一曲お返しすることもできず､アルコール度４０度のお酒に負かされないように、がんばるしかなかった。

ジンギスカンの墓地に連れていってくださった。墓地のまわりは、植林が行き届いた草原で素晴らしく美しかった。ジンギスカンがオルドスに遠征した時、鞭をおとしたことがあった。その地に葬ってほしいという遺言に従ってお祭りしているということだった。無宗教ということだったが、お祈りの儀式は、フフホト市で見学したラマ仏教寺院の形に近いように思った。世界を力で征服したジンギスカンを、民族団結のよりどころとして崇めること自体は、当然のことと受け入れられているようだった。私は馬が大好きなので、墓地のそばの貸し馬に乗せてもらった。草原の途中で、馬屋さんが引き綱を離した途端、馬がギャロップで駆け出した。短い距離だったが草原を馬で疾走したおかげで、フスレさんのお義父さんには満足していただけたようだった。これで、モンゴルの血が証明された、と夕食時に白酒を飲みながら言ってくださったけど、羊肉が不得手で、何よりも歌を歌えない私は、やっぱりモンゴル人にはなれそうもない。（２００４年８月２８日）

■　ラクーン会 in 北京
８月２０日（金）孫建軍さん、李恩民さん

内モンゴルからの帰途、北京大学の孫建軍さんを訪問しました。ちょうど東京から天津へ出張の李恩民さんにも途中下車で参加していただき、北京大学、清華大学を見学した後、中閑村にある新しいビルの中の、モダンなインテリアのお店で四川料理をいただきました。日本でも流行っている新しいスタイルの中華料理でとっても美味しかった！四川省出身のコックさんの話を聞くのに通訳が必要なのが面白かったです。

■　ラクーン・ディナー in マニラ
８月２７日（金）マキトさん

アジア太平洋大学とＳＧＲＡフィリピンが共催した第二回マニラ・セミナー「共有された成長をめざせ」の後、ピーター・ユー教授と一緒に、マキト家の大家族と一緒ににぎやかな夕食会をしました。

■　ラクーン会 in ソウル
１０月３０日（土）

【ラクーン会ニュース】

第２回韓国ラクーン会 (Korea Society of Raccoon: KSR)2004 年下半期の集まりが 10 月 30 日 (土)、韓国のソウル市江南区の中心に位置するモダンな中華料理店 Mr. Chow で開催された。会議の前、レストランのマネージャである Michael Jung 氏の案内でレストランの由来を聞き、と内部施設を見学することができた。

当日の会議では、KSR 会員らと共に、御多忙のなか日本からわざわざ来韓してくださった渥美国際交流奨学財団の理事長渥美伊都子様、常務理事今西淳子様を含め、来年日本への留学を予定される韓国の通信委員会の Lee Heon さんがゲストとして招待され、総勢９名が参席した。当日、財団の理事長からは本会の更なる発展と激励の御心をこめた後援金が渡された。

KSR 運営陣は、会員間の親睦を深めながら活動領域を徐々に拡大していくとの創立会議での合意に従い、まず第一歩として各会員の学問的業績と社会活動を載せた「2004 年会員活動報告書」を刊行した。会議では報告書に基づいて会員各自の活動を発表するなど有益な歓談が続いた。この報告書は、近々アップ・グレードしてインターネット上のコミュニティーで会員同士に共有される予定である。

出席者 : 朴哲主 , 金雄熙 , 李來賛 , 鄭成春 , 李炫瑛 , 蔡相憲 , 渥美伊都子 , 今西淳子 , Heon Lee　（文責：李來賛）

■　ラクーン会 in ソウル
２月２６日（土）

【ラクーン会ニュース】

２００５年２月２６日（土）午後６時、ソウル市の中心、鐘路（チョンノ）にある、プルコギで有名な「韓一館（ハニルグァン）」にて、第３回ソウルラクーン会が開催されました。羽田空港から金浦空港までひとっとびし、李來賛さん（９６）のご案内で冷凍庫のように冷え切った骨董屋の街、仁寺洞を散策した後、久しぶりに韓国ラクーンの皆さんにお会いして、温かい一時を過ごしました。皆さんがそれぞれ、ソウルで活躍している話を伺い嬉しく思いました。参加者は、李來賛さん、金雄熙さん（９６）、李香哲さん（９７）、洪京珍さん（９９）、朴栄濬さん（０２）、金賢旭さん（０３）、蔡相憲さん（０３）と、今西明日香＋今西淳子でした。

２月２７日（日）、午前１０時半のＫＴＸ（韓国の新幹線）の乗って、太陽のまぶしい釜山へ。久しぶりに再会した朴貞欄さん（９５）のご案内で、山の中の梵魚寺（ボモサ）見学の後、海雲台（ヘウンデ）ビーチを見下ろすホテルへ。大邱（テグ）から来てくださった李承英さん（０４）と一緒に、カルビ焼肉屋で、初めての釜山ラクーン会を開催しました。

今回のラクーン会の開催が、正式に決まったのがたったの２週間前だったにもかかわらず、お忙しい中、また遠いところ、ラクーン会に集まってくださった方、どうもありがとう！今回お会いできなかった方、次回、８月下旬に是非お会いしましょう。

■　ラクーン・ランチ in バンコク
３月２９日（火）プラチヤーさん

カセサート大学のそばの洒落たレストランで、「タイ人は何故アカデミックでないか」というお話を熱く語ってくださったプラチヤーさん、食後は、研究室のインターネットを半日貸切させていただき、ありがとうございました。原稿をお待ちしています！

■　ラクーン会 in 広州
４月１４日（木）奇錦峰さん、アンジェリーナさん

広州に着いてすぐ、中山大学に留学中のチン・アンジェリーナさんと奇錦峰さんと３名で、奇さんが教鞭をとっている広州中医薬大学も含む、広州７つの国立大学を一緒の場所に集めて３０万人の学生と教員が住むことになるという「大学城」を見に行きました。一昨年の１０月から工事がはじまり、昨年の９月にはすでに一部開設し、今年の９月に全部稼動させるという勢いに「唖然」。それにしても、広州で一番すごいと思うのは、開発地区の植栽です。「大学城」も数年後には、大きな森になると思います。本当にこの大発展ぶりと、未だとりのこされた部分とがちぐはぐで（犯罪率も高いとか）、「これが中国」と思いますが、やはりこの発展ぶりはハンパじゃないと感じます。夕食は、市内にもどり、観光客にも有名な陶陶居で広東料理を楽しみました。

【反日デモの中の広州・深せん旅行記】
２００５年４月１４日（木）から１８日（月）まで、中国の広州と深せんに行ってきた。「何故こんな時に？」というと、私は、ボランティアでＣＩＳＶ（Children' sInternational Summer Villages）という異文化理解と平和教育活動のグローバル組織のアジア太平洋地域コーディネーターを務めているので、中国の青少年交流のリーダーや参加者のための研修をずっと前から予定していたからである。

広州にも深せんにもＣＩＳＶのパートナーが居るから特に心配することもなかったし、トレーナーのＹさん以外は皆日本人ではなく、英語で話すことの方が多いので、「日本人だから」襲われる事態はほとんど考えられなかった。さらに、私は、中国に行くと必ず「日本人には見えない、中国人かと思った」と言われるので、「ばれない」自信はあった。直前に上海で２人の日本人留学生が殴られる事件があったので、出発前には、「『あなたは何人？』と聞かれたら『地球市民！』と答えるから大丈夫」と言っていっていたが、自分の国籍を隠した方が良いという経験は生まれて始めてだった。「最近の日本の政治家や報道があんなだから仕方ないか」とあきらめながらも、自分自身の信念や行動ではなく、たまたま与えられた国籍という基準で判断され、それに対して全く無力なことが悲しかった。

当然のことながら、旅行中に日本人であることが問題になったことは何もなかった。もともと言葉がわからないが、中国のテレビではデモの様子は報道されず、中国人のパートナーに聞いてもわからないので、「日本ではさぞかし大騒ぎだろうなあ」と思いながら、毎晩、インターネットで朝日新聞を読んだ。今回は比較的良いホテルに泊まったせいか、部屋でブロードバンドに簡単に繋げられるのがありがたかった。

広州の小学校の子どもたちを対象にワークショップをしたＹさんの話。１時間ほどゲームなどで楽しんだ後、質問を受けた。小学校３年生くらいの女の子が手を挙げて、「私はＹさんは好きだけど、中国人は日本人を好きではないと思います。」と言ったという。そこで、彼女が「ＣＩＳＶでは中国人でも日本人でも誰でも皆、友達になるのよ」と言うと、その女の子はしばらく考えた後、「じゃ、私は日本人の女の人は好き！」と答えた。（すごい！５０％も進歩！）そうすると、別の女の子が手を挙げて「中国と日本は昔戦争をしました。でも、それは昔のことで、今は仲良くなれると思います」と発言したという。何はともあれ、このように積極的に発言するのは、

とても良いことだと思う。「日本人の子どもたちは、あんなにはっきりした意見をもっていないでしょうねえ」とＹさんと話した。この話を深せんのパートナーにしたら、事前に配慮して「政治的な話はしないように」言ったようで、その後、このようなことは一度も起こらなかった。（ちょっと残念）尚、このワークショップは英語で行ったが、中国の子どもたちの英語は、彼等の英語の先生の英語よりも上手いということで意見が一致した。

一緒に食事をしたりしている時には、反日デモの話が結構でた。「あれは日本の政府が悪いので、一般の日本国民は悪くない」というのが最も一般的な日本人に対するコメントだと思う。これは、中国政府が中国国民に説明してきた「あの戦争は『一部の悪い日本人』がやったのであり、一般の日本人は悪くない。」に通じる。だから、その「一部の悪い日本人」を祀る神社に、日本の総理大臣が参拝するのを許せないというのは、論理的に理解できると思う。デモの話がでると、私は「反日デモはやったら良いけど、暴力はいけない。平和なデモなら、私も参加してもいい」と言っていたのだが、どれくらい理解してくれたかどうかよくわからない。私のコメントに対して「そうそう、暴力はいけない！」と返してくれたのは、一人だけだった。

日曜日には、深せんの郊外の学校でワークショップをした。そこへ向う途中、反日デモの最初のグループに出会った。交通規制のために予定の時間に遅れてしまった。「反日デモに捉まってしまったという口実があるね」と笑った。まだデモが始まったばかりだったので、１００人くらいの小さなグループだった。どこかの職場の単位だろうとのことだったがその集団名を記したものを見た覚えはない。このグループのプラカードなどはあまり「作られた」という印象はなかった。車の窓を開けて写真をとったら手を振っていた。行列の端には制服の警官がずっと並んでおり、後ろの方は寧ろ警官ばかりで、警官がデモをしているようにも見えた。「あの人たちは何をしているの？」と中国人のパートナーに聞くと「彼等に聞けば『警備をしている』と答えるでしょう」ということだった。

私たちは、ワークショップに行かなければいけなかったので、日本よりも大分安いという２ＧＢのＵＳＢメモリーフラッシュを、深せんに住むアメリカ人のＪさんに買いにいってもらうことにした。何でも、ＳＥＧという深せんの秋葉原のようなところへ行くということだった。私たちと別れた後、ＪさんはＳＥＧに行くバスに乗ろうと思ったが、待てど暮らせど来ない。仕方がないので、裏道を走る別のバスで行った。ＳＥＧに近づくと大渋滞。そして、警官ばかり。しかも銃を持った武装警官も！（誰に向って銃を撃つの？）やっとたどり着いて、商品を探しに店内にはいった。しばらくして、Ｊさんにはわからない中国語のアナウンスがあり、買物客がでていった。さらに、少したつと、店内の電気が消されて、買物客は全員、店の外へでなければならなかった。仕方なく店の外へでたら人、人、人、人・・・道路は止められてバスは走っていないし、向こうのバス停に行こうにも、横断歩道も通行止めで動きようがない。仕方がないから、店の前でずっと立って終わるのを待つしかなかった。「暴力的なことはなかったの？」と聞いたら、国旗が焼かれて、三菱の看板が叩かれた程度とのこと。ＳＯＮＹなどの日本の企業の看板はあらかじめ隠されていたというので、デモはある程度予期されていたようだ。

インターネットの朝日新聞によれば、１７日の深せんのデモは１万人とのこと。Ｊさんにに話したら、「それは、お揃いのＴシャツを着た一部の組織化されたグループと、日曜日の午後、店から追い出された買物客だよ」と。香港空港へ向う途中で話をした韓国人も、車で通ろうとしていた時に、そのデモに巻き込まれたと言っていた。彼のパートナーは地元の人だが、デモのことは聞いていなかったようだ。そして、この人の印象も、「ほとんどの人がただ見ているようだった」とのことだった。１８日の朝日新聞の１面には、「深せん市の日系デパートを囲んだデモ参加者」という写真があったが、その中には、ショッピングを楽しんでいた日系デパートから追い出された人々も含まれていると思う。う～ん、これが１万人（あるテレビによれば３万人）動員するチャイナマジックだ！しかし、そのマジックのおかげで、Ｊさんは日曜日の午後を電気屋の前で費やし（デモ見物はできたけど）、私は格安のメモリーフラッシュを逃した。（２００５年４月１９日記）

第４回日韓アジア未来フォーラム＆
第１８回ＳＧＲＡフォーラム

「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」

日本では、数年前より韓国料理ブーム、ワールドカップに伴うサッカーブーム、韓国映画ブームがおこり、今年の「ヨン様ブーム」に至って「韓流（韓国ブーム）」が爆発した。これは今までの日韓交流史に見られない画期的なできごとである。同様に、韓国においても、日本の音楽や漫画やゲームに対する若者の関心は非常に高い。このように密度の高い人的・文化的な相互交流の増進は、程度の差こそあれ、東アジア各国に共通する現象といえよう。政治的あるいは軍事的な「ハードパワー」においては様々な問題をかかえるこの地域にとって、急成長する「ソフトパワー」はどのような意味と意義があるのか考えた。

■プログラム

司会：全 振煥（鹿島建設技術研究所主任研究員、ＳＧＲＡ運営委員）

・基調講演：「韓流の虚と実」 李 鎮奎（未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授）

・主題発表１：「日韓文化交流政策の政治経済学」 林 夏生（富山大学人文学部国際文化学科助教授）

・主題発表２：「冬ソナで友だちになれるのか」 金 智龍（文化評論家）

・パネルディスカッション

進行：金 雄熙　仁荷大学助教授、ＳＧＲＡ研究員

パネリスト：講演者３名に加えて

道上尚史　内閣府参事官（元在韓国日本大使館参事官）

木宮正史　東京大学大学院総合文化研究科助教授

李 元徳　国民大学副教授

■概要

第４回日韓アジア未来フォーラム・第１８回ＳＧＲＡフォーラム「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」が東京国際フォーラムで２月２０日（日）に開催された。これまでの日韓交流史に見られない画期的なできごとである韓流の意義について考えるフォーラムであった。日韓アジア未来フォーラムは、２００１年より始めた韓国未来人力研究院と共同で進めている日韓研究者の交流プログラムで、毎年交互に訪問しフォーラムを開催している。

ＳＧＲＡを代表して今西淳子さんによる開会の挨拶に続き、韓国未来人力研究院の院長、韓国高麗大学の李鎮奎（イ・ジンギュ）教授（自称、ジン様）が「韓流の虚と実」という演題で基調講演を行った。日本における韓流ブームを時代別の事例と日本と韓国双方の分析を用いて検証し、日本での韓流ブームの原因をドラマ・中心層・日本人の意識的変化という観点から説明した。また、韓国ではなぜ日流ブームは起こらないのかという疑問点を歴史的認識と日本側の市場開拓戦略という面から説明した。さらに韓流ブームにおける危険性として韓流による韓国での文化経済主義的な視点、文化民族主義的視点への警戒を述べた。

基調発表に引き続き日本富山大学の林夏生（はやし・なつお）氏は、日韓文化交流政策の政治経済について発表した。韓流・日流が一般にはまるで「最近になって唐突に」出現した現象のように受け止められているが、実は「そうではない」とし、政策的には規制されながらも、海賊版が大量に流通するなど非公式な側面も含む「文化交流現象」が存在したこと、そしてそれへの対応がせまられたこともまた、近年の急激な変化をもたらす重要な要因のひとつであったと指摘した。

自由に生きていきたいと叫ぶ韓国の新世代文化評論家の金智龍（キム・ジリョン）氏は「冬ソナで友だちになれるのか」とやや刺激的な演題で発表した。自分の言いたいことは前の講演で言われてしまったとし、アドリブで３０分ほどの発表をこなした。多年間にわたる日本での文化体験に基づきながら、今の韓流ブームは一方的な文化流入に対する反感を和らげる役割を十分に果たしているし、韓国の若者たちが日本文化を楽しむことに対するいかなる批判も根據や理屈を失うことになるとした。日本文化であれ、韓国文化であれ、文化を共有することはお互いの理解を深めるになり、韓流ブームをきっかけとし、日韓両国の人がもっと親しみを感じて友だちになることにつながると言い切った。

休憩を挟んで発表者を含めて５人のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。内閣府参事官（元在韓国日本大使館参事官）の道上尚史（みちがみ・ひさし）氏は、政府の見解ではないという前提で、「文化、ソフトパワーと新日韓関係」について討論し、「こぐのをやめると自転車は倒れる」、「はやりすたれに任せるには、日韓関係は重要すぎる」という含みのあるメッセージを伝えた。

韓国国民大学（東京大学客員教授）の李元徳（イ・ウォンドク）氏は「韓流と日韓関係」について、韓流・日流は明るい将来の日韓関係を示すシンボルであるとしながら、早急な楽観論は警戒すべきと指摘した。

最後に東京大学の木宮正史（きみや・ただし）氏は日韓関係の構造的変容のなかで韓流現象を捉え、韓流は単なるブームだけではなく、日韓関係の緊密化という構造変容によって支えられているものであると指摘した。

その後、ディスカッションはフロアーに開放され、７０名にも及ぶ参加者の中からコメントや感想が寄せられた。ジャーナリストの櫻井よしこ氏からは李元徳氏と木宮正史氏に対北朝鮮政策や歴史教科書問題について「攻撃的」質問もあり、一瞬「戦雲」が場内をおおう場面もあった。予定より２５分遅れてフォーラムは終了し、フォーラムの最後に韓国未来人力研究院の宋復（ソン・ボク）理事長による閉会の挨拶が行われた。フォーラムは、「ジュン様（姫？）」と「ジン様」のご協力で立派なフォーラムができたことについてのお祝いの言葉と拍手で締め括られた。

（文責：金雄熙）

活動報告（２００４年６月～２００５年５月）

☆年４回のＳＧＲＡフォーラムを開催

■ 2004 年 7 月 24 日　第１６回 SGRA フォーラム in 軽井沢「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」

（於：鹿島建設軽井沢研修センター）

司会 / コーディネーター：南基正（東北大学法学部教授、ＳＧＲＡ研究員）

・基調講演：「対テロ戦争にみる安全保障の新展開」
竹田いさみ（獨協大学外国語学部教授）

・研究報告：「日米関係における「日米同盟」―過去、現在、今後」
ロバート・エルドリッヂ（大阪大学大学院国際公共政策研究科助教授）
質問者：林 泉忠（琉球大学法文学部助教授、ＳＧＲＡ研究員）

・研究報告：「ポスト冷戦期における米韓同盟の持続と変化」
朴 栄濬（韓国国防大学校安全保障大学院助教授、ＳＧＲＡ研究員）
質問者：安藤純子（東北大学法学研究科博士課程）

・研究報告：「台湾内政の変動と台米同盟」
渡辺 剛（杏林大学総合政策学部専任講師）
質問者：李 恩民（桜美林大学国際学部助教授、ＳＧＲＡ研究員）

・研究報告：「米比同盟と冷戦・ナショナリズム・対テロ戦争」
伊藤裕子（亜細亜大学国際関係学科助教授）
質問者：オーリガ・ソブコ（東北大学法学研究科博士課程）

・パネルディスカッション

・ご挨拶：明石 康（日本紛争予防センター会長）

→ SGRA レポート # 27(予定)

■ 2004 年 10 月 23 日　第１７回 SGRA フォーラム「日本は外国人をどう受け入れるべきか―地球市民の義務教育―」

（於：東京国際フォーラム）

司会：徐 向東（ＳＧＲＡ「人的資源・技術移転」研究チームチーフ / 日経リサーチ研究員）

・ゲスト講演：「 学校に行けない子どもたち：外国人児童生徒の不就学問題」
宮島 喬（立教大学社会学部教授）

・研究報告：「在日ブラジル人青少年の労働者家族が置かれている状況と問題点：集住地域と分散地域の比較研究」
ヤマグチ・アナ・エリーザ（ＳＧＲＡ研究員 / 一橋大学社会学研究科博士課程）

・研究報告：「在日朝鮮初級学校の「国語」教育に関する考察：国民作りの教育から民族的アイデンティティ自覚の教育へ」
朴 校熙（東京学芸大学連合大学院博士課程）

・研究報告：「カリフォルニア州における二言語教育の現状と課題：ロサンゼルスの３つの小学校の事例から」
小林宏美 (慶應義塾大学大学院法学研究科、静岡文化芸術大学非常勤講師)

・パネルディスカッション（フロアーとの質疑応答）
進行：角田英一（アジア２１世紀奨学財団常務理事）

パネラー：宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美

→ SGRA レポート # 28(予定)

■ 2005 年 2 月 7 日　第１８回 SGRA フォーラム・日韓アジア未来フォーラム「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」（第４回日韓アジア未来フォーラム・第１８回ＳＧＲＡフォーラム参照）

（於：東京国際フォーラム）

→ SGRA レポート # 29

■ 2005 年 5 月 17 日　第 19 回 SGRA フォーラム「東アジア文化再考：自由と市民社会をキーワードに」

（於：東京国際フォーラム）

司会：林 少陽（SGRA「地球市民」研究サブチーフ）

・ゲスト講演：「中国山水画の住人たち－「隠逸」と「自由」の形」

宮崎法子（実践女子大学文学部教授）

・ゲスト講演：「東アジアにおける市民社会の歴史的可能性」

東島 誠（聖学院大学人文学部助教授）

・フロアーとの質疑応答

進行　高 熙卓（SGRA「地球市民研究」チーフ）

→ SGRA レポート # 30(予定)

第１６回

第１７回

第１８回

第１９回

■　渥美奨学生２００４年度著作・発表論文・特許リスト

■ **Abliz Yimit アブリズ イミテ** (横浜国立大学・博士＜人工環境システム＞：新疆大学化学化工学院：2002 年度奨学生)

1. Abliz Yimit, axel G. Rossberg, Takashi Amemiya, Kiminori Itoh, Thin film composite optical waveguide for sensor applications: a review, Talanta 65 (2005)1102-1109.

2. Abliz Yimit, 日本の教育や社会発展からウイグル社会の現状を考える（ウイグル語）、KUMUL LITERATURE, 2005 (1), 5-28.

■ **Ampong,Beryl Nyamekye アンポン、ベリル　ニャメチェ**（東京医科大学＜薬理学＞：2004 年度奨学生）

1. Beryl N. Ampong, Michihiro Imamura, Teruhiko Matsumiya, Shin'ichi Takeda, Mikiharu Yoshida、'Intracellular localization of dysferlin in skeletal muscle' The 78th Annual Meeting of The Japanese Pharmacological Society March 22-24, 2005, Yokohama, Japan, Proceedings of The Journal of Pharmacological Sciences, Volume 97 (Supplement 1) p248, 2005

■ **Bao Lian Qun 包　聯群**（東京大学＜言語情報科学＞：2005 年度奨学生）

1.「選択科目としてのモンゴル語能力及び意識調査」、『言語情報科学』第 2 期、2004 年 3 月、191 - 204 頁、東京大学大学院総合文化研究科（東京：原文日本語）

2.「言葉使い及び意識調査の結果からみられるコミュニティ言語の実態―ドルブットモンゴル族中学校・高等学校モンゴル語主体カリキュラムの生徒を中心に―」、『社会言語科学会－第 13 回大会発表論文集』、2004 年 3 月、43 - 47 頁、社会言語科学会編集（東京：原文日本語）

3.「モンゴル語のＶχ - и р э х 構造におけるχ（- ж ,- ч ;- а а д など）の文法的な意味に関して」、『蒙古語文』（モンゴル語版）2004 年第 6 期（総 315 期）、6 ― 8 頁内蒙古『蒙古語文』雑誌編集委員会（フフホト市：原文モンゴル語）

4.「モンゴル語の空間移動動詞 irexü(来る) と očiXu(行く) の文法化について」、『民族語文』、2004 年第 5 期（総 149 期）、66 ― 68 頁、中国社会科学院（北京市：原文中国語）

5.「黒龍江省泰来県ウンドル村の満州語に関して」、『満語研究』2004 年第 2 期（半年刊）、34-40 頁、黒龍江大学満語研究所（ハルビン市：原文中国語）

■ **Borjigin,Burensain ボルジギン、ブレンサイン** (早稲田大学・博士＜東洋史＞：早稲田大学、和光大学、東京経済大学、中央大学非常勤講師、早稲田大学モンゴル研究所客員研究員：2001 年度奨学生)

論文・論説：

1.「近現代内モンゴルにおける民族再編の二重構造－アルホルチン旗ハラトクチン村の事例研究－」『史観』（早稲田大学史学会）151，2004.9.

2.「モンゴル人と社会主義」，小長谷有紀編『モンゴル帝国における２０世紀』，中央公論社，2004.8. 調査報告 「鳳城市（旧鳳城満族自治県）見聞記」、『満族史研究』（満族史研究会）第３号、2004 年 6 月

史料紹介：

1.「東京経済学図書館所蔵『大蒙公司社報』二部」、『日本とモンゴル』第 39 巻第 1 号、2004 年 9 月

コラム：

1.「少数民族の伝統を脅かす都市化」『朝日新聞』「アジアネットワーク」（AAN）コラム、2004.3.1　＊上記の英文版 "Urbanization threatens the traditions of minority groups"、Asahi Shimbun Asian　Network（AA N）Web Address：

2.「中国：政治に翻弄された大河」『朝日新聞』「アジアネットワーク」（AAN）コラム、2004.10.9

学術口頭発表：

1.「モンゴル国と内モンゴルにとっての「開発」とは何か？」，兵庫県立大学開学記念ゆりの木フォーラム　2004. 6.26.

2.「内モンゴルの環境と中国の乳製品工業」，兵庫県立大学開学記念ゆりの木フォーラム 2004，於兵庫県立大学環境人間学部，2004.7

3. "Yapon-u TOYO BUNKO-d qada γ ala γ daj bai γ a Begejig-un Undur Wang-un ordun-u alban ba nayir-un yabugulugsan bicig ud un qagulburi-in tuhai"（モンゴル語）（和訳：日本の東洋文庫に所蔵されている 「北京ウンドゥル王府モンゴル語文書記録帳写本」について），内蒙古大学第四回蒙古学国際学術討論会，於中国内モンゴル自治区フフホト市 , 2004.8.

4.「粛親王の対日借款と旧大倉財閥」2004 年度早稲田大学史学会大会，於早稲田大学，2004.10.16

5.「境界としての興安嶺―アルホルチン旗と西ウジュムチン旗の牧地紛争を事例に―」早稲田大学モンゴル研究所主催 21 世紀

COE 関連国際シンポジウム「近現代における内モンゴル東部地域の変容 II」2004.11.27

■ **Chang Kuei-e 張　桂娥** (東京学芸大学＜学校教育学－言語文化＞：2003 年度奨学生)
1. 論文：日本児童文学作家―神沢利子の作家と作品、『国語日報』児童文学週刊欄、四面、2004.4.18-25、連載二回
2. 論文：永遠のベストセラー―日本児童文学名著　くまの子ウーフ―、天衛出版ニュースレター、天衛出版社、2004.5.18 号
3. 論文：2000 年以降、台湾における日本児童文学作品の翻訳出版について、『日本児童文学』第 51 巻第 2 号／小峰書店／pp. ？ - ？／ 2005.03
4. 学会発表：台湾における日本児童文学作品の翻訳受容について－戦後刊行された単行本の出版状況の考察を中心に－、天理台湾学会第 14 回研究大会、2004.07.03
5. 著 (訳) 書：小熊沃夫〔訳〕【くまの子ウーフ〔神沢利子著・幼児向け物語〕】、天衛出版社、2004.05
6. 著 (訳) 書：化為千風〔訳〕【千の風〔新井満著・絵本〕】、天衛出版社、2005.01
7. 著 (訳) 書：養天使的方法〔訳〕【天使のかいかた〔中川ちひろ著・絵本〕】、天衛出版社／ 2005.02

■ **Chin,Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ　ヤンヤン**（お茶の水女子大学＜ジェンダー研究＞：中山大学客員研究員（フルブライト研究員）（在広州）：2004 年度奨学生)
1. “Performing and Policing Femininity in Guangzhou,” Gender, Sexuality and Public Sphere, Cultural Typhoon International Symposium, Okinawa, 2004.
2. “Transformations of Femininity and Fengsu (Social Customs) in 1920s and 1930s Guangzhou,” The Proceedings of “Modern Girl, Asia and Beyond” International Workshop, Ochanomizu University and University of Washington, Tokyo, 2004.
3. “Regulation of Prostitution in 1920s and 1930s Guangzhou,” Papers from the Fourth Annual Conference of the Urban China Research Network, December 2004, Hong Kong.

■ **Fan Jianting 範　建亭** (一橋大学・博士＜経済学＞：上海財経大学国際工商管理学院助教授：2001 年度奨学生)
1. 単著：『中国の産業発展と国際分業：対中投資と技術移転の検証』風行社、2004 年 6 月
2. 共著：「中国サイドから見た台湾企業の進出」（第 7 章）、関満博編『台湾 IT 産業の中国長江デルタ集積』新評論、2005 年 2 月
3. 論文：「中国経済における外資系企業の役割：外資導入と技術移転の検証」、『一橋ビジネスレビュー』第 52 巻 4 号（東洋経済新報社、2005 年 3 月

■ **Gao Weijun 高　偉俊** (早稲田大学・博士＜建設工学＞：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科助教授／西安交通大学兼職教授：1995 年度奨学生)
1. 阮応君、高偉俊、相楽典泰、龍有二、北九州学術研究都市における地域エネルギーシステムに関する評価　その 1　14 年度別熱源システムの運転状況の比較評価、2004/5、空気調和・衛生工学会九州支部研究報告、第 10 号 ,97-100
2. 高偉俊、阮応君、相楽典泰、龍有二、北九州学術研究都市における地域エネルギーシステムに関する評価 その 2　年度別熱源システムの運転状況の比較評価、2004/5、空気調和・衛生工学会九州支部研究報告、第 10 号 ,97-100
3. 高偉俊、周南、西田勝、相楽典泰、龍有二、尾島俊雄、北九州学術研究都市における地域熱源システムの夏季運転効果に関する調査、2004/6、" 日本建築学会技術論文集 19 号、2004 年 6 月 ",19 号 ,193-196
4. 高偉俊、李海峰、尾島俊雄、中国における都市化の現状及びその類型化に関する研究、2004/6、" 日本建築学会技術論文集 19 号、2004 年 6 月 ",19 号 ,221-226
5. 周南、高偉俊、西田勝、尾島俊雄、断熱を施した建物における屋根散水と緑化の熱的効果に関する検証研究、2004/6," 日本建築学会技術論文集 19 号 ,2004 年 6 月 ",19 号 ,215-220
6. Xingtian Wang,Weijun GAO,Haifeng LI,Penglin Zhao,Jiangxing REN,Toshio OJIMA,Study on the Present Situation of Urbanization and Its Classification in China,2004/6,"5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia",591-596
7. Yingjun Ruan,Weijun GAO,Qingrong Liu,Noriyasu Sagara,Yuji Ryu,A Questionnaire Survey on District Distributed Generation System,2004/6,"5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia",579-582
8. Yumiko Ogawa,Toshihide Fukahori,Weijun GAO,"A Research on Building Waste and Recycling in Kitakyusyu Part1:the

Present Condition of Building Waste",2004/6,"5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia",516-519
9. Qingrong Liu,Yuji Ryu,Weijun GAO,Yingjun Ruan,Field Study and Evaluation on PV System at Kitakyushu Science and Research Park,2004/6,"5th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia",573-578
10. Zhou, N.,W. Gao,C. Marnay,M. Nishida,T. Ojima,Validation of the Thermal Effect of Roof-Spraying and Green Plants in an Insulated Building,2004/8,"SimBuild 2004, IBPSA-USA National Conference Boulder, CO, August 4-6, 2004"
11. 小川由美子、深堀秀敏、高偉俊、九州市における建築廃棄物及び再資源化に関する調査研究　その１　建築解体工事の事例研究、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-1 分冊，p.767
12. 劉青栄、龍有二、高偉俊、阮応君、北九州における住宅のエネルギー消費量に関する調査研究、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-2 分冊，p.293
13. 金川宗司、, 阮応君、高偉俊、李海峰、尾島俊雄、東京地区におけるコージェネレーションシステムの導入現状に関する調査　地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究 (その 1)、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-2 分冊，p.1345
14. 楊涌文、阮応君、高偉俊、住宅団地におけるコジェネレーションシステム導入規模の最適化に関する研究　地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究 (その 2)、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-2 分冊，p.1347
15. 高偉俊、周南、阮応君、西田勝、分散型エネルギーシステムの導入ツール― DER-CAM モデル　地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究 (その 3)、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-2 分冊，p.1349
16. 阮応君、周南、高偉俊、DER-CAM 用いて商用エネルギーシステムの最適化に関する研究　地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究 (その 4)、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,D-2 分冊，p.1351
17. 新名聡、高偉俊、深堀秀敏、GIS を用いた都市の低・未利用地の活用手法に関する研究　その１　北九州市における低・未利用地の現状調査、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,F-1 分冊，p.493
18. 小野直、城下直樹、小川由美子、劉青栄、北山広樹、高偉俊、地域住環境の評価に関する研究　その１　北九州市における地域住環境の意識調査、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,F-1 分冊，p.575
19. 城下直樹、小野直、小川由美子、深堀秀敏、北山広樹、高偉俊、地域住環境の評価に関する研究　その２　GIS を用いた丁目別の分析、2004/8、2004 年度 (北海道）日本建築学会大会学術講演会 ,F-1 分冊，p.577
20. Nan Zhou,Weijun Gao,Masaru Nishida,Hiroki Kitayama,Toshio Ojima,Field study on the thermal environment of passive cooling system in RC building,2004/9,Energy and Buildings 36 (2004),1265-1272
21. Weijun Gao,Xingtian Wang,Haifeng Li,Penglin Zhao,Jianxing Ren,Toshio Ojima,Living environment and energy consumption in cities of Yangtze Delta Area,2004/9,Energy and Buildings 36 (2004),1241-1246
22. 高偉俊、福田展淳、石川達郎、深堀秀敏、徳原英利、立塚祐司、内木利行、, 箱嶋隆、集合住宅の解体及びリサイクルのエネルギー消費に関する調査研究、2004/10、" 住宅総合研究財団研究論文集 No.31,2004 年版 ",251-262
23. Junqiao Han,Weijun Gao,Toshio Ojima,Prediction of Energy Consumption Based on the Floor Utilization of Multipurpose Commercial Buildings,2004/10,"Tall Buildings in Historical Cities Culture & Technology for Sustainable Cities,CTBUH 2004 October 10-13, Seoul, Korea",430-434
24. Weijun Gao,Nan Zho,Bill Batty,Masaru NISHIDA,Noriyasu SAGARA,Yuji RYU,Evaluation of the energy and environmental performance by introducing a district energy system--Summer field study at Kitakyushu Science and Research Park,2004/11,Journal of Asian Architecture and Building Engineering,Vol.3 No.2　33-38
25. Qingrong Liu,Yuji Ryu,Weijun Gao,Yingjun Ruan,Field study and sensitive analysis of PV system by multiple regression method,2004/11,Journal of Asian Architecture and Building Engineering,Vol.3 No.2　121-126
26. Yingjun Ruan,Weijun GAO,"Examination of the viability of Co-generation for a small-scale housing development in Kitakyushu, Japan",2004/11,"The 3rd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings (EERB2004)　21st-24th, November 2004,Xi'an, China",430-434
27. Weijun GAO,Nan Zhou,Toshiyuki Watanabe,Hiroshi Yoshino,Toshio OJIMA,Standard for Energy Efficiency and Environmental design of Residential in China,2004/11,"The 3rd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings (EERB2004)　21st-24th, November 2004,Xi'an, China",484-491
28. Xindong Wei,Jun Yin,Weijun Gao,Chunqing Wang,"Analysis on Future Trend of Energy Demand in Residential Building

of Jilin Province, China",2004/11,"The 3rd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings (EERB2004)　21st-24th, November 2004,Xi'an, China",413-418
29. Yumiko Ogawa,Weijun Gao,A Research on Residential Environments And it's Relation with Geographic Information---Field Study of Kitakyusyu City in Fukuoka Japa,2004/11,"The 3rd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings (EERB2004)　21st-24th, November 2004,Xi'an, China",116-121
30. Hiroatsu Fukuda,Weijun Gao,A Proposal of Ecological Wooden Houses in Japan,2004/11,"The 3rd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings (EERB2004)　21st-24th, November 2004,Xi'an, China",105-109
31. 周南、高偉俊、渡邊俊行、吉野博、西田勝、尾島俊雄、中国における住宅の省エネルギー及び環境設計基準に関する考察、2004/12、日本建築学会技術論文集 20 号、2004/12,20 号　191 － 194
32. 小野直、高偉俊、近年の上海市における集合住宅団地の立地・住環境に関する住民評価―事例として恒聯新天地における住宅団地外部環境の意識調査、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　計画系，p13‐16
33. 新名聡、城下直樹、森慎、深堀秀敏、高偉俊、ＧＩＳを用いた北九州市の低・未利用地の活用手法に関する研究－その 1 低・未利用地有効活用のための意思決定プロセスの調査・検討－、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　計画系，p357‐360
34. 森慎、城下直樹、新名聡、深堀秀敏、高偉俊、ＧＩＳを用いた北九州市の低・未利用地の活用手法に関する研究－その 2 八幡東環境事務所跡地の活用方法について－、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　計画系，p361‐364
35. 城下直樹、新名聡、森慎、深堀秀敏、深堀秀敏、ＧＩＳを用いた北九州市の低・未利用地の活用手法に関する研究－その 3 既存スーパーマーケットの立地特性調査－、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　計画系，p365‐368
36. 于、渡辺俊行、赤司泰義、高口洋人、高偉俊、中国における住宅内エネルギー消費に関する調査研究　その 1 瀋陽市の場合、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　環境系，p141‐144
37. 阮応君、高偉俊、相楽典泰、龍有二、地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究（その 5)　北九州学究都市における地域エネルギーシステム 2002 年の運転状況、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　環境系，p417‐420
38. 楊涌文、周南、高偉俊、阮応君、西田勝、地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究（その 6)　日米における電気、ガス料金、分散型技術及び助成措置に関する比較調査、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　環境系，p421‐424
39. 高偉俊、阮応君、相楽典泰、龍有二、地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究（その 7)　北九州学研都市におけるエネルギーシステムの年度別運転実態に関する調査研究、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　環境系，p425‐428
40. 小川由美子、金川宗司、本村圭三、深堀秀敏、高偉俊、北九州における建築廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関する調査研究その 1　解体工事に関するアンケート調査とエネルギー消費量の算定、2005/3、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号　構造系 ,p325-428
41. 本村圭三、小川由美子、金川宗司、深堀秀敏、高偉俊、北九州における建築廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関する調査研究その 2　中間処理施設における事例研究、2005/03、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号 , 構造系 ,p429-432
42. 金川宗司、小川由美子、本村圭三、深堀秀敏、高偉俊、北九州における建築廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関する調査研究その 3　建設廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関するケーススタディ、2005/03、日本建築学会九州支部研究報告集 , 第 44 号 , 構造系 ,p433-436

■ **Han Junqiao 韓　珺巧**（早稲田大学＜建築学＞：2005 年度奨学生）

審査論文：

1. 床用途に基づく総合スーパーマーケットのエネルギー需要量の予測手法に関する研究、2004. 6、日本建築学会環境系論文集、No.580、P77-84、韓珺巧、尾島俊雄

国際会議論文：

1. PREDICTION OF ENERGY CONSUMPTION BASED ON THE FLOOR UTILIZATION OF MULTIPURPOSE COMMERCIAL BUILDINGS，2004.10，CTBUH 2004 Seoul Conference 国際会議論文、韓珺巧、高偉俊、尾島俊雄
2. THE CHARACTERISTICS OF ENERGY CONSUMPTION OF SOHO ARCHITECTURE IN CENTRAL TOKYO，2005.1，The First

International Conference on Environmental science and Technology，New Orleans, LA, USA、韓珺巧、藤木洋徳、尾島俊雄
建築学会大会論文：
1. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 1 報）、2004. 8、日本建築学会学術講演梗概集　D-2 環境工学Ⅱ、塚田信之、安岡善朋、小山智子、韓珺巧、尾島俊雄、原英嗣
2. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 2 報）、2004. 8、日本建築学会学術講演梗概集　D-2 環境工学Ⅱ、安岡善朋、塚田信之、小山智子、韓珺巧、尾島俊雄、原英嗣
3. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 3 報）、2004. 8、日本建築学会学術講演梗概集　D-2 環境工学Ⅱ、韓珺巧、原英嗣、安岡善朋、小山智子、塚田信之、尾島俊雄
4. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 4 報）、2004. 8、日本建築学会学術講演梗概集　D-2 環境工学Ⅱ、小山智子、塚田信之、安岡善朋、韓珺巧、原英嗣、尾島俊雄
5. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 5 報）、2004. 8、日本建築学会学術講演梗概集　D-2 環境工学Ⅱ、原英嗣、安岡善朋、塚田信之、小山智子、韓珺巧、尾島俊雄
出版物：
1. 都心部における業務用建物の用途転換によるエネルギー消費の変化に関する調査研究（第 4 章）、2004.2、株式会社　ジェス・プロジェクトルーム、プロジェクト報告書

■ **Han Kyoung Ja 韓　京子**（東京大学＜日本文化研究＞：2005 年度奨学生）
1. 論文：「近松浄瑠璃における滑稽の趣向」、『江戸文学』30 号、2004 年 6 月
2. 書評：冨田康之著『海音と近松－その表現と趣向』、『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）平成 17 年 2 月号

■ **He Zuyuan 何　祖源**（東京大学・博士＜先端学際工学 / 光電子工学＞：東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻特任助教授：1998 年度奨学生）
査読付き学術誌論文：
1. Chia-Chen Chang, Zuyuan He, Gregory Senft, Nasir Ahmad, Erin Sahinci, and Waqar Mahmood, “Evaluation on fiber boot of optical component by bend radius measurement in side pull test,” IEICE Electron. Express, Vol. 2, No. 6, pp. 205-210, Mar. 2005
2. Momoyo Enyama, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Expansion of spatial measurement range by use of vernier effect in multiplexed fibre Bragg grating strain sensor with synthesis of optical coherence function,” IoP Meas. Sci. Technol., Vol. 16, No. 4, pp. 977-983, Apr. 2005
3. Xinyu Fan, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Novel distributed fiber-optic strain sensor by localizing dynamic grating in polarization-maintaining erbium-doped fiber: proposal and theoretical analysis,” Japanese Journal of Applied Physics, Vol. 44, No. 2, pp.1101-1106, Feb. 2005
4. Zuyuan He, Soshi Yoshiyama, Momoyo Enyama, and Kazuo Hotate, “High-reflectance-resolution optical reflectometry with synthesis of optical coherence function,” Japanese Journal of Applied Physics, Vol. 44, No. 3, pp. L117-L119, Dec. 2004
5. Zuyuan He, Waqar Mahmood, Erin Sahinci, Nasir Ahmad, and Yves Pradieu, “Analysis on the effects of fiber end face scratches on return loss performance of optical fiber connectors,” IEEE/OSA Journal of Lightwave Technology, Vol. 22, No. 12, pp. 2749-2754, Dec. 2004
6. Zuyuan He, Chia-Chen Chang, Jun Bao, Wenxin Zheng, Erin Sahinci, and Waqar Mahmood, “Measurement and modeling of spectral transmission tilt in WDM systems due to stimulated Raman scattering,” IEICE Electron. Express, Vol. 1, No. 11, pp. 311-316, Sept. 2004
国際会議論文：
7. Zuyuan He and Kazuo Hotate, “Application of synthesized coherence function to distributed optical sensing,” Proc. SPIE International Conference on Asia-Pacific Optical Communications (APOC’2004), Vol. 5623, Paper 5623-84, Beijing, Nov. 2004 (invited / tutorial)
8. Xinyu Fan, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Distributed fiber optic strain sensing by synthesizing dynamic grating in polarization maintaining erbium-doped fiber,” Proc. SPIE Fiber Optic Sensor Technology and Applications III, Vol. 5589, pp. 154-163, Philadelphia, Oct. 2004

9. Zuyuan He, Soshi Yoshiyama, Momoyo Enyama, and Kazuo Hotate, “Reflectivity precision improvement in optical reflectometry by synthesis of optical coherence function,” Proc. 9th Opto-Electronics and Communications Conference / 3rd International Conference on Optical Internet (OECC/COIN2004), pp. 684-685, Yokohama, July 2004
10. Momoyo Enyama, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Expansion of spatial measurement range by use of vernier effect in fiber Bragg grating strain sensing system with synthesis of optical coherence function,” Proc. 9th Opto-Electronics and Communications Conference / 3rd International Conference on Optical Internet (OECC/COIN2004), pp. 678-679, Yokohama, July 2004
11. Zuyuan He, Chia-Chen Chang, Jun Bao, Wenxin Zheng, Erin Sahinci, and Waqar Mahmood, “Measurement and modeling of Raman gain profile in wavelength-division-multiplexed systems,” Proc. 9th Opto-Electronics and Communications Conference / 3rd International Conference on Optical Internet (OECC/COIN2004), pp. 668-669, Yokohama, July 2004
国内研究会論文：
12. 樊昕昱 , 水野洋輔，何祖源 , 保立和夫 , “ エルビウム添加ファイバにおけるダイナミックグレーティングを用いた光波コヒーレンス関数の合成法による帯域可変光フィルタ ,” 電子情報通信学会光エレクトロニクス研究会，東京，2005 年 2 月
13. 樊昕昱 , 何祖源 , 保立和夫 ,“ 偏波維持エルビウム添加ファイバにおけるダイナミックグレーティングを用いた分布型光ファイバ歪センシング ,” 応用物理学会第 34 回光波センシング技術研究会講演論文集，pp. 25-30, 東京，2004 年 12 月
14. 何祖源 , 吉山総志，圓山百代，保立和夫 ,“ コヒーレンス関数合成型光リフレクトメトリにおける反射率分解能の改善 ,” 応用物理学会第 34 回光波センシング技術研究会講演論文集，pp. 59-62, 東京，2004 年 12 月
15. 何祖源 , 堀江信吾 , 圓山百代 , 保立和夫 , “ 光波コヒーレンス関数の合成による偏波維持光ファイバ側圧センサの片端入力・測定 ,” SICE 第 21 回センシングフォーラム予稿集，pp. 249-253, 東京，2004 年 9 月
16. 何 祖源 , コン　ユーティン，柏木正浩，保立和夫 , 吉国裕三 , “ 光波コヒーレンス関数合成法による光コヒーレンストモグラフィと光ドップラートモグラフィ ,” 応用物理学会第 33 回光波センシング技術研究会講演論文集，pp. 17-22, 東京，2004 年 6 月
17. 圓山百代，何祖源 , 保立和夫 , “ 光波コヒーレンス関数の合成法によるファイバブラッググレーティング歪センシングシステムにおける Vernier 効果を用いた空間的測定レンジの拡大 ,” 応用物理学会第 33 回光波センシング技術研究会講演論文集，pp. 23-28, 東京，2004 年 6 月
国内大会発表：
18. 何祖源，水野洋輔，樊昕昱，保立和夫 , “ エルビウム添加ファイバにおけるダイナミックグレーティングの反射特性の帯域制御 ,” 第 52 回応用物理学関係連合講演会 , さいたま , 2005 年 3 月
19. 樊昕昱 , 何祖源 , 保立和夫 , “ エルビウム添加ファイバにおけるダイナミックグレーティングの実験研究 ,” 電子情報通信学会ソサイエティ大会 , 徳島 , C-3-35, p. 167，2004 年 9 月
20. Momoyo Enyama, Zuyuan He, and Kazuo Hotate, “Expansion of spatial measurement range by use of vernier effect in fiber Bragg grating strain sensing system with synthesis of optical coherence function,” Proc. SICE Annual Conference 2004, pp. 536-539, Sapporo, Aug. 2004

■ **Hu Jie 胡　潔** (お茶の水女子大学・博士＜文学＞：名古屋大学大学院国際言語文化研究科助教授：1998 年度奨学生)
論文：
1.「白詩の女性題材と『源氏物語』」『比較文化研究年報』、盛岡大学比較文化研究所・第 14 号　173 頁～ 184 頁、2004 年 3 月
2.「長恨歌」と「桐壺」巻、国際日本文学研究報告書 3 『海外における源氏物語の世界－翻訳と研究－』、伊井春樹編、150 頁～ 171 頁、風間書房、2004 年 6 月
研究発表：
1.「古代日本における中国の家族制度の摂取と変容」第 37 回国際アジア・北アフリカ研究会議 [ICNANS]、2004 年 8 月

■ **Husel フスレ** (東京外国語大学＜地域文化＞：昭和女子大学非常勤講師：2003 年度奨学生)
論文：
1.「1945 年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助――その評価の歴史――」『SGRA』No.23, pp.1-27, 関口グローバル研究会 , 2004 年 10 月 .

2.「テグス氏がかたる内モンゴル現代史」『日本とモンゴル』第 39 巻第 1 号（No.109）, pp.99-110, 2004 年 10 月 .
学会報告：
1.「日文文献中所記載的内蒙古人民革命党」, 第 4 回内モンゴル大学モンゴル研究国際シンポジウム , 中国・内モンゴル・フフホト市 , 2004 年 8 月 16 ～ 20 日 .
2.「内モンゴルにおける土地政策の変遷」, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム総合シンポジウム「グローバリゼーションと多文化的想像力」, 東京外国語大学 , 2005 年 1 月 28 日 .
3.「内モンゴルに対する中国共産党・国民党の政策（1945 ～ 49 年）」, 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「 史資料ハブ地域文化研究拠点 」若手研究者助成研究報告会 , 東京外国語大学 , 2005 年 2 月 7 日 .
訳著：
1. 山口啓二著 , 呼斯勒他訳『鎖国与開国』, pp.1-3, 40-67, 73-270, 内蒙古人民出版社 , 2004 年 11 月 .

■ **Iko Pramudiono イコ　プラムディオノ** (東京大学・博士＜電子情報工学＞：ＮＴＴ情報流通プラットフォーム研究所：2002 年度奨学生)
1. P. Iko, M. Kitsuregawa. FP-tax: Tree Structure Based Generalized Association Rule Mining. In Proc. of The 9th ACM SIGMOD Workshop on Research Issues in Data Mining and Knowledge Discovery (DMKD04), 2004.
2. 高橋克巳、Iko Pramudiono、喜連川優、位置指向の Web ログマイニング 夏のデータベースワークショップ (DBWS)2004
3. イコ プラムディオノ、喜連川優、木構造を用いた並列頻出パターンマイニングにおける動的負荷分散機構、夏のデータベースワークショップ (DBWS)2004
4. Iko Pramudiono, Katsumi Takahashi, Anthony K.H. Tung, Masaru Kitsuregawa Processing Load Prediction for Parallel FP-growth データ工学ワークショップ (DEWS)2005

■ **Jeon Jin Hwan 全　振煥**（東京工業大学・博士＜工学＞：鹿島建設 (株) 技術研究所主任研究員：2001 年度奨学生）
1. 全振煥、笠井浩、矢崎英章、趙貞基：超速硬セメントを用いた補修モルタルの現場適用性の検討（Examination of Applicability of Repair Mortarusing Very High Early Strength Cement）、韓国コンクリート学会秋季学術大会論文集、2004. 11、pp.309-312.
2. 笠井浩、全振煥、藤森啓祐、和美廣喜、富岡一則、藤木英一：石炭灰をリサイクルした人工軽量骨材コンクリートのポンプ圧送性、建築学会大会学術講演梗概集 [A]、2004、8、pp.81-84.
3. 渡辺茂雄、稲葉洋平、笠井浩、全振煥、和美廣喜：石炭灰人工骨材を用いたコンクリートのひび割れ抵抗性評価実験（その 1　実験計画及び材料特性結果）、建築学会大会学術講演梗概集 [A]、2004、8、pp.115-116.
4. 稲葉洋平、渡辺茂雄、笠井浩、全振煥、和美廣喜：石炭灰人工骨材を用いたコンクリートのひび割れ抵抗性評価実験（その 2　実験結果及び考察）、建築学会大会学術講演梗概集 [A]、2004、8、pp.117-118.
5. 全振煥、笠井浩：石炭灰人工骨材を用いた高強度コンクリートの耐火基礎実験、建築学会大会学術講演梗概集 [A]、2004、8、pp.119-200.
6. 今井謙吾、川口慶一郎、二木梨香、和美廣喜、全振煥、笠井浩：石炭灰人工軽量骨材によるコンクリートの収縮低減効果に関する研究、建築学会大会学術講演梗概集 [A]、2004、8、pp.321-322.

■ **Jiang Susu 江　蘇蘇**（横浜国立大学＜物理情報工学＞：2005 年度奨学生）
Reviewed Journal Papers：
1. Susu Jiang, Ryuji Kohno, ”A New Space-Time Multiple Trellis Coded Modulation Scheme for Flat Fading Channels,” IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E87-A, No.3,pp.640-648, 2004.3.
2. Susu Jiang, Ryuji Kohno, “A New Space-Time Multiple Trellis Coded Modulation Scheme Using Transmit Symbol Phase Rotation”,Wireless Personal Communications Journal from Kluwer Academic Publishers,
International Conference Papers：
1. Susu Jiang, Ryuji Kohno,”A New Space-Time Multiple Trellis Coded Modulation Scheme for Flat Fading Channels,” The Seventh International Symposium on Wireless Personal Multimedia Comunications 2004 (WPMC 2004), Abano Terme (Italy), pp.V3-26, 2004.9.
2. Susu Jiang, Ryuji Kohno,”Higher Transmit Rate Space-Time Multiple Trellis Coded Modulation Utilizing Space-Time Block

Codes," International Symposium on Information Theory and its Applications (ISITA 2004), Parma (Italy), pp.346-349, 2004.10.

■ **Jie Chi Yang 楊　接期** (東京工業大学・博士＜教育工学＞：国立中央大学資訊工程系助理教授：1999 年度奨学生)
Journal papers：
1. Yang, J. C., Ko, H. W., & Chung, I. L. (2005). Web-based Interactive Writing Environment: Development and Evaluation. Journal of Educational Technology & Society. (Accepted)
2. Liang, J. K., Liu, T. C., Wang, H. Y., Chang, L. J., Deng, Y. C., Yang, J. C., Chou, C. Y., Ko, H. W., Yang, S., & Chan, T. W. (2005). A Few Design Perspectives and Studies on 1:1 Educational Computing Inside the Classroom. Journal of Computer Assisted Learning. (Accepted)
3. Chan, T. W., Yang, J. C., and Chang, C. K. (2004). Adoption-Based Design of Content Examples, Information, Technology and Educational Change (ITEC). (Accepted)
4. Yang, J. C., Chen, C. H., & Huang, S. C. (2004). Using PDA in science experiments in elementary school. Electronic Journal of ROC Association of E-Learning, Vol. 2. In Chinese.
Conference papers：
5. Yang, J. C., & Ko, H. W. (2004, December). Design and Development of a Web-based Writing Environment. In Proceedings of the International Conference on Computers in Education (ICCE 2004). Melbourne, Australia. 1855-1860.
6. Chen, C. H., Ku, L. C., & Yang, J. C. (2004, December). A Study of a Classroom-based Children Reading Environment Using Goal Setting Theory. In Proceedings of the International Conference on Computers in Education (ICCE 2004). Melbourne, Australia. 879-885.
7. Huang, S. C., Chen, C. H., & Yang, J. C. (2004, June). Development of a Mobile Learning Environment for Science Experiments in Elementary School. In Proceedings of the 8th Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2004). Hong Kong, China. 739-746. In Chinese. [Best Paper Award]
8. Chen, C. H., Ku, L. C., & Yang, J. C. (2004, June). Evaluation of a Children Reading Environment in Classroom Based on Goal Setting Theory. In Proceedings of the 8th Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2004). Hong Kong, China. 577-580. In Chinese.
9. Chan, W. T., Chen, C. H., & Yang, J. C. (2004, June). Evaluation of a Physics Experimental Learning System Integrated with Data Logger. In Proceedings of the 8th Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2004). Hong Kong, China. 248-255. In Chinese.
Technical reports：
10. Yang, J. C. (2004, December). Design and Evaluation of a 3D Simulation Online Learning Environment. In Chinese.

■ **Kim Bumsu 金　範洙**（東京学芸大学＜学校教育学―社会系教育 (歴史) ＞：2005 年度奨学生）
1. 翻訳書：金範洙、李憲昶、国際共同『韓国経済通史』法文社、1999 年（ソウル）〔訳〕、法政大学出版局、2004 年 3 月
2. 論文：金範洙「旧韓末留学生監督に関する一考察－留学生監督申海永を中心に－」、『朝鮮学報』第 191 輯、pp.77-106、2004 年 4 月
3. 報告書：国内共同「近代在日朝鮮人留学生に関する調査研究」(研究代表者：馬淵貞利)、平成 15 年度東京学芸大学連合大学院広域科学教科教育学研究経費、2004 年 8 月
4. 研究発表：金範洙「在日朝鮮人留学生運動再考」、韓国社会科教育研究会 2004 年度国際学術調査・共同学術会、大阪教育大学、2005 年 2 月

■ **Kim Woesook 金　外淑**（早稲田大学・博士＜健康科学＞：兵庫県立大学看護学部心理学系助教授（在神戸）：1997 年度奨学生)
著書：
1. 金外淑　2004　心身症患者のストレスマネジメント　ストレスマネジメント実践マニュアル .　坂野雄二（監修）、嶋田洋徳、鈴木伸二（編）. 149-161.
翻訳：

2. 金外淑（訳）2005 認知行動治療　韓国ハナ医学社 . 1-221.（坂野雄二　1995　認知行動療法　日本評論社）
研究論文：
3. 金外淑　2004　糖尿病と行動療法　心療内科　科学評論社 . Vol.3.No1　317-327.
4. 金外淑　2005　行動決定の認知・行動理論―患者はなぜそのような行動をするのかー . 糖尿病診療マスター . Vol.3, No1,31-37.
その他：
5. 金外淑　2004　日本･韓国におけるうつ病の臨床的特長　ACCESS. 20（2）No113, 28-29.
6. 金外淑　2004　生活習慣病患者を対象とした認知行動的介入による心理教育的プログラム作成（患者用・治療者用）.　兵庫県特別研究 .
7. 金山文子・土江孝子・長澤君子・湯川悦子・権田龍子・成田康子・金外淑　2004　がん専門病院の新人看護職の職場適応のための効果的な教育プログラム作成　兵庫県立大学共同研究 .
研究発表（学会）：
8. 金外淑・松野俊夫・村上正人　2004　認知的介入による強迫性障害患者の一例　第 45 回日本心身医学会総会　北九州国際会議場 .
9. Kim, W.S. Murakami, M. & Matsuno, T. 2004　A CASE STUDY IN THE APPLICATION OF COGNITIVE RESTRUCTURING BY PSYCHOEDUCATIONAL APPROACH TO THE PATIENT WITH MIXED ANXIETY AND DEPRESSIVE DISORDER. World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies (kobe, JAPAN).
10. Kim, W.S. Murakami, M. & Matsuno, T. 2004 Early effect of Milnacipran for chronic pain of Fibromyalgia Syndrome. The 11th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine(Okinawa,JAPAN).
11. 金外淑　2004　生活習慣病患者を対象とした認知行動的介入による心理教育的プログラムの開発　2004 年度兵庫県特別研究会 .
12. 金外淑・松野俊夫・村上正人 2004 うつ状態を伴う血糖コントロール不良患者へ認知行動的介入の一例 第 13 回関西こう行動医学会（神戸大学医学部神緑会館）.
13. 金山文子・土江孝子・長澤君子・湯川悦子・権田龍子・成田康子・金外淑　2004　新卒看護職の職場適応について～新人看護職の職場適応のための効果的な教育プログラムの検討～　兵庫県立大学共同研究 .
14. 金外淑　2005　全般性不安障害患者への認知行動的介入の一例　2004 年度行動療法コロキウム（北海道、札幌）.

■ **Kim Yeonkyeong 金　娟鏡**（東京学芸大学＜心理学＞：2005 年度奨学生）
1. 金娟鏡「社会的出来事によって喚起される母親役割の日韓比較－母親役割満足感との関連－」、家庭教育研究所紀要第 26 号、67-74、2004 年 12 月
2. 金娟鏡･福富護「子育て期の女性のアイデンティティの確立に関する日韓比較－妻役割, 母親役割, 職業を中心にみた様相－」、東京学芸大学紀要第 56 集、第 1 部門教育科学、103-111、2005 年 3 月
3. 内藤哲雄・金娟鏡「発達障害のある幼児をもつ韓国人母親の障害受容に関する PAC 分析－社会的支援体制と育児ネットワークの視点から－」、信州大学人文学部人文科学論集＜人間情報学科編＞第 39 号、11-25、2005 年 3 月

■ **Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ** (東京都立科学技術大学・博士＜工学システム＞：松下電器産業株式会社先端技術研究所主任研究員／東京都立科学技術大学客員研究教授：2001 年度奨学生)
1. V. Kostov, J. Ozawa, S. Matsuura, “Evaluation of Wearable Agent Interface for Personal Notification”, Journal of Human Interface Society, pp.83-90, Vol. 7, No. 1, 2005.
2. V. Kostov, J. Ozawa, S. Matsuura, “Analysis of Wearable Interface Factors for Appropriate Information Notification”, IEEE ISWC 2004, Eighth IEEE International Symposium on Wearable Computers, pp. 102-109, Oct. 2004, Washington DC, USA.
3. V. Kostov, J. Ozawa, S. Matsuura, “Wearable Accessory Robot for Context Aware Apprise of Personal Information”, IEEE RO-MAN 2004 - 13th IEEE International Workshop on Robot and Human Interactive Communication, pp. 595- 600, Sep. 2004, Okayama, Japan.

■ **Lee Jea Woo 李　済宇**（早稲田大学＜建設工学＞：早稲田大学理工学研究科助手：2004 年度奨学生）
1. “An experimental study on earthquake fault rupture propagation through a sandy soil deposit,” Journal of Structural

Mechanics and Earthquake Engineering, JSCE, Vol.22, No.1, pp.1~13, 2005, January, Jea Woo LEE and Masanori HAMADA
2. “Prediction of Fault Rupture Propagation Based on Physical Model Tests in Sandy Soil Deposit,” Proceeding of 13th World Conference on Earthquake Engineering, IAEE, Paper No. 119, Aug. 2004, Jea Woo Lee, M. Hamada, G. Tabuchi, K. Suzuki
3. “Centrifuge modeling of fault rupture propagation through a dry sand,” 第 5 回構造物の破壊過程解明に基づく地震防災性向上に関するシンポジウム論文集 , 土木学会 , pp. 293 ～ 298. 2004. 3., Jea Woo LEE, G. Tabuchi, K. SUZUKI and M. HAMADA,

■ **Lee Sung Young 李　承英**（筑波大学・博士＜応用言語学＞：慶北大学校日語日文学科非常勤講師 (在大邱)：2004 年度奨学生）
1.「玉塵抄における韻書」『言語学論叢』23 筑波大学一般・応用言語学研究室 2004 年 12 月
2. 室町期抄物における「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ」「名目ヅカイ」―用語の分布と意味―　『日本語の研究』第 1 巻 1 号 (『国語学』通巻 220 号) 日本語学会 2005 年 1 月

■ **Li Enmin 李　恩民** (一橋大学・博士＜社会学＞：桜美林大学国際学部助教授：1997 年度奨学生)
著書：
1. 財団法人政治経済研究所編『中国はどこに向かうのか』、平成 16 年（2004 年）4 月、財団法人政治経済研究所・東京、A 4 判 全 178 頁、分担執筆：李恩民「中国の『世論』」（pp.1 ～ 14）「農村」（pp.139 ～ 148）
2. 李恩民著『「日中平和友好条約」交渉の政治過程』、平成 17 年（2005 年）2 月、御茶の水書房・東京、B 5 判 全 270 頁
学術論文：
1. 李恩民「外交文書に見る周恩来の対日平和外交戦略」、『桜美林大学産業研究所年報』第 23 号、2005 年 3 月

■ **Li Ganzhe 李　鋼哲** (立教大学＜経済学＞：総合研究開発機構 (NIRA) 主任研究員 / 黒龍江大学教授：1999 年度奨学生）
著書：
1.『北朝鮮年鑑』（2002,2003 年版）2004.11 東アジア総合研究所、執筆：「日朝首脳会談、平壌宣言と中朝関係」
論文：
1. The Paradigm Change of Regional Cooperation in Northeast Asia and Financial Cooperation, Economic Research Center, Nagoya University, DISCUSSION PAPER, Aug, 2004）
2. “The Paradigm Change of Regional Approach in Northeast Asia and Financial Cooperation.” 山东大学东北亚研究中心 , 东北亚经济合作峰会论文集 2004 年 10 月 (中国).(北京経済科学出版社で 05 年 5 月出版予定)
3.「世界の一極としてのダイナミックな東北アジア―‘協力’から‘統合’へのパラダイム転換―」① 2004.12『NIRA 政策研究』（月刊）Vol.17 No.12.　② 2005.2『NIRA 政策研究』（月刊）Vol.18 No.2
4.「図們江開発地域の現地視察報告」2004.12『NIRA 政策研究』（月刊）Vol.17 No.12.
5.「中国化するモンゴル経済と発展への課題」2005.2『NIRA 政策研究』（月刊）Vol.18 No.2.
6.「東アジア共同体に向けて―新しいアジア人意識の確立」2005.3　日本講演会『日本講演』No.1547.（未来構想フォーラム講演録）
7.「２１世紀の東北アジア経済統合と日中韓の役割」2005.3　韓国国民大学日本研究所『東北アジア地域協力体樹立の理論、現実、戦略』国際シンポジウム論文集
評論・コラム他：
1.「モンゴルの東北アジア協会と協力可能」2004.10.16『デイリー・ニューズ』（モンゴル国）インタビュー記事
2.「平和国家モンゴルに学ぶ」2004.11.27『朝日新聞』コラム
3.「東北アジア共同体に夢を抱く「東北アジア人」：私のアイデンティティ」2005.3　連載「東北アジア人が語るストーリー」①『セヌリ』（在日同胞、月刊誌、東京）
4.「東北アジア人が語るストーリー：第 1 話」月刊『セヌリ』2005.4 月号
5.「図們江地域投資サービス（TRIS）ネットワーク国際会議」『ERINA REPORT』2005.Vol.63(5 月号)

■ **Liang Xingguo 梁　興国**（東京大学・博士＜化学生命工学＞：ボストン大学先端バイオテクノロジー・センター：2001 年度奨学生）
1. Liang, X.G.; Jensen, K.; and Frank-Kamenetskii, M.D. Very Efficient Template/primer-independent DNA synthesis by thermophilic DNA polymerase in the presence of a thermophilic restriction endonuclease. Biochemistry 2004, 43,

13459-13466.6.

■ **Lim Chuan Tiong 林　泉忠** (東京大学・博士＜国際政治＞：琉球大学法文学部助教授：2000 年度奨学生)
著書：
1. 林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクス：沖縄・台湾・香港』明石書店、2005 年 2 月 28 日
論文：
1. 林泉忠「沖縄アイデンティティの十字路 :「祖国復帰」と「反復帰」のイデオロギー的特徴を中心に」『政策科学・国際関係論集』第 6 号、琉球大学法文学部、2003 年、59-115 頁
2. 林泉忠「一国」VS「二制度」の力学 :「終審権論争」から観た「香港人」帰属意識のイデオロギー基盤『琉大アジア研究』琉球大学アジア研究施設、2005 年 3 月、1-29 頁

■ **Lin Shaoyang 林　少陽** (東京大学＜総合文化言語情報科学＞：東京大学大学院総合文化研究科助手：2003 年度奨学生)
著書：
1.『＜文＞与日本的現代性』 北京：中央編訳出版社、2004 年 7 月、375p.
学術論文：
1.「日本的ポストモダン思潮の社会的コンテクストと理論的なコンテクスト――中国の視点において」『日本思想史研究』第 3 号、東京大学日本思想史・思想史論研究会、2004 年 3 月、pp.198 － 226
2.「朗誦体詩と中国新詩の言語の問題――思想史的な文脈において」『九葉読詩会』創刊号、2004 年 4 月、駒沢大学・九葉読詩会、pp.75 － 91
3.「＜文＞的思想史」『読書』＊ 2004 年 7 月号、北京：三聯書店、2004 年 7 月、pp.124 － 131
4.「中国近現代文学史叙述の問題 ――「第三代詩」という用語をめぐって」『藍 BLUE』(中日両語文芸誌)(総 17 号)、2005 年 2 月、240 － 248 頁

■ **Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ** (東京医科歯科大学・博士＜公衆衛生学＞：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員：2001 年度奨学生)
International Journals and Domestic Journals：
1. Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Tetsuji Yokoyama, Kyoko Saito, Chigusa Date, Heizo Tanaka. The relationship between plasma total homocysteine and selected atherosclerotic risk factors according to the C677T methylenetetrahydrofolate reductase gene in Japanese. Eur J Cardiovasc Prev Rehabil. 2005 Apr;12(2):182-184.
2. Tetsuji Yokoyama, Kyoko Saito, Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Akio Yamamoto, Yumi Matsushita, Chigusa Date, Heizo Tanaka. Epidemiological Evidence that Acetaldehyde Plays a Significant Role in the Development of Decreased Serum Folate Concentration and Elevated Mean Corpuscular Volume in Alcohol Drinkers. (In press, Alcoholism: Clinical and Experimental Research).
3. Htay Lwin, Tetsuji Yokoyama, Nobuo Yoshiike, Kyoko Saito, Chigusa Date, Akio Yamamoto, Heizo Tanaka. Effects of daily smoking on plasma total homocysteine and B-vitamins levels in Japanese men. Journal of Epidemiology. 2005;15(1):204.
4. Htay Lwin, Tetsuji Yokoyama, Kyoko Saito, Nobuo Yoshiike, Chigusa Date, Akio Yamamoto, Wakako Kushiro, Heizo Tanaka. Plasma Total Homcysteine and Alcohol Consumption in Japanese Men. 63th Japan Public Health Conference, Shimane, Japan, Oct 29-31, 2004. Japanese Journal of Public Health. 2004; 51(10):514.
5. Kyoko Saito, Tesuji Yokoyama, Htay Lwin, Nobuo Yoshiike, Ayako Nakayama, Wakako Kushiro, Chigusa Data, Akio Yamamoto, Heizo Tanaka. Comparison of the Amount of the Alcohol Drinking of 24 hour Recall and Self Recording Questionnaire by flushing. Japanese Journal of Public Health. 2004;51(10):

■ **Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット**（慶応義塾大学＜環境デザイン＞：2004 年度奨学生）
1. Parallel Activities of Kiokazu Arai 2004.10 "AV " Moscow2. Kionori Kikutake - the legend of architectural metabolism 2004.11."CH" Moscow 3. Japanese contemporary house 2005.2 "AV " Moscow 4. Second Conferense for PLANNING and NETWORKING of HISTORICAL CITIES in EASTERN and CENTRAL ASIA Historical cities of Middle and East Asia. (Samarkand. Uzbekistan 01-02.04.2005)

Theme: "Urban Development on Middle Asia Region by way of Railway Construction in 1950's"

■ **Napoleon ナポレオン**（東京工業大学＜機械制御システム＞：株式会社ヤマタケ研究所：2004 年度奨学生）

1. Napoleon Nazir, 中浦茂樹，三平満司：" 人間型ロボットの ZMP フィードバック制御における制御性能の限界 "，日本ロボット学会誌，Vol. 22, No. 5, 2004.
2. 伊豆裕樹，Napoleon Nazir, 中浦茂樹，三平満司：" 人間型ロボットの足裏コンプライアンスを考慮した ZMP 制御によるバランス安定化 "，計測自動制御学会 制御部門大会，北九州，2004 年 5 月
3. Napoleon Nazir, Hiroki Izu, Shigeki Nakaura, Mitsuji Sampei : "An Analysis of ZMP Control Problem of Humanoid Robot considering Compliances in Sole of the Foot". 16th IFAC World Congress, Praha, 2005.

■ **Park Young June 朴　栄濬**（東京大学・博士＜国際関係論＞：韓国国防大学校安全保障大学院助教授：2002 年度奨学生）

1. 朴栄濬、「日本経済危機の展開過程比較 :1930 年代と 1990 年代を中心に」、『1990 年代の構造不況と日本政治経済システムの変化』(ソウル：ハヌルアカデミ , 2005.1)
2. 朴栄濬、「脱冷戦期における中日間の勢力競争と東アジア国際秩序」、国防大学校 安保問題研究所編『主要国防政策と争点』(ソウル：国防大学校 ,2004.12)
3. 朴栄濬、「日本の対米同盟政策 : 同盟漂流と同盟再定義過程を中心に」、韓ヨン燮 編 ,『自主か同盟か』(ソウル : オルム , 2004.12)
4. 朴栄濬、「戦前における日本自由主義者の国家構想と東アジア : 石橋湛山の小日本主義」、現代日本学会年例学術会議資料集 ,『東アジア国際秩序と日本』(ソウル : 現代日本学会 ,2004.11)
5. 朴栄濬、「21 世紀日本軍事体制の変化要因と展開様相 : 軍国主義或は右傾化の談論を越えて」、『教授論叢』第 37 集 (ソウル：国防大学校 , 2004.8)
6. 朴栄濬、「日ロ戦争の直後における日本海軍の国家構想と軍事戦略論 : 佐藤鉄太郎の『帝国国防史論』(1908) の場合」、『韓国政治外交史論叢』第 26 集 1 号 (2004 年 8 月)
7. 朴栄濬、「失われた十年期における日本政治勢力の国家構想 :「普通の国」論と平和国家論の比較」、東アジア研究団発表資料集『世界化の挑戦と東アジアの選択』(2004.5)

■ **Ren Yong 任　永**（群馬大学・博士＜医学＞：ニューヨーク州立大学医学部研究員：2000 年度奨学生）

Published papers：

1. Yang Fang, Jiang Qian, Zhao Jinghui, Ren Yong, Sutton MD, Feng Jian. Parkin stabilizes microtubules through strong binding mediated by three independent domains. The Journal of biological chemistry. 2005 Feb 28; [English]
2. Chiye Aoki, Yuko Sekino, Kenjihanamura, Sho Fujisawa, Veeravan Mahadomrongkul, Yong Ren, and Tomoaki Shirao, Drebrin A Is a Postsynaptic Protein That Localizes In Vivo to the Submembranous Surface of Dendritic Sites Forming Excitatory Synapses. The Journal of Comparative Neurology, 2005 Mar 21; 483 (4):383 –402. [English]
3. Houbo Jiang, Yong Ren, jinghui Zhao, Jiang Feng. Parkin protects human dopaminergic neuroblastoma cells against dopamine-induced apoptosis. Hum Mol Genet. 2004 Aug 15;13(16):1745-54. [English]
4. Daniel Gitler, Yoshiko Takagishi, Jian Feng, Yong Ren, Ramona M. Rodriguiz, William C. Wetsel, Paul Greengard, and George J. Augustine. Different Presynaptic Roles of Synapsins at Excitatory and Inhibitory Synapses. The Journal of Neuroscience, 2004 Dec 15; 24(50):11368 –11380. [English]

Academic Conference Presentations/Abstracts：

1. Yong Ren, Wenhua Liu, HouBo Jian, Jian Feng. Rotenone and parkin Act Antagonistically on Microtubules to Affect the Survival of Dopaminergic Neurons. American Society for Cell Biology, 44th Annual Meeting. 2004 Dec. Program No. 122-292. In Washington D.C. USA.
2. Qian Jiang, Yong Ren, Jian Feng. Neurotrophins Protect Against Rotenone Toxicity on Dopaminergic Neurons Through a Microtubule-Dependent Mechanism. Society for Neuroscience, 34th Annual Meeting. 2004 Oct. Program No. 222.6 (Abstract). In San Diego, USA.
3. Houbo Jiang, Yong Ren, Jinghui Zhao, Jian Feng. Parkin Protects Human Dopaminergic Neuroblastoma Cells Against Dopamine-Induced Apoptosis. Society for Neuroscience, 34th Annual Meeting. 2004 Oct. Program No. 1013.4 (Abstract). In

San Diego, USA.
4. Chiye Aoki, Yuko Sekino, Kenjihanamura, Sho Fujisawa, Veeravan Mahadomrongkul, Yong Ren, and Tomoaki Shirao, Drebrin A Is a Postsynaptic Protein That Localizes In Vivo to the Submembranous Surface of Dendritic Sites Forming Excitatory Synapses. Society for Neuroscience, 34th Annual Meeting. 2004 Oct. Program No. 612.1 (Abstract). In San Diego, USA.

■ **Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ**（東京大学＜宗教史学＞：富坂キリスト教センター研究主事：2004 年度奨学生）
1. "Christian education in the sign of the covenant --The case of Aishin High School in western Japan," in Japanese Religions,2004
2.「キリスト再臨運動 -- 近代日本における合理性と救済をめぐる言説」、『内村鑑三研究』、第三十八号、2004
3.「東京自転車物語」、『だから日本を選んだ』、渥美国際奨学財団十周年記念出版、2004

■ **Sri Sumantyo,Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトォコ** (千葉大学・博士＜人工システム科学＞：千葉大学環境リモートセンシング研究センター助教授：2001 年度奨学生)
著書：
1. J.T. Sri Sumantyo and K. Ito, Method of Moment to Analyze Antennas, ITB Press, ISBN 979-3507-23-3, May 2004 (58 pp).
2. J.T. Sri Sumantyo, K. Ito, E.T. Rahardjo, and K. Saito, Finite Difference Time Domain, ITB Press, ISBN : 979-3507-28-4, September 2004 (187 pp).
査読付論文：
1. J.T. Sri Sumantyo and K. Ito, "Simple satellite-tracking dual-band triangular-patch array antenna for ETS-VIII applications," Radiomatics - Journal on Communications Engineering, 2004 (in press : accepted on 16 December 2004)
2. J.T. Sri Sumantyo, K. Ito, D. Delaune, T. Tanaka, T. Onishi, and H. Yoshimura, "Numerical analysis of ground plane size effects on patch array antenna characteristics for mobile satellite communications," International Journal of Numerical Modelling, Vol. 18, No. 2, pp. 95-106, March /April 2005 (London: Wiley)
3. J.T. Sri Sumantyo, and R. Tateishi, "A technique to analyse scattered waves from rough burnt coal seam and its application to estimate thickness of fire scars in central Borneo using L-Band SAR data," Journal of Japan Society of Photogrammetry and Remote Sensing, Vol. 43, No. 6, pp. 48-61, January 2005 (Tokyo: JSPRS)
4. Hussam Al-Bilbisi, Tateishi Ryutaro, and J.T. Sri Sumantyo, "A technique to estimate topsoil thickness in arid and semi-arid area of north eastern Jordan using synthetic aperture radar data," International Journal of Remote Sensing, Vol. 25, No. 19, pp. 3873-3882, 10 October 2004 (London: Taylor and Francis)
5. D. Delaune, T. Toshimitsu, T. Onishi, J.T. Sri Sumantyo, and K. Ito, "A Simple Satellite-Tracking Stacked Patch Array Antenna for Mobile Communications Experiments Aiming at ETS-VIII Applications," IEE Proceeding Microwave. Antennas Propagation, Vol. 151, No.2, pp. 173 - 179, April 2004 (London: IEE)
特許：
1. J. Sri Sumantyo and K. Ito, Triangular microstrip line antenna for mobile satellite communications (Japan patent and International patent) (submitted)

■ **Sun Jianjun 孫　建軍**（国際基督教大学・博士＜日本語学＞：北京大学外国語学院日本言語文化学部講師（在北京）：2002 年度奨学生）
1. 西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界 -- １９世紀中頃までの漢訳洋書を中心に、国際日本文化研究中心紀要『日本研究』第 30 集、2005/03/25
2. 新漢語「国際」の成立、『日本語教育学の視点』東京堂出版、2004/09/25
3.「露西亜」という漢字表記の成立、『アジアにおける異文化交流』明治書院、2004/03/06

■ **Tenegra Brenda Resurecion Tiu テネグラ ブレンダ レスレション ティウ**（お茶の水女子大学＜人間発達科学＞：2005 年度奨学生）
1. 伊藤るり、小ヶ谷千穂、ブレンダ・テネグラ、稲葉奈々子「いかにして『ケア上手なフィリピン人』はつくられるか？―ケアギバーと再生産労働の『国際商品』化」、『お茶の水女子大学 F-GENS ジャーナル』3 号、2005 年 3 月、269-278 頁
2. Tenegra, Brenda Resurecion「Enfranchising the Remitters：An Ambivalent Renationalization of the Overseas Filipinos」『お

茶の水女子大学人間文化論叢』第 7 巻、2005 年 3 月（印刷中）

■ **Tisi, Maria Elena ティシ、マリア　エレナ**（白百合女子大学＜児童文学＞：白百合大学児童文化研究センター研究員：2003 年度奨学生）

1.“Le letture nelle scuole elementari : Zukkoke sanningumi, una popolarità che continua”Atti del XXVII Convegno di Studi sul Giappone（「小学校高学年の児童が好きな本―「ズッコケ三人組」シリーズー」『伊日研究学会第 27 回研究会、2003 年 9 月 18 日～ 20』）Cartotecnica Veneziana Editrice, Venezia, 2004, pp.395-409

2.「“ ピノッキオ ” と子どもの権利」『白百合児童文化 XIII』白百合女子大学児童文化学科、2004 年春、pp. 51-53

■ **Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア**（ハイデルベルク大学・博士＜美術史＞：ハイデルベルグ大学哲学部美術史学科教授：1996 年度奨学生）

1. Review: “ANDREW M. WATSKY. Chikubushima: Deploying the Sacred Arts in Momoyama Japan, Seattle: University of Washington Press, 2004. 368 pp.; 64 color ills.; 86 b/w. $45.00,” in Art Bulletin 87:2 (Summer 2005), forthcoming.

2. “Appell an den Kriegsgott: Ikonographische Innovationen im Dienst politischer Rivalität,” in Pfetsch, Frank R., Hg.: Konflikt, Heidelberger Jahrbücher, 2004, 255-277.

■ **Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン**（東京工業大学＜数理・計算科学＞：2005 年度奨学生）

1 Cong Vo, Akiko Takeda and Masakazu Kojima，A multilevel parallelized hybrid branch and bound algorithm for quadratic optimization，IPSJ Transactions on Advanced Computing Systems，Vol.45 No.SIG6 (ACS6), pp. 186-196, May 2004，社団法人情報処理学会

■ **Wang Xueping 王　雪萍**（慶応義塾大学＜政策メディア＞：2005 年度奨学生）

研究論文：

1. 王雪萍「改革開放初期中国的派遣留学生政策― 1980 年向日本派遣的 97 名本科生的追跡調査」≪徐州師範大学学報≫ 2004 年 7 月号、4-11 頁（査読付き論文）

2. 王雪萍・陳俊英・小川勝一「日本と中国の大学生の環境意識の比較研究－ 2002 年に両国 8 大学で共同実施したアンケート調査を中心に」『公益学研究』『公益学研究』（日本公益学会、2004 年、Vol3No.1）74-86 頁（査読付き論文）

3.「改革開放後の中国の留学生政策の展開－留学生派遣政策の「国家選抜」から「個人申請」へ」『東アジア社会教育研究』No. 9 2004 年 9 月、168-179 頁（査読付き論文）

4. 王雪萍「時間と空間を跨ぐ中国留学生研究の必要性－学海無涯：近代中国留学生国際シンポジウム（香港）に参加して－」『近きに在りて』第 46 号、2004 年 12 月、75 － 77 頁

著書：

1. 橋本芳一・関根嘉香・王雪萍著『日本の空　中国の森』（慶應義塾大学出版会、200 4 年）共著

2. 和気洋子・早見均編『国際間協定による温暖化対策とその実践』（慶應義塾大学出版会、2004 年）共著

3. 山田辰雄・楊治敏編『四川省の環境』（慶應義塾大学出版会、2004 年）共著

投稿：

1. 王雪萍「日本人為 sha 説不好英語」『環球時報』2004 年 5 月 10 日

2. 王雪萍「思長寿 , 学日本人吃飯」『環球時報　生命週刊』2004 年 6 月 29 日

3. 王雪萍「日校長貧汚中国学生生活費」『環球時報』2005 年 3 月 4 日

4. 王雪萍「中国随嫁小留学生問題多」『環球時報』2005 年 3 月 16 日

5. 顧力・王雪萍「什幺房子適合老人住」『環球時報　生命週刊』2005 年 3 月 22 日

6. 王雪萍「在日華人紛紛選択回国」『環球時報』2005 年 3 月 23 日

7. 王雪萍「在日華人層次越来越高」『環球時報』2005 年 4 月 1 日

8. 王雪萍「華人不願入日本国籍」『環球時報』2005 年 4 月 6 日

■ **Williams, Duncan ウイリアムス、ダンカン**（ハーバード大学・博士＜宗教学＞：カルフォルニア大学アーヴィン校東アジア仏教文化助教授：1997 年度奨学生）

1. The Other Side of Zen: A Social History of Soto Zen Buddhism in Tokugawa Japan. Princeton: “Buddhisms” Series, Princeton University Press, 2005. 241 pp.
2. The Human Force. Tokyo: Samboh shuppan, 2005. 131 pp. [Translation of “Human fosu” by Takahashi Keiko]
3. “Edo-Period Tales of the Healing Jizo Bodhisattva: A Translation of the Enmei Jizoson inko riyakuki.” Monumenta Nipponica (Vol. 59, No. 4, Winter 2004): 493-524.
4. “Esoteric Waters: Meritorious Bathing, Kobo Daishi, and Tales of Hot Spring Foundings.” In Matrices and Weavings: Expressions of Shingon Buddhism in Japanese Culture and Society--Bulletin of the Research Institute of Esoteric Buddhist Culture, Special Issue II (Oct. 2004): 195-216.
5. “Complex Loyalties: Issei Buddhist Ministers during the Wartime Incarceration.” Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies (Third Series, Vol. 5, 2004): 255-74.

■ **Yeh Wen-chang 葉　文昌**（東京工業大学・博士＜電子物理工学＞：台湾科技大学電子工程科助理教授：1999 年度奨学生）
論文：
1. Wenchang Yeh,(Invited paper) “Remarkable enlargement of excimer-laser induced lateral grain by photosensitive heat retaining layer” 1th International TFT conference, Soel, Korea, March 2005.
2. Wenchang Yeh, Yuchung Liu, Guozhao Chen, Jia-Xing Lin, Chi-Lin Chen,Yu-Chen Chen, Po-Hao Tsai, “Development of photosensitive SiOxNy film for 308nm wavelength by SiH4 based PECVD and its application to heat retaining enhanced crystallization method”, 2004 IEDMS, Dec 2004.
3. Wenchang Yeh, Guozhao Chen, Hsiangen Huang and Shenglu Lee, “Selective removal of SiOxNy semitransparent film over SiO2 film in the heat retaining enhanced crystallization method for fabrication of TFTs”, The 11th International Display Workshop (IDW04), p511.
4. Wenchang Yeh, Guozhao Chen, Yuchung Liu, Jia-Xing Lin, Chi-Lin Chen,Yu-Chen Chen, Po-Hao Tsai, “Excimer laser annealing of low temperature semitransparent silicon oxynitride gate insulator”, The 11th International Display Workshop (IDW04), p515.
5. Wenchang Yeh, Yuchung Liu, Guozhao Chen, Jia-Xing Lin, Chi-Lin Chen,Yu-Chen Chen, Po-Hao Tsai, “Development of photosensitive SiOxNy film for 308nm wavelength by SiH4 based PECVD and its application to heat retaining enhanced crystallization method”, 2004 Int’l. Workshop on Active Matrix Liquid-Crystal Displays, Tokyo, Japan, July 2004., p247.
6. Jia-Xing Lin, Chi-Lin Chen,Yu-Chen Chen, Po-Hao Tsai, Wenchang Yeh, Yuchung Liu, Guozhao Chen, “Fabrication of large-grained poly-Si thin film by heat-retaining enhanced crystallization”, 2004 Int’l. Workshop on Active Matrix Liquid-Crystal Displays, Tokyo, Japan, July 2004, p157.
特許：
日本特許 2 件申請、米特許 1 件申請、米特許 1 件取得

■ **Zhao Changxiang 趙　長祥**（一橋大学＜商学＞：2005 年度奨学生）
1. 趙長祥「海爾集団（Haier）のネットワーク組織の形成」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2004 年 4 月 5 日、第 39 巻第 4 号通巻 448 号
2. 趙長祥「“ 中国のソニー ” を目指す家電企業―海信（Hisense）集団」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2004 年 5 月 5 日、第 39 巻第 5 号通巻 449 号
3. 趙長祥「青島市におけるブランド経済発展の要因考察」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2004 年 8 月 5 日、第 39 巻第 8 号通巻 452 号
4. 趙長祥「産業集積の経済機能、形成ルートに関する考察①～青島市政府の育成事例を通じて～」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2004 年 9 月 5 日、第 39 巻第 9 号通巻 453 号
5. 趙長祥「産業集積の経済機能、形成ルートに関する考察②～青島市政府の育成事例を通じて～」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2004 年 10 月 5 日、第 39 巻第 10 号通巻 454 号
6. 趙長祥「技術開発志向の人本主義家電企業－海信（Hisense）集団の発展要因分析―」（社）経営労働協会編集の月刊誌『経営労働』、2005 年 2 月 5 日、第 40 巻第 2 号通巻 458 号
7. 西口敏宏、天野倫文、趙長祥共著「中国家電企業の急成長と国際化～中国の青島の家電企業の研究を通じて」東京大学 COE

ものづくり経営研究センター（MMRC）ディスカッションペーパー N0.18、2004 年
8. 西口敏宏、天野倫文、趙長祥共著「中国家電企業の急成長と国際化～海爾集団の研究」『一橋ビジネスレビュー』東洋経済新報社、2005 年度 3 月号、Vol.53、No1

■ **Zhu Tingyao 朱　庭耀** (東京大学・博士＜船舶海洋工学＞：（財）日本海事協会技術研究所上級研究員：1996 年度奨学生)
1. 朱庭耀、重見利幸：“ 船体構造強度評価に用いる設計荷重の開発に向けた取り組み ”、日本造船学会講演会論文集、第 3 号 , 2004.
2. 三宅竜二、溝上宗二、小川剛孝、朱庭耀、熊野厚：“ 大波高波浪中を航行する大型コンテナ船の波浪荷重に関する研究 ”、日本造船学会論文集、第 195 号 , 2004, pp. 185-194.
3. Tingyao Zhu, and Toshiyuki Shigemi: “Design Loads Used for Direct Strength Assessment of Merchant Ship Structures”, the Proceedings of the 23rd International Conference on Offshore Mechanics and Arctic Engineering, OMAE2004, Vancouver, Canada, June 2004, ASME.
4. Toshiyuki Shigemi and Tingyao Zhu: “Extensive Study on Design Loads Used for Strength Assessment of Tanker and Bulk Carrier Structures”, Journal of Marine Science and Technology, Vol. 9, No. 3, 2004, pp. 95-108, Springer.
5. Ryuji Miyake, Tingyao Zhu and Atsushi Kumano: “On the Estimation of Torsional Loads Acting on a Large-Container Ship” , the Proceeding of 25th Symposium on Naval Hydrodynamics, St. John’s, Newfoundland, Canada, August, 2004, Vol. 4, pp. 176-186, National Research Council, Washington, D.C..
6. Ryuji Miyake, Tingyao Zhu, Toshiyuki Shigemi, Kazuhiro Iijima and Atsushi Kumano: “Study on Wave-induced Torsional Loads for Practical Strength Assessment of Container Ships”, the Proceeding of 9th Symposium on Practical Design of Ships and Other Floating Structures, Luebeck-Travemuende, Germany, 2004, pp. 876-887, Seehafen Verlag.
7. Tingyao Zhu, Li Xu, Sanjay Pratap Singh and TaeBum Ha, “A Comparative Study of 3-D Methods with Experimental Results for Seakeeping Analysis”, the Proceeding of the 6th International Conference on Hydrodynamics, Perth, Australia, November, 2004, pp. 173-180, 2004, A.A. Balkenma Publishers.
8. Tingyao Zhu: “3-Dimensional Computations of Wave-Induced Wave Loads by CIP Method”, the Proceeding of the 4th Meeting of Joint Research Project in Wave Loads of the Classification Societies in Asia District, Chiba, Japan, November, 2004, pp. 43-64.

◇ 設立の趣旨について

近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、１９９３年１０月１４日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思います。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（ＩＦＡＷＰＣＡ）会長、世界建設業連盟（ＣＩＣＡ）会長、及び社団法人ＣＩＳＶ日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。ＣＩＳＶ（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに１９５１年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思います。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。

◇ ２００４年度業務日誌

４月　５日　　食事会（日中友好会館・豫園）
５月　７日　　５月例会：個人面談（１３日まで）
５月１３日　　第１５回ＳＧＲＡフォーラム「この夏、東京の電気は大丈夫？」（於：日本記者クラブ）
ＳＧＲＡレポート＃２６
２５日　　２００３年度会計監査
６月　２日　　２００３年度年報発行
３日　　第２１回理事会・評議員会（２００３年度事業報告と決算報告）・親睦会（６月例会）
７月　１日　　募集要項配布開始（関東地方の大学に通知・ホームページに掲載）
７日　　七夕ラクーン会 in 関口（７月例会）
２３日　　軽井沢リクリエーション旅行（２５日まで）
２４日　　第１６回ＳＧＲＡフォーラム in 軽井沢「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
（於：鹿島建設軽井沢研修センター）ＳＧＲＡレポート＃２７（予定）
９月　１日　　９月例会：個人面談（９日まで）
３０日　　２００５年度奨学生応募締め切り（応募者総数１７２名）
１０月　８日　　渥美奨学生の集い（１０月例会）　加藤秀樹理事講演会「中小・ローカル・ローテクが日本を作る」
９日　　２００５年度奨学生書類審査
１０月２３日　　第１７回ＳＧＲＡフォーラム
「日本は外国人をどう受け入れるべきか―地球市民の義務教育―」
（於：東京国際フォーラム）ＳＧＲＡレポート＃２８（予定）
２８日　　２００５年度奨学生候補者予備面接（１１月５日まで）
１１月１２日　　１１月例会：食事会（アフリカ料理：ローズ・ド・サハラ）
１１月２８日　　２００５年度奨学生最終選考・面接
１２月　１日　　１２月例会：個人面談（９日まで）
１月１５日　　新年会（１月例会）
２月　１日　　２月例会：個人面談（９日まで）
１６日　　第２２回理事会・評議員会（２００５年度事業計画と予算案）
１６日　　渥美国際交流奨学財団１０周年記念式典　緒方貞子氏講演会（於：鹿島ＫＩビル大会議室）
２０日　　第４回日韓アジア未来フォーラム・第１８回ＳＧＲＡフォーラム
「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」
（於：東京国際フォーラム）ＳＧＲＡレポート＃２９
３月　５日　　２００４年度奨学生研究報告会（３月例会）
２５日　　２００４年度奨学生最終食事会（ベラルーシの家庭料理：ミンスクの台所）

◇ 2004 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入		事業費	37,545,165
基本財産配当金	20,000,000	管理費	10,120,628
基本財産債券利息	10,213,494	次期繰越収支差額	60,850,014
寄附金収入			
寄附金	14,060,000		
雑収入			
運用財産受取利息	12,219		
貸与奨学金返戻収入	376,376		
前期繰越収支差額	63,853,718		
収入合計	108,515,807	支出合計	108,515,807

◇貸借対照表 (2005 年 3 月 31 日現在)

(単位：円)

資産の部		正味財産の部	
Ⅰ．流動資産		Ⅰ．基本金	
1．現金	45,557	1．基本財産	700,000,000
2．普通預金	20,804,457	Ⅱ．当期収支差額	60,850,014
流動資産計	20,850,014		
Ⅱ．固定資産			
基本財産			
1．投資有価証券	699,825,863		
2．普通預金	174,137		
基本財産計	700,000,000		
奨学資金積立基金			
定期預金	40,000,000		
固定資産計	740,000,000		
資産合計	760,850,014	正味財産合計	760,850,014

◇財団人名簿

（２００５年６月現在）

★ 理事・監事

理事長	渥美 伊都子	ＣＩＳＶ日本協会会長・日本ユニセフ協会常務理事
常務理事	今西 淳子	ＣＩＳＶピースファンド理事・関口グローバル研究会代表
理　　事	渥美 直紀	鹿島建設副社長
	井内 慶次郎	日本視聴覚教育協会会長
	片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
	加美山 節	国際基督教大学評議員
	加藤 秀樹	構想日本代表・慶應義塾大学教授（総合政策）
	黒川 光博	虎屋社長
	佐藤 直子	ナオコ・カンパニー代表
	田村 次朗	慶應義塾大学教授（法学）
	遠山 友寛	ＴＭＩ総合法律事務所パートナー（弁護士）
	永山 治	中外製薬社長
	野辺地 篤郎	聖路加国際病院顧問
	宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー（弁護士）
監　　事	石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長
	松岡 誠司	元日本債券信用銀行会長

★ 評議員

青木 生子	日本女子大学名誉教授（国文学）
明石 康	日本紛争予防センター会長
秋山 光和	東京大学名誉教授（美術史）
渥美 雅也	東京水産振興会振興部長
蟻川 芳子	日本女子大学理工学部教授（環境分析化学）
岩崎 統子	フォニックス英語研究会代表
植田 兼司	弁護士
長岡 實	東証正会員協会顧問・日本たばこ産業顧問・(財) 資本市場研究会理事長
根津 公一	東武百貨店社長
船橋 洋一	朝日新聞コラムニスト
堀田 健介	モルガン・スタンレー・ジャパン・リミテッド会長
水谷 弘	専修大学商学部教授（比較文化）
山縣 睦	山縣有朋記念館理事長・栃木産業社長
山下 英明	世界秩序研究会顧問・企業活力研究所会長
八城 政基	新生銀行代表取締役社長

付録

★ 選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学教授（産業機械工学）
	井上　博允	独立行政法人日本学術振興会監事（情報工学）
	片岡　達治	（理事）
	佐野 みどり	学習院大学教授 (美術史学)
	田村 次朗	（理事）
	平川　　均	名古屋大学教授 (経済学)

★事務局

事務局長	嶋津 忠廣
事務局	谷原 正
	伊藤　扶佐江

◇奨学生名簿

１９９５年度奨学生

Bambling, Michele バンブリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学：（在ローマ）

Gao Lingna 高　玲娜：博士（社会学）一橋大学：(在上海)

Gao Weijun 高　偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科助教授／西安交通大学兼職教授（在北九州）

Jin Xi 金　熙：博士（物理情報学）東京工業大学：日本ＳＧＩ㈱

Kwack Jae-Woo 郭　在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部非常勤講師

Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授

Park Chul-Ju 朴　哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育義明大学校流通経営学科（在ソウル）

Park Jungran 朴　貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科助教授 / 金海市綜合社会福祉館館長（在釜山）

Shi Jianming 施　建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科助教授（在室蘭）

Yao Hui 薬　会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師

Youn Seokhee 尹　錫姫：博士（商学）専修大学：嵩實大学・仁川大学非常勤講師（在ソウル）

阪神大震災被災特別奨学生

Chen Xiao 陳　暁：神戸大学（医学）

Horng Der-juinn 洪　徳俊：博士（経営学）神戸大学：中華民国台湾中央大学企業管理系副教授（在台北）

Wang Libin 王　立彬：神戸大学（自然科学）：㈱東洋インキ製造

１９９６年度奨学生

Chantachote, Viravat チャンタチョテ、ビラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部専任講師（在バンコク）

Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：イスラム文化センター事務総長（在京都）

Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co. Ltd 社長（在ヤンゴン）

Kim Woong-Hee 金　雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部助教授（在仁川）

Lee Nae-Chan 李　來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学知識経済学科（在ソウル）

Nam Kijeong 南　基正：博士（国際関係論）東京大学：国民大学国際学部（在ソウル）
Park Keunhong 朴　根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
Qiao Xin 喬　辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：ESC, Inc.（在米ペンシルベニア）
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学 [学習院大学]：ハイデルベルグ大学哲学部美術史学科教授 (在ハイデルベルグ)
Zhao Qing 趙　青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在東京）
Zhu Tingyao 朱　庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所上級研究員

１９９７年度奨学生
De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（技術史）東京工業大学：ナポリ国立大学「オリエンターレ」専任講師（在ナポリ）
Fang Meili 方　美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：（在ロンドン）
Isananto, Winursito イサナント、ウィルヌシト：博士 (応用科学) 慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革関連産業開発研究センター研究員（在ジョクジャカルタ）
Kim Woesook 金　外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系助教授（在神戸）
Laohaburanakit, Kanokwan Katagiri Noi ラオハブラナキット、カノックワン・カタギリ、ノイ：博士（言語学）筑波大学：（在プノンペン）
Lee Hyang-Chul 李　香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学校日本学科教授（在ソウル）
Li Enmin 李　恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学国際学部助教授
Nizamidin Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）
Wang Yuepeng 王　岳鵬：博士（医学）東京大学：マサチューセッツ総合病院心臓病科研究員（在ボストン）
Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学 [上智大学]：カルフォルニア大学アーヴィン校東アジア仏教文化助教授（在米カルフォルニア）
Zhang Shao-Min 張　紹敏：博士（医学）東京大学：エール大学医学部助教授（在米ニューヘブン）

１９９８年度奨学生
Adiole Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所研究員（在ナイジェリア）
Cao Bo 曹　波：博士（建設工学）早稲田大学：北京 NTT データ会社
He Zuyuan 何　祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻特任助教授
Hu Jie 胡　潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科助教授（在名古屋）
Kim Jaesung 金　宰晟：東京大学（仏教学）：ピタカ研究所所長（在ソウル）
La Insook 羅　仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国士舘大学政経学部非常勤講師
Lee JooHo 李　周浩：博士（電子工学）東京大学：立命館大学情報理工学部情報コミュニケーション学科助教授 (在滋賀)
Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：総合地域環境学研究所外国人特別研究員
Sun Yanping 孫　艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッガム病院放射線科研究員 (在ボストン)
Wu Hongmin 呉　弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子㈱
Xu Xiaoyuan 許　暁原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ゲノムセンター（在ニューヨーク）

１９９９年度奨学生

Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学生物学部遺伝子研究室（在ブラジル）
Hong Kyung-Jin 洪　京珍：博士（化学工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）
Hou Yankun 侯　延琨：博士（物理電子化学）東京工業大学：コーネル大学ビジネススクール在学中（在米 Ithaca）
Ju Yan 具　延：博士（農学）筑波大学：小西安㈱
Li Gangzhe 李　鋼哲：立教大学（経済学）：総合研究開発機構 (NIRA) 主任研究員 / 黒龍江大学教授
Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントーン・プラチヤー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部講師（在バンコク）
Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（教育社会学）一橋大学：人間科学研究所研究員（在ハノイ）
Wang Dan 王　旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト／昭光物産㈱
Yang Jie Chi 楊　接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学資訊工程系助理教授（在台湾桃園）
Yeh Wen-chang 葉　文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：台湾科技大学電子工程科助理教授（在台北）
Zhou Haiyan 周　海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：富山県立中央病院研修医 (在富山)

２０００年度奨学生
Jin Zhengwu 金　政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝㈱
Jung Jae Ho 鄭　在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子 LCD 総括 LCD 開発室開発 3Team(在韓 CheonAnn)
Jung Sung Chun 鄭　成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（在ソウル）
Ko Hee Tak 高　熙卓：博士（総合文化）東京大学：グローカル文化研究所首席研究員（在ソウル）
Lim Chuan- T iong 林　泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部助教授（在那覇）
Molnar, Margit モルナール･マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：ＯＥＣＤ研究員 (在パリ)
Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラーゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：東京大学大学院工学系研究科助手
Ren Yong 任　永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在米バッファロー）
Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：新日本監査法人・Ernst & Young ODA 部
Wu Yuping 武　玉萍：博士（医学）千葉大学：理化学研究所発生・再生科学総合研究センター研究員（在神戸）
Xu Xiangdong 徐　向東：博士（社会学）立教大学：キャストコンサルティング代表取締役／専修大学講師
Zeng Zhinong 曽　支農：博士（アジア文化）東京大学：㈱アジア太平洋国際交流協会社長

２００１年度奨学生
Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：早稲田大学、和光大学、東京経済大学、中央大学非常勤講師、早稲田大学モンゴル研究所客員研究員
Fan Jianting 範　建亭：博士（経済学）一橋大学：上海財経大学国際工商管理学院助教授（在上海）
Jeon Jin Hwan 全　振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設㈱技術研究所主任研究員
Jiang Huiling 蒋　恵玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：㈱ＮＴＴドコモ無線リンク開発部アンテナ伝搬技術研究員
Jin Xianghai 金　香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学政治学部副教授／同北東アジア国際政治研究所研究員（在延吉）
Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（工学システム）東京都立科学技術大学：松下電器産業株式会社先端技術研究所主任研究員 / 東京都立科学技術大学客員研究教授（在奈良）
Lee Hyun-Young 李　炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）
Lee Young-Suk 李　英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）

Liang Xingguo 梁　興国：博士（化学生命工学）東京大学：ボストン大学先端バイオテクノロジー・センター（在ボストン）
Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（公衆衛生学）東京医科歯科大学：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員
Qi Jin Feng 奇　錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）
Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター助教授

２００２年度奨学生

Abliz Yimit アブリズ　イミテ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院（在ウルムチ）
Baek Insoo 白　寅秀：博士（商学）早稲田大学：大韓民国産業資源部所属産業研究院副研究委員／高麗大学非常勤講師（在ソウル）
Chen Tzu-Ching 陳　姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：長栄大学助理教授（在台南）
Hu Bingqun 胡　炳群：博士（システム工学）日本工業大学：㈱和井田製作所（在岐阜高山）
Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：ＮＴＴ情報流通プラットフォーム研究所
Jo Gyuhwan 曺　奎煥：博士（地質学）早稲田大学：地球科学総合研究所地質部石油地質部門主任研究員
Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：一橋大学客員研究員 (日本学術振興会特別研究員)
Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャナ：博士（宗教学宗教史）東京大学：名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授（在名古屋）
Park Young-June 朴　栄濬：博士（国際関係論）東京大学：国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）
Sun Jianju 孫　建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本言語文化学部講師（在北京）
Wang Xi 王　溪：博士（電子情報工学）東京大学：東京大学情報理工学系研究科産学官連携研究員
Yu Xiaofei 于　暁飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部専任講師

２００３年度奨学生

Chae Sang Heon 蔡　相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：（財）忠南農業テクノパーク（在韓天安）
Chang Kuei-e 張　桂娥：東京学芸大学（学校教育学―言語文化）
Husel フスレ：東京外国語大学（地域文化）：昭和女子大学非常勤講師
Kim Hyeon Wook 金　賢旭：東京大学（総合文化―表象文化）：韓国放送大学・Ｋｙｕｎｇ－Ｈｅｅ大学非常勤講師（在ソウル）
Kwak Jiwoong 郭　智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科専任講師（在福岡）
Lin Shaoyang 林　少陽：東京大学（総合文化―言語情報科学）：東京大学大学院総合文化研究科助手
Lu Yuefeng 陸　躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）
Piao Zhenji 朴　貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外語学院日語教研室副教授（在北京）
Tisi, Maria Elena ティシ、マリア　エレナ：白百合女子大学（児童文学）：白百合大学児童文化研究センター研究員
Yamaguchi Ana Elisa ヤマグチ、アナ　エリーザ：一橋大学（社会学）
Yun Hui-suk 尹　熙淑：博士（材料学）東京大学：早稲田大学、先端科学・健康医療融合研究機構、生命医療工学研究所講師
Zang Li 臧　俐：東京学芸大学（学校教育学―教育方法論）

２００４年度奨学生

Ampong,Beryl Nyamekye アンポン、ベリル　ニャメチェ：東京医科大学（薬理学）

Chin,Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ　ヤンヤン：お茶の水女子大学（ジェンダー研究）：中山大学客員研究員（フルブライト研究員）（在広州）
Lee Jea Woo 李　済宇：早稲田大学（建設工学）：早稲田大学理工学研究科助手
Lee Sung Young 李　承英：博士（応用言語学）筑波大学：慶北大学校日語日文学科非常勤講師 (在大邱)
Meng Zimin 孟　子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授（在松山）
Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）
Napoleon ナポレオン：東京工業大学（機械制御システム）：株式会社ヤマタケ研究所
Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：（在ウクライナ、キエフ）
Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：東京大学（宗教史学）：富坂キリスト教センター研究主事
Tsai Ying-hsin 蔡　英欣：東京大学（法学）
Yang Myung Ok 梁　明玉：お茶の水女子大学（人間発達科学）
Ye Sheng 叶　盛：東京大学（先端学際工学）

２００５年度奨学生
Bao Lian Qun 包　聯群：東京大学（言語情報科学）
Han Junqiao　韓　珺巧：早稲田大学（建築学）
Han Kyoung Ja　韓　京子：東京大学（日本文化研究）
Jiang Susu　江　蘇蘇：横浜国立大学（物理情報工学）
Kim Bumsu　金　範洙：東京学芸大学（学校教育学―社会系教育 (歴史)）
Kim Yeonkyeong　金　娟鏡：東京学芸大学（心理学）
Lan Hung Yueh　藍　弘岳：東京大学（地域文化研究）
Tenegra Brenda Resurecion Tiu　テネグラ　ブレンダ　レスレション　ティウ：お茶の水女子大学（人間発達科学）
Vo Chi Cong　ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理・計算科学）
Wang Xueping　王　雪萍：慶応義塾大学（政策メディア）
Wong Kin Foon　王　健歡：総合研究大学院大学（統計科学）
Zhao Changxiang　趙　長祥：一橋大学（商学）

◇ ２００６年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、２００６年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

（１）応募資格（下記のすべてに該当すること）

１．日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのあるもの。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍するものも含む。

２．自分の所属する大学院研究科（研究室）および自分の居住地が、関東地方（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県）にあるもの。

３．国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のあるもの。

（２）交流活動

１．当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。

２．毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。

３．毎年７月に２泊３日の軽井沢リクリエーション旅行に招待します。

４．海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得したものには、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいるものは日本への旅費にあてることができます。

（３）奨学金の詳細

１．奨学金は月額２０万円です。２００６年度は１２名採用します。

２．奨学金の支給は１年間（２００６年４月～２００７年３月）です。継続は認められません。

（４）募集方法

１．奨学金希望者は、２００５年７月１日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ（http://www.aisf.or.jp）からもダウンロードできます。

２．２００６年度申込は、２００５年９月１日から９月３０日まで、郵便にて受け付けます。

（５）選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は１２月上旬に通知します。